

思いを繋ぐ

namely 嘗め ↓ ↑

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

両親を亡くし幼馴染みの家で静かに暮らしていた緋村剣心、だがある日……………

そして鬼達との戦いの中で自分が産まれてきた意味を知る。

オリジナル技もあります。

殆ど原作通りになる訳がなかった。

炭治郎も強化しております。

たまりにFateのキャラも出るかも

目次

始まりの日	1
託された物	5
最終選別と近づく絶望	12
藤襲山の死闘	19
正義の味方	26
花柱と風柱	33
熱き男	39
オレは…そこまで熱くない	46
此処は修羅の国か	53
花柱と風柱其の式	60
ありがとう	67
雷龍は轟き風は告げる	73
柱揃う	80
原作開始?!	
健気な思いと剣心の賭け	86
花に日輪を添えて	93
蟲柱の苦悩と日輪の旅路	100
偽りの家族	106
家族の在り方	112
柱合会議	118
騒がしきかな蝶屋敷	125
善逸と伊之助の恐怖体験	130
甘露寺に蛇、無一郎に日輪	135

無限列車編

列車の中の攻防

重なる面影

帰るべき場所

紡がれる思い

遊郭死闘編

剣心争奪戦??

遊郭へ

戦場を駆ける剣士達

笑顔

二人で一人

瞳を閉じて

何度でも

地獄の休暇編

休暇とは

温泉街での

その女誰?

刀鍛冶の里編

刀と持ち主

それぞれの戦場

悲しき夜明け

無限城編

行こう

雷は天を裂く

風想いを此処に

247 242 236

230 225 220

214 208 203

196 191 185

179 174 168 163

158 152 146 141

意志	302
人の域を超えし者	295
皆の力	286
殺戮の夜	277
去り逝く者	272
牙を向く月	265
月と龍	260
暴風	252

始まりの日

両親は流行り病で、オレが7歳の時に死んだ。そんなオレを引き取ってくれたのが近所に住む雪代家だ、元から互いの親が仲が良くオレの父さんも自分にもしもの事があつた時はと、お願いをしていたらしい。

オレ緋村剣心は雪代家に面倒を見てもらっていると言う訳だ。巴とオレは幼馴染みでもあるからその暮らしに不満は特になかった。一応弟とも仲良くしていると思う。

オレは元より剣の道に興味があつたから、暇を見つけては木刀で素振りをしていた。

「ふん!!ふん!!!ふん!!!」

「や!!!や!!!や!!!」

と横には縁もいた。

「剣心、縁、さつきから昼ご飯ができたって呼んでるんだけど?」

「ん?ああ巴か、悪い悪い気づかなくなった」

「わかつたよ!!ねえさん!!はやく行こうぜ!剣心!!」

「ん、ああ」

全く最初の頃はあんなに嫌っていたなのに今じゃすつかり懐いちゃって本当の兄の様に慕ってるんだもんふふ、あれから二年か
.....

「剣心!!昼からは打ち合いしようぜ!!今度こそ勝ってやる!!!」

「ん??ああそうだな、まずは飯を食べてしまおう」

「剣心の言うとおりによ縁、でも毎日毎日木刀を振って飽きないの??」

「飽きない」

「そんなに剣心は強いのか???」

「強い!!この二年間一度も勝てないからな!!!、よし食べた!!直ぐに始めよう!剣心!」

「ふっ、ああ」

「あつー！」

始めてかも、剣心が笑ってる所を見るのは小さい頃から一緒にいるけど笑わないからてつきり笑わないものだと思っただけであの笑顔を見たら不覚にもドキツとしてしまった。

私もはやくに母を亡くしてしまっているから私が母件姉の様な状態だ、父も今は仕事に行ってるがもう時期帰ってくる頃だろうか。

「やあ!!!」

縁が思いつきり木刀を横に振り抜くが剣心は紙一重でかわす、その後縁が木刀を振り回すが一太刀たりとも当たることにはなかった。そして

「ふん!!!」

木刀を振り回す縁の猛攻の隙きについて、下から木刀を打ち上げ縁の顎を飛ばすもちろん手加減してはいるが

「ぐわあああー、くそお!!また手加減したな剣心!!!」

「いや、今のはお前が無意識に反応したのだろう、じゃないと今頃気絶しているぞ!!!」

「もう一回だ!!!」

「剣心、豆腐を買って来て欲しいんだけど」

「ん?ああわかった、直ぐに行ってくるよもう時期日が沈むしな」

「ああそうしてまた、勝ち逃げする気だなあ!!逃げんな剣心!!」

「縁」

「はい!!!わかったよ姉さん、明日は覚えてろよ!剣心!!!」

「じゃ行ってくるよ」

「おつ!ただいまつと!おおう剣心お遣いか?日が沈む前に帰ってこいよ!!!」

「はい」

「おかえりなさい、お父さん!!!」

オレも急いで豆腐を買わないと、と考え小走りで豆腐屋に向かったが何故か今日に限って行きつけの豆腐屋は閉まっていた。他に豆腐屋はあるにはあるがここから少し離れているが走れば間に合うかと

考えオレは走って行く事にした。

「しまったな、すっかり日が沈んでしまったなこれは怒られるか」
とオレは日が沈み暗やみの中を走ってようやく家が見えた時だった。オレは嫌な感じがした。

急いで家に入ると、縁と父さんは血まみれになっていた、そして今まさに化物が巴に襲いかかろうとする瞬間だった。

「がああああああああああ」

横に置いてある、木刀を手に取りその化物に向かって突っ込んで行き、渾身の突きで化物を遠くに吹き飛ばしていた。何故こんな力がオレにと思ったが今はそんな事はいい巴を守らないと

「剣心!!!」

「巴!!!君は逃げろ!!!ここはオレが時間を稼ぐから頼む!!!」

「嫌!!一緒に逃げよう剣心」

と二人で問答をしている間に、化物がこちらに近づいてくる

「いい突きだったぜガキ!!だがただの木刀じゃオレは倒せないがな」

「なっ……………何なんだあれは」

「ひっ……………」

オレの目の前にいるのは人ではなかった、何なんだあれは？

「まずはお前から殺すか、ガキ」

「逃げろ!!!巴!!!」

化物が向かってくる、オレもなりふり構わず迎え撃つ木刀を顔面に打ち込み、それを左右に何度も畳み込む反撃する間も与えないこのまま押し切る!!

「調子に乗るな!!!ガキ!!!」

奴は鋭い爪を使い、オレの木刀を切り刻む、更に顔面に攻撃をしてくる何とか切り刻まれ残っている木刀の端を使い攻撃を逸らそうとするが左頬に攻撃が当たりオレは仰向けの状態になる

「があああああ………」

「これで終わりだな!!!死ね!!!」

奴は倒れ込んだオレに向かって爪を突き立ててきた、オレは死んだ
と思った。その瞬間目の前に、見覚えのある人影が

「な………巴何で」

「泣かないでください………これでよかったです」

「巴!!!」

「ち!!!邪魔が入ったか、まあいいこれで終わりだ!!!」

オレは反撃する気も抗う気も無くなりただその場に倒れ込んだ、
ああごめんな巴直ぐにオレも

「終わるのはお前だ、鬼、龍の呼吸壺ノ型、龍縫閃!!!」

「がああああああ」

「すまん坊主お前しか救えなかった」

姿を現した男は酷く悲しそうな表情をしていた。

託された物

その大男は静かにオレを見下ろしていた。

「通り合わせたのも何かの縁だ、仇はとった恨んでも悔やんでも死んだ人間は蘇らん、己が生き延びただけでも良しと思う事だ。」

「……………」

よくある事だ。この世に鬼がはびこる限り何の罪もない人達が殺されていく、そしてこれからも

以前は、鬼殺隊に所属し龍柱として鬼を切っても誰一人救えない事だつてあつた。

そう考えながら本来の目的である、酒を買いもう一度その場所へと赴く。

「オレが確実にできる事は、犠牲者の骸を葬ってやる事ぐらいか……………これは!？」

目の前にある光景が広がった。

「家族だけでなく、鬼の墓まで作ったのか?！」

「鬼だろうと、何だろうと死ねばただの骸だから……………」

「その石は?！」

「巴と縁とその父親、戦えるのはオレだけだったのに、ここへつく前に二人が殺され巴はオレを庇って……………だからせめて墓くらいはいい石をと、添える花も見つからないし」

男は何も言わずに手にある酒を、墓石にかける。

「美味しい酒の味を知らんで死ぬのは、不幸だからなオレからのせめてもの手向けだ」

「ありがとう……………あの」

「オレは、比古清十郎見ての通り剣を少々する」

「剣……………」

「小僧お前はかけがえないものを、守れなかったただけでなく一人いや三人の命を思いを託されたんだお前の小さな手は、その命の重さを知っている、だが託された思いの重さはその比ではないだろう、己を支え人を守る強さを身につける事だお前がこれから生きていく為に、そして大切な物を今度こそ守り抜く為にも」

「守り抜く為に……………」

「小僧名前は???'」

「剣心」

「剣士にはピッタリな名前だな、お前にはオレのとおきをおきとくれてやる」

それがオレの師匠との出会いだった。

師匠は山奥に住み、普段は陶芸家として活動をしているらしい。元々は鬼殺隊に所属していたらしいがある理由を気に戦線を退いている。修行が始まり一年が過ぎていた。

最初の頃は、辛かったが今はかなり楽になってきた。

「オラアどんどん走れえ!!!いいかまず、身体能力を上げる事が基本だ体力が無いようでは、鬼と戦う事は不可能だからな!!!ほらそこで翔べ!」

「ハアハア………くっ」

「全集中の呼吸は常に維持は出来てきているな、ならこれは避けられるか？」

と言いながら、背後から石を数個全力で投げつける。

オレは、今日隠しをした状態で走っている感覚を研ぎ澄ます、修行らしい。何かが背後から近づいてくるのを感じとり、頭を左右に振って回避する。そのまま走り続ける。

ここまで感覚を研ぎ澄ます事ができ、全集中の呼吸を維持が出来る頃合いだな。

「剣心!!明日より剣を持った修行に入る!」

次の日

「オレが今から、一度だけ全ての型を見せると言うよりも、お前に向かって型を放つ」

「はあ」

「いくぞ」

その後は全ての型を教えてもらったので、師匠はその型を各100回ずつ行う様に言われる。

三ヶ月後

師匠はオレを大きな大木の前に連れて来た。

「剣心この木を木刀で切り倒せ、それができたら修行は殆ど終わる」

「え?木刀ですか??真剣では、ないのでですか??」

「木刀だ、オレは半年かかった、おらわかったらさっさとやれ、オレは陶芸をする」

と師匠は言うのと、木刀を数本置いて、小屋の方へと歩いて行った。

「よし、とりあえずやるか」

それから毎日大木に向かって木刀を振る日々が始まった。呼吸を

使って技を放つが木刀ではやはり威力はあまりでない、だがそれでも技を放ち続けた。手の豆が潰れて痛くても包帯を巻いて木刀で技を放つ。

四ヶ月が過ぎた頃、オレはある感覚に襲われていた。まず気付いた事は二つある、技を放ち続けても全く疲れなくなった、それだけじゃなかった。目の前にある大木が透けて見える様になってきたそのおかげか木刀を振り抜く時何処に一番力が加わるかそして何処が脆いかを理解する事が出来きその日の内に大木を倒す事が出来た。

「やった……………」

「お前なら、オレよりはやくその世界に至ると思っていたが、その齢で入るか」

「世界??何なんですか師匠それは?」

「ほれ、物が透けて見えただろ?あれが透き通る世界だよ、あれに入らない限り大木を木刀で切り倒すなんざ不可能さ」

「よし、明日から最終段階に入る!覚悟しておけ剣心!!」

「はい!」

次の日オレの目の前に立つ師匠は腰に皿を括り付けていた。

「あの師匠それは??」

「これか??見ての通りの皿だお前は、今からこの皿を壊す事だけに集中する事だもちろんオレも攻撃をする」

「まさか、最終段階とは?」

「察しの通りださあここからが本番だ、剣心」

余りの迫力に思わずオレは、怯むだがやるしかないと呼吸を整えへ構える。

「行きます」

「おう」

こうしてオレは、最終段階の修行に入った。あれから更に

五ヶ月が過ぎオレは、11歳になっていたが未だに皿は愚か師匠に掠り傷すら与えられない。

と言うのも、師匠も透き通る世界に入れるからそれも当然なのだが

……

「どうした？剣心？もう終わりか??」

「いえ、まだやれます」

いい目だ、諦めるつもりは微塵をないな、コイツはまだまだ強くなる、いくら天賦の才を持っていようが強くなりたいたいと心から思わなければ、その才は磨かれる事はないからな。

そして13才になった頃

師匠とオレは何時もの様に向かいあっていた。

「行きます」

「おう」

師匠が返事をした瞬間、師匠は上空へと翔んだ。オレも迎え撃つべく上空へと翔ぶ。

「龍の呼吸。壱ノ型、龍縫閃!!」

「龍の呼吸。弐ノ型、龍牙閃・対空!!!」

互いの技が衝突する
!!!!!!

「剣心……………私は、貴方に傷付いて欲しくないのただ平和に」

「剣心……………無茶は駄目だぞ!!剣心!!!」

「おら！起きろ!!!剣心!!!!!!」

「は!?!夢?!!?」

と剣心の、頬に涙が。

「全く技を放つのに全ての力を込めるから、オレの攻撃を回避出来ないんだまあそうでもしないと、オレの皿を壊すなんざ無理だろうかな」

「え??」

ふと、師匠の腰に巻いてある皿に目をやるとパリツと音を起ててバラバラになっていた。

「これで全ての修行は、完了だ!!良くやった剣心!!」

「ありがとうございます」

「まあでも、ぎりぎりだったがな、丁度もう時期鬼殺隊の最終選別があるからな」

「最終選別……………」

「心配するな!剣心!オレに一太刀入れる事が出来たんだ、その辺の鬼には負けはせん!」

「あの!師匠一つ聞きたい事があるのですが……………」

「ん?何だ言ってみろ??」

「何故鬼殺隊を…………戦線を退いたのですか??」

「理由は簡単、オレが上弦の鬼を殺り逃がしたからだ」

「上弦??」

「いずれわかるさ……………、さあ剣心今夜は馳走だ、英気を養えよ!」

「わかりました」

その夜はかなりの豪華な食事だった、その時に師匠の鬼殺隊に所属していた頃の話しを聞いた。

次の日の朝

「ここから東に進むと、藤襲山と呼ばれる場所があるそこへ向かえ」

「わかりました、師匠お世話になりました」

「剣心、最後に言っておくオレはお前を不幸にする為に、剣を教えた訳じゃないからな」

「はい、ではオレはこれで」

これで、一段落だなこれからアイツがどう生きていくかは奴次第だがな、ちよつと寂しいが………、さてとアイツのこれからの無事を祈って仏像でも掘るとするか。

最終選別と近づく絶望

藤襲山、年中藤の花が狂い咲いている山、鬼殺隊士になる為の最後の難関。

ここに今一人の少年がこの地に踏み入ろうと、していた緋色の長い髪を後ろに束ねて緋色の刀を腰に指して。左頬には、三本の引っ掻き傷がある。

(ここが師匠の言っていた山か……………この匂いはあの花か)

と一人で考えていると、後ろから女の子が話しかけてきた。

「ねえねえ、君も最終選別を受けに来たの??」

と剣心は、後ろを振り返ると狐のお面を被った少女がいた。

「そうだ、お前もか??」

「うん、私は鱗滝真菰!!!」

「……………緋村剣心」

「よろしくね!!緋村君!!あのね良かったら一緒に他の人達が集まっている場所に行かない?」

一人だと、心細いしと真菰は考える。それにこの人……………。

「別に、構わないがオレはそんなにお喋りではないからつまらないと思うが」

「いいよ!ならばやく行こ!!緋村君!!!」

選別を受ける人達の集合場所に着くまで、剣心は本当に一言も喋らなかつた。話し掛けようとしても何を考えてるか読めない顔をしているが要所要所ではこちらを気にかけてくれるから何か多分だけど優しい人かなと、真菰は思っていた。

しばらく歩くと広場に着いた、剣心は辺りを見渡す。

(おそらく十九人と言った所か……………こんなにいるんだな)

「着いたみたいだね！・緋村君!!ありがとうございます!!ここからは別行動になるけど、一緒に合格しようね!!」

「ああ、鱗滝さんお前もな」

「真菰でいいよ!」

と二人で話していると、鳥居の前に二人の少女が現れた。

「皆様、今宵鬼殺隊最終選別にお集まり頂きまして誠にありがとうございますでございます。試験の内容はこの山に入り一週間生き延びるそれだけでございます。ですがこの先には鬼がいますのでご注意ください鬼たちは藤の花により外に出ることはできませんので、ではご武運を」

他の少年少女が山の中に入り始めた剣心を覚悟を決め山の中へと向かう。そして剣心は真菰に声をかける。

「真菰やばくなったら、オレの名を呼べ必ず駆けつける」

「え?.....うん!わかった!」

といい、剣心と真菰も山の中へと入っていく。

「来たか、繪宮」

「お呼びてしようか、無惨様」

「今回、貴様にやってもらいたい事がある、鬼狩り共の最終選別を行っている場所が判明した。

そこへ行き、鬼狩りになる子供の抹殺並びに藤の花に囲まれて出れない鬼達を私の元へ連れて来る事.....よいな?」

「お言葉ですが、無惨様そんな鬼狩りにもなっていない子供を何故?」

「念の為さ、用心に越した事はない」

「仰せのままに」

と返事をし、鬼は主の前から姿を消すその両目には上弦の伍の文字が刻んである。今藤襲山にとつてもない危機が迫っている事を、剣心達はまだ知らない。

「私の予感だとね、今回の最終選別は今までのどの選別よりも難しい物になるかも知れない」

と一人の青年が部屋から見える庭園を見ながら呟く。その話しを正座で聞く二人の剣士。

一人は顔、体に傷が何個もある少年もう一人は蝶の髪飾りを付けている少女だ青年は口を開く。

「お館様それは隊士になるためのには仕方のない事かと、オレは思いますが」

するともう一人の少女も

「私も不死川君の言うとおりとおりかと、でも今回は私の妹を選別を受けているので心配になります」

「実弥とカナエの言う事は確かに正しいと思うが、今回は私も嫌な予感がするんだ」

その言葉を、聞くと二人にも緊張感が走る。産屋敷家には未来を見通す力、先見の明があるからだ。

二人は黙ってお館様の話しの続きを待つ。

「念の為に、君たち二人にはここで待機をお願いしたい。その間の事は天元義勇に話してあるから」

「二御意」

ここから藤襲山までは、意外に近い距離にあるその為今回は万が一があれば動けるようにと二人は待機する事になる。

「妹が心配なんだな、胡蝶は」

「うん、何も起きなきやいいんだけど……………」

剣心はこの二日間常に動いていた。鬼がこちらに来るより前にこちらから仕掛ける為だ。何体斬つただろうか、既に二十を越えていると思う助けの声が聞こえれば即座にそこへ行き。鬼を斬る

一つ気がかりはあった。真菰は無事だろうか。

真菰は一人、無数の手が生えた鬼と対峙していた。

「くつくつくつまた、オレのかわいい狐ちゃんか」

「何よ！アンタこのお面を知ってるの？」

「ん？知ってるいるさ、お前鱗滝の弟子だろう？奴は自分の弟子に狐のお面を持たせるみたいだからな、それが目印になってるのさ」

「なっ!?まさかお前が私の兄弟子の錆兎や他の……………」

「ああその通りだ。お前で十三人目だ!!!」

「貴様!!!」

無数の手が真菰を、襲うそれを素早い動きで躲していく。

「すばしっこい奴だな、ならば手を増やす事にしようか」

更に追撃を加えてくる。真菰は、呼吸を整え迎え撃つ。

「水の呼吸!!壺ノ型、水面斬り!!!」

手を一気に、斬りつけ前進を始める。

(このまま、頸を斬る！錆兎仇は私が!!!)

「なら、これは斬る事が出来るかな?」

と無数の手を一つに纏め、巨大な手になったそれをそのまま叩きつ

けてくる

「こんなもの!!!水の呼吸!!肆ノ型、打ち潮!!!」

パキーンと音を、起てて刀が折れる。そして上空へと打ち上げられる。その瞬間真菰は思った。

（ごめん。錆兎、ごめん義勇さん鱗滝さん生きて帰れないで、ああ助けを呼べは……………）

巨大な手が真菰を襲う瞬間。

気づけば巨大な手は斬り刻まれ私はお姫様抱っこされていた、そして顔を上げると。

「だから、言っただけ危なくなったら呼べと」

何時も通りの仏頂面で剣心は現れたそして私を優しく木を背もたれにして座らせる。

「ごめん、でもアイツは私の兄弟子達を殺した奴だから私の手で……………」

「そうか、ならばその役はオレが受け持つ。」

「え?」

「何邪魔してんだ!!!お前—————!!!」

私が対峙した時よりも更に手が増えていた。その戦いの行方をしっかりと私は見ていた、つもりだった。

「龍の呼吸、参ノ型、龍翔閃!!!」

「なっ」

気づけば、私の前から剣心は姿を消し気づけば鬼の頸を落としていた。一瞬で、最初から私はわかっていた、匂いが違う私の師である鱗滝さん、もう一人の兄弟子現水柱の義勇さんこの二人の匂いを嗅いだ上でそう思ってしまった。でも何で声を掛けたかと言えば、悲しい匂いも強く感じたから余計に興味が、湧いたのだろうかと考えていると。

「もつと、はやく呼べはよかったものを」

「ごめんってば、緋村君」

「動けそうか??」

「何とか、でも刀が折れたから……………」

「なら一緒に、来い」

「わかった！よろしく緋村君!!」

あれから六日が経っていた。一人の少女が鬼と対峙していたその鬼もこの山でかなりの年月を生きており理性もある。

(まずい、毒がもう残ってない、しかもこの鬼理性があるおそろくこちらの情報も)

「どうした？攻撃して、こないのか、ならばそろそろ終わりにするが」

「うるさいわね！この糞鬼が!!!蟲の呼吸！蝶ノ舞!!戯れ!!」

「はやっぐっ!!!」

少女の、攻撃は頸に入るだが、頸は落ちない。

(やっぱり、私には頸を斬れない……………)

「頸を斬れないのかそれは、残念終わりだ」

鬼の正拳突きが少女の顔面に当たる時だった。

気づけば鬼の腕が斬り落とされていた。

「誰だ!!?オレの腕を斬ったのは」

「すまぬい、オレだ」

「貴様!!!あれ!?何でオレの頸が斬られて」

「斬られた事に気づかないとは、眠れ悪鬼……………」

コイツはあの時一番最初に、目に写った。女みたいな格好をしてた奴、背だつて私と変わらない。なんか段々悔しくなってきた。

ゆつくりと、少女に近づく剣心。

「無「別に助けてだなんて頼んだ覚えは、ありません!!!」

何故か助けた、少女に怒鳴られた。

藤襲山の死闘

オレは、思わず立ちすくんでいた。何故オレは怒鳴られたのだろうか。

「まあでも助けて貰ったのは、事実だし一応礼は言います。私は胡蝶しのぶと言います。十三歳です。助けてくれてどうもありがとうございます！」
更に凄惨な剣幕で言ってきた。しのぶと言う少女オレと背は同じくらいか。

「そうか………同い年だな」

すると、後ろから真菰がデカイ声で叫びながらしのぶの前に躍り出る。

「何ですか貴方???助けて貰ったのにその態度は???’」

「はあ???何よ!!!いきなり出て来て。別に頼んだ訳じゃないし!!」

「あっそ!!!もういい!!!行こうよ!!剣心!!!」

「ん??、ああそうだな」

と行こうと、すると何故かしのぶはオレの服の袖を掴む。

「どうした??胡蝶さん???’」

「しのぶでいい………あの私も戦う手段がその………」

「えー何よしのぶだったら、結局助けて欲しいんだー!!!」

「アンタはしのぶって呼ぶな!!!そうよ!もう毒も残ってないからお願いしますー!」

「ふっ、その辺に、しとけ真菰、わかったしのぶ一緒に行こうか」

と剣心は、微笑んだのだ。その瞬間固まる二人。そして二人して顔を合わせコシヨコシヨ話を始める。

「ねえ確か真菰って言ったかしら?一つ聞いてもいい??’」

「うん!そうよ!何よ??’」

「あの、剣心って笑うの??’」

「何剣心って呼んでるの?まあいいわ、始めて見た。なんかドキドキしたかな?」

「悔しいけど、私も」

と二人が何やら、話し込んでいるが何時までも此処にいる訳にも行

かないから。

「真菰、しのぶそろそろ此処から場所を変えよう」

「はい」

何か知らんが二人は仲良くなってると感じ、何故か嬉しくなる剣心であつた。

「でも、緋村君大方鬼は斬ったからもう残ってない筈……………」

「それ本当なの!?真菰、剣心??」

「まあ殆ど緋村君が斬ってたけど」

「うん」

「なら、もう終わったも当然ね!!何事もなく終わりそうね!!」

その時だった、三人の前に何かが降り立った。

「ほう、丁度目の前に少年と少女がいるか……………ではまずは」

咄嗟に剣心は感じとったこの鬼はこの山にいる鬼達よりも遥かに強いと。

小声で剣心はしのぶと真菰に呼び掛ける。

「しのぶ、真菰お前達二人は逃げろ……………そして他の受験者達にも伝え最初に応戦に避難しろ」

「でも緋村君は??」

「私は残るわよ!一緒に戦うわ!!!」

すると、剣心はもの凄い剣幕で。

「此処に居ると、戦いの邪魔になる!!!とつととお前達は行け!!!」

「わかりました」

二人は涙目になりながらその場を後にする。最後に真菰が

「死なないでね剣心……………」

剣心は返事をしなかった。

「あの二人には、攻撃しないのか??」

「残念だが私は女性を殺すつもりはない、だが男は別だ……………例えそれが少年であつてもな」

と鬼の手に双剣が現れる。

「そうか……………行くぞ」

「そうかやはり現れたかしかも、上弦……………」

と言いながら報告に来た鴉を撫でる。

「カナエ、実弥、やはり私の予想通りの事になった。どうやら最終選別の場の上弦の鬼が現れたようだ」

「上弦……………しのぶが!!」

「おい!!!胡蝶!!!つく!!お館様!!行ってまいります!!」

「カナエが慌てるのも無理もないだが、上弦の鬼が現れたのに今だに被害の報告は上がって来ないこれは、面白い事が起こりそうだ」

と一人部屋から見える星空を見ながらお館様と呼ばれる青年は呟いていた。

「しのぶ!!!待っては今行くから!!!」

「おい!!!待て胡蝶!!!」

「何よ!!!不死川君!!!!妹が危ないのよ!!!」

「落ち着けよ!それに気づかなったかあ??鴉から被害の報告が上がって来ない事に」

「あつ!!確かに……………何かごめん不死川君……………」

「気にすんなあ下の奴が心配って気持ちはわかるからよ、まあ気合い入れて行くぞ胡蝶!」

「うん!!」

(どうか、無事でいてしのぶ……………)

二人藤襲山へと、急ぐ。

キーンと何かが擦れ合う音が辺りに絶えず響きわたる。

「ほう、中々の腕だな、少年と見下してしたが」

「お喋りな奴だ」

「ふっお喋りは、好きだからな!!!ハア!!!」

と繪宮は右手の剣を突いてくる。が剣心は透き通る世界へと入り、刀の柄で防ぎそのまま右手を斬り落とす。

だが斬った右手は即座に回復する。左の剣を振りかぶろうとするが、その前に剣心の鋭い一太刀が左肩に入り肩事斬り落とす、そしてお互い距離をとる。

(回復が早すぎる、これが師匠の言っていた。上弦の鬼か……………)

「中々に手強い実は柱だったとか言う、ふざけたオチはないのかね??」

「柱???いやオレはそもそも鬼殺隊士ですらない」

「なるほど、嘘を言ってる様子は無いのだが君の力量はその辺の柱よりも遥かに上だ!」

と言いながら奴は上空へと飛び上がる。そのまま双剣を巨大化させて落下してくる。

「ごおーおーおー!!!龍の呼吸!!!参ノ型!!!龍翔閃!!!」

神速の、斬り上げにより頸を落としかけるが、頸元に何かが割って入っている。

(これは、盾かいつの間に)

「まさか盾を使う事になるとは……………」

(それに、何だ奴はまるでこちらの動きが読まれているような)

と考え事を、した時繪宮は剣心を見失う。

「龍の呼吸!!! 壱ノ型!!! 龍縫閃・斬!!!」

落下しながら切っ先を、立てて脳天に刀を突き刺す。

「ぐっああだああ!!!」

雄叫びを上げながら、持っている双剣を巨大化させ剣心に向かって放つが既にそこには剣心はいない。

「やはり、頸を落とさねば、倒せんか……………」

「驚いたはつきり言おう。剣技においては私より遥かに君の方が優れている」

「もう、諦めたか??」

「まさか。戦いかたを変えるだけさ」

と言うと、今度は弓を出していた。

「これが私の唯一の鬼血術、投影、私は見た事のある武器を形にする事ができる」

「言いか、そんなに喋っても」

「構わんさ、君の様な強き者と戦えるんだ。これぐらいなんて事はない」

と奴は弓を構える。

剣心を構えを整える。

「ハア!!!」

!!!!!!

「おおおおおおお」

!!!!!!

「しつぷ……………」

!!!!!!

「え??姉さんどうして此処に??」

と突然現れた姉に戸惑うしのぶ。横に何度か見た事のある風柱不死川がいた。

「ねえしのぶこの人達は??」

と辺りの避難している受験者達がざわついている。

「この二人は、柱よ真菰!!とついでに私の姉さん…」

「え?何で柱がここに??」

「そうよ!それを一番最初に聞きたかったのよ!!姉さん!!」

すると黙っていた。風柱が口を開く。

「胡蝶妹此処には、上弦の鬼がいる、だから俺達が来た」

「そうなの、しのぶでも良かった無事で」

「姉さん!風柱様!!なら急いでください!!」

「え??」

「どう言う事だあ??胡蝶妹
?????」

しのぶはこれまでの経緯を二人に話した。二人は信じられないと言った顔をしている。それもそうだろう上弦の鬼は強い今まで戦った柱は敗れているのだから、その上弦を相手どっている?それもしのぶと同じ年の少年が?と二人信じられないと言った様子だった、その時。

山の方では大きな爆発音が木霊していた。それも何度もだ。

「不死川君……………」

「行くぞ!!!胡蝶!!!」

無数の矢が絶えず剣心に目掛けて飛んでくる、それを神速の動きを維持して躲し続ける。

「疲れて来た頃かね??？」

「……………全然」

それは本当であった。透き通る世界を絶えず維持する事で無駄な動きが無くなる分体力の消費を減らす事が出来るがこのままでは朝日が来て逃げられるそれは避けたい。

「朝日が近いな……………これで終わりにするか」

と弓の弦をかなり強い力で引つ張る、タメを作って威力を上げるのだ。

(隙あり!!!)

「龍の呼吸、肆ノ型!!飛龍閃!!!」

剣の鞘をぶん投げる。

「何か来る!!ならばこちらも」

弓を放つがそれは鞘とぶつかる、だが弓の方が威力が高く鞘を壊し剣心の方へと向かう。

が既にそこには剣心はいなかった。

「何処だ奴は……………??？」

「龍の呼吸、拾式ノ型!九頭龍閃」

!!!!!!!

剣心が放つ九つの斬撃が繪宮の頸を巻き込みながら、横を通り過ぎつて行った。

正義の味方

奴の姿を、見失った、その時だった始めて見た光景が目に見えた。
九つの、斬撃が同時に私を襲ったのだああ私にこの少年の様な力があれば……………

静かに、振り返る剣心目に写るのは。

僅かに頸が治っている状態の繪宮だった。

「こいつは……………頸を落とした筈なのに……」

「まだまだ……………オレはまだなれてない」

「何度でも斬りつけるしかない!!、龍の呼吸!!!伍ノ型龍巢閃!!!」

高速の連続斬りを放つが斬った所からまた回復する、頸に斬撃が入ると思つた瞬間何処からともなく盾が数個現れ斬撃を防ぐ。そのまま頸が治りかける状態で此方に向かつてくる。

「こいつはさつきよりもはやくなってる!?!」

(不味いな鞘がない以上奥義とあの技は出せん。)

「オレは……………」

双剣を繪宮は此方に向かつて投げつけてきた。剣心はそれを弾こうと剣を振るがその二本は上空へと、更に投げつけて来るがそれも同じく上空へと。

(何だ何がくる不味いな接近される、迎え撃つまで!)

気づけば奴は目の前までいたそこから更に速度が上がった事に驚愕する剣心。しかも奴の投げた四本の双剣は剣心の背後から迫つて来ていた。

(これは……………後ろからもどうする全部叩き落とすしかない!)

「鶴翼三連!!!」

「龍の呼吸!!!伍ノ型!龍巢閃・乱!!!」

剣心は、斬撃の手数を更に増やすが速度の上がった繪宮の斬撃は腹を斬り裂く。

「ぐっ……………」

(やはり速度が……………)

「オレはなるんだ……………正義の味方にそして守るんだ」

「ふぎけるな……………!!罪もない人を襲うのを正義の味方とは言わない!!」

剣心は齒を食いしばり痛みにも耐え繪宮に近づく。

何でオレは正義の味方になろうとした、そうだオレは死にかけてる時に助けてもらったんだある人に助けられた後はその人と娘の鈴と一緒に暮らしたんだ。その人は霧矢と言った。

「四郎僕はね、正義の味方になりたかったんだこの日本には困っている人が沢山いるそんな人達も僕はもっと救いたかったでも、もう僕には時間がない」

「ならオレがなってやる!正義の味方にそしてオレが困ってる人を助ける!!」

「それは楽しみだ四郎、鈴を頼む」

「ああ必ず!!!」

それから鈴と共に生きた。その傍ら正義の味方を目指して色々な奴と殴りあったり、時には殺し合いすらもした、そんなある日の事だった。

鈴が殺された。聞いた話によるとオレに恨みを持つ奴らの仕業

だった直ぐにオレは殴り込み行つたが数が多くオレは返り討ちにあつた。自分自身これで終わりだと思つた時だつた。

「たった一人に大勢で挑むか……………」

気づけばオレ以外の人間は殺されていた。オレも殺されるのかと思つたが。

「此処で死なすには惜しいな……………」

「鬼となるがいい貴様のその在り方実に面白い……………」

そしてオレは、鬼となり悪い人間を殺しまくつたそして人を喰う内に自分は本当は何になりたかつたかを忘れてしまった、気づけば私は意味もなく人を食い続けたそしてこれからも。

「まだだ……………オレは」

「四郎もう、辞めて!!!もういいの」

「誰だ……………オレを邪魔する奴は」

と繪宮の視線の先に写つた人は……………。

「鈴……………」

(奴の動きが、今だ!!!もう一度!!!頸を斬る!!!)

「龍の呼吸!!!式ノ型!!!龍牙閃!!!」

そしてもう一度、繪宮の頸を飛ばす。

そうだオレは正義の……………今までオレは何人の罪もない人殺してきた?今オレが本当にしなくてはならない事それは。

「すまかつた、四郎僕の夢の為にここまで本当にすまかつた」

「霧矢さん……………」

「私も居ますよ四郎、ずっと傍に今度は離れたりしませんから」

「ずっと、一緒ずっとずっと」

「ありがとう、ありがとう、ありがとう、ありがとう」

「奴の体が……………」

剣心は体を剣を地面に、突き刺す形で支えて、静かに見守る。その同時に朝日が一面を照らし始める繪宮の体は塵になって消えて言った。

その瞬間、確かに聞こえた。

「ありがとう」

「え??」

剣心は辺りを見渡すが、誰もいなかった。

「ぐっ意識が……………」

剣心も気を失い倒れた。こうして最終選別は終わり、上弦が攻めてくる事態になっても被害は最小限に抑えられた、たった一人の少年の手により。

「不死川君!!!此処よ一人男の子が倒れてる!!!!」

「此処か!!!何だ鬼はどうなった?????」

すると、監視を、していた鴉が二人に向かって現状を話す。その話しを聞いた二人は。

「嘘っでしょ、しのぶと同じ背丈で同じ年の少年が……………」

「にわかには、信じれねえが鴉が言うんだ本当だろう、さてとりあえずオレはお館様に報告に行く！」

「なら私は、この子を蝶屋敷に連れて行くから!!後で蝶屋敷に来てね!!」

「おう!わかったあ、ならオレは先に行くぜ」

と不死川は先に帰っていった。そして入れ替わる様に二人の少女が走ってくる。

「姉さん!!!剣心は???大丈夫なの???」

「カナエさん、緋村君は???」

「あらあら二人共そんなにこの子が気になるのかしら??」

と問いかけると二人はそわそわし始める、妹のこんな仕草は、始めて見るからもう少し楽しみたいのだが今は治療が先決だ。

「大丈夫よ、緋村君は恐らく疲労で気を失っただけだと思うから、腹の傷は深いから急いで治療しないと行けないけど」

と言いながら剣心をお姫様抱っこするカナエ、それを見て顔を赤くする、真菰としのぶ。

「二人共試験は、合格なのよね??おめでどう!」

「ありがとう、姉さんでも今回は、殆ど剣心の……………」

「そうですよ……………ね」

「なら二人共はやく強くなって緋村君と一緒に戦える位にならなくちゃねでも大変よ彼多分私より強いから」

「え??」

「だってこの子、上弦の鬼を倒しちゃったのよ??百年ぶりの凄い事なのよ?」

「嘘……………」

二人は言葉を失った。

「さてと、真菰ちゃんも育手の元へ報告してから蝶屋敷へいらっしやい!なら行くわよ!しのぶ!」

「わかりました!!カナエさん!!!しのぶまたね!!!」

「真菰またね!!!蝶屋敷で待ってるから!!!」

かくして剣心は、治療を受けるべく、と言うより治療される為に蝶屋敷へと運ばれて行った。

「今回は鴉から報告を受けていたよ、わざわざすまない実弥」

「いえ、オレ的には今だに信じられないと言った心境なので」

「ふふっ、それは僕も同じだよ、でも期待はしていたんだ」

「と言いますと??」

「実弥は龍柱の話は聞いたことがあるよね??」

「はい、五年前まで柱をしていた剣士と確か上弦鬼をも圧倒する強さを持っていたと」

「そうだ、あの少年剣心はね彼の弟子さ、しかもわざわざ彼から手紙を送り付けてくる程の剣才を持ったね」

「では、あのガ…………少年が使う呼吸は……………」

「龍の呼吸だね……………実弥、僕は彼を柱に任命したいと思う君はどう思う?」

「オレはお館様のご意思にお任せします。それに今のオレでは手合わせしても恐らく…」

「わかった、この事を直ぐに彼に知らせて欲しい。どうせ蝶屋敷に行くんだろ?」

「はい、わかりました。ではオレはこれで」

「頼んだよ、実弥……………カナエとも仲良くね?」

「???はい」

「???と言いながら実弥は屋敷を跡にし、蝶屋敷を目指した。

剣心は、夢の…中にいた。最近は自分でも夢だとわかるようになってた。

そして何時もこの夢には巴と縁がいる。

「今回は、ちよつと無茶したかな」

と剣心は照れくさそうに言うと、巴は何も言わずに頭を優しく撫でてくれた。

と同時にオレは目を覚ました。頬からは涙が垂れていた。

「此処は??」

「……………」

何故か一人の少女がオレをじっと見ていた。

花柱と風柱

あれから、オレはどうなった?? 確か上弦の鬼と戦って勝利を確信した瞬間、気を失った気がするだがこの状況は何だ? 誰だこの少女は?? 「あの? 此処は何処なんだ?」

少女は、ただ微笑んでいるだけだ。

(何だ……この少女は感情が全く読めない……)

すると、少女は駆け足で部屋から出ていったとしても凄いい勢いで誰かが此方に向かって来ているのがわかった。

(恐らく此処は病院だろうか?、オレの腹の傷も処理してあるようだし)

「剣心……!!!」

とオレが寝ている部屋に髪が長く世間的からすれば美人に分類される……いやこの女性は……似ているな……と思わず声が漏れてしまった。

「巴……」

「はあ?? 誰と間違えてるのかしら?? 私はしのぶよ! しのぶ! わかった?」

「しのぶか? お前、何か雰囲気……すまん」

「これは髪を結んでないだけよ! 全くせっかく心配して急いで来てみたら、名前を間違える何でも目を覚ましてくれて良かった! 剣心!」

「それは謝るよ、すまんしのぶ……此処は何処なんだ?」

「此処は、蝶屋敷私としてのぶの家みたいな物よ後は鬼殺隊の病院と言えばいいかしら?」

とドアから別の女性の声が聞こえて来たから声の方を見ると、しのぶによく似た女性がさっきの少女を抱きかかえて立っていた。

「……あなたは??」

「私は花柱胡蝶カナエそこにいるしのぶの姉です。そして此方は妹のカナヲですよろしくね? 緋村君?」

とにつきりの笑顔付きで挨拶されオレは呆然としていた。

「ああ!! 剣心ったら何姉さんに見惚れてるのよ!!」

としのぶが突然怒りだした。

「いやこんな笑顔久しぶりに見たからぼーとなっただけだ……………」

「あらあらしのぶったら、ねえねえ聞いて緋村君しのぶったらね目を覚ましたったて聞いた瞬間にね」

「はい! 姉さんちよつと黙ろうか!!」

としのぶがカナエの口を塞ぐ。

「もう! 何するのよ!! 折角姉さんがしのぶのかわいい所を緋村君に教えてあげようとしたのにー」

「余計な事はしなくてもいいの!! 姉さん!!」

「ぶーぶーしのぶの意地悪、まあでも本当に目を覚ましてくれて良かったわ」

「いえ、ではこの腹の傷はカナエさんが??」

と剣心がカナエに質問すると。何故かしのぶがもじもじし始めるそれを見てニヤつくカナエ

「ああその傷はね……………ちら」

としのぶの方を見るカナエもちろん顔はニヤついたままだ。

「ああもう!! そうよ私が手当てをしました! 悪かったわね! 姉さんじゃなくて」

「いや、オレは別にそんな事は思っていないが……………」

「おい! 楽しんでるところわりいが邪魔するぜ!!!」

とまたもドアの所から声が聞こえてきた。

「不死川君!! もう!! 待ってたのよ!!」

「別に、オメエに様があった訳じゃねえよ!! そいつに用があるんだよ!」

「緋村君に?? 後一日位は絶対安静よ??」

「そんならいわかってる、ただあ連絡に来ただけだ任務に行くついでにな」

「あの、不死川さん……………それでオレに用とは何でしょうか??」

(こいつが上弦を、まったくこんなガキがいきなり柱だあ??オレあ絶対認めねえ)

「お館様がお前と話しがしてみたいだとき、いいか確かに伝えたぜ?? 後最後にオレあお前を認めねえからな!!」

「ああ!!ちよつと待って!!不死川君、ついでに前の任務の時の怪我の具合を見せて!」

と部屋から出ようとする、不死川の袖を掴んでその場に留めようとするカナエ。

「わかったよ、ならさつさとしてくれよ……………」

と不死川も面倒くさそうには、しているが満更でもない様子剣心もそれを察した。

何故あの剣心が察する事が出来たかそれは、龍の呼吸にある戦い方が影響している身のこなしの速さ剣戦の速さ人の考えを先読みする速さの三つがある、その内の人の考えを読む力それがこの状況を察する事が出来た要因だろうかそれにもう一つある透き通る世界だ、それを瞬時に発動しカナエと不死川の両方の心臓の鼓動等などを見てわかってしまったのだ。

「……………」

思わず剣心は黙ってしまった口を滑らしてしまえば此処は修羅場になるそう感じたからだ。

「でも、お館様は緋村君に何の用……………なるほど!緋村君明日お館様の屋敷に連れて行くからそのつもりでね!!」

「はい」

と言いながらカナエは部屋を出ていった恐らくは不死川の元へと向かったのだろう。

「なあ、しのぶお前に聞きたい事があるんだが」

「何?剣心」

「あの二人はどう言う関係何だ??」

「二人は……………よし!剣心今からコソツと覗きに行くわよ!」

「え?オレも?嫌オレは…」

「いいから!!気づいたんなら最後まで付き合いなさい!!!後気配の消し方教えて!」

姉の恋路がよっぽど気になるのだろうか、一瞬で気配の消し方を会得したしのぶ……その執念には流石にオレも引い………感動した。そして今オレとしのぶは二人で診察室の様子を隣りの部屋から聞き耳たてている。

「聞こえるわよね??剣心??」

「何故オレまでクソ言わなきやよかったな」

すると、二人の話し声が聞こえてきた。

「不死川君はまだそんな戦い方をしてるの??」

「ん?ああオレの血は鬼共には、酒の様なもんだからなそれにずっとこの方法で戦って来たんだ今さら辞める訳には行かねえよ」

「わかってるけど………ずっとこんな事してたらいつか壊れちゃうわ」

とカナエは不死川の胸元に頭を付ける。

「ちよつと剣心今どーゆ状況かしら?此処じゃ声しか聞こえないから全く……」

(よし、此処は透き通る世界で見てみるか………ハア!!!これは………黙ってしよう)

「とりあえずそつとしておこう、二人の問題だろう………」

「そうね………剣心の病室に戻りましょう」

「あんまり引つ付くな、胡蝶他の奴に見られたら誤解されるぞ……」

「別に誤解されてもいいのに………」

「まあ何だ、オレは行くからよあのガキの事頼んだぜ」

と言うと、不死川は診察室から出ていった。
「もう素直じゃないんだから………とりあえず緋村君の様子でも見ましようか」

と呟きながらカナエは緋村の病室を指すのであった。

「あら？緋村君一人なの??」

「お疲れ様ですカナエさんしのぶは仕事があるみたいなので」

「そうなの？あの子ったら………でもよかったわ！貴方とは話してみ
たかったし」

「オレは…そんなにお喋りではないですよ??」

「いいのいいの一つだけ聞きたい事を聞いただけだから!!」

「貴方は何者なの????」

「え?」

「貴方の実力は、ハッキリ言って異常だと思うの……」

「確かにオレは…始めて木刀を握った時に人を助ける為とは言え大人
を五人滅多打ちにしましたそれをみた町の人達はオレを神童だとか
言ってたみたいですけど、オレは何も才を持たない人間です」

「そんな事はないわよ！それに始めて握った時から、ひよつとしたら
緋村君は前世は凄い剣客だったのかもね!!」

「恐らくは………オレもそう思うようになります。ではカナエさん
オレは質問に答えたので此方も質問してもいいですか??」
「ん??何かしら??」

「カナエさんは不死川さんの事を好いているのですか??」

「ふえ????いや全然!!!そんな事はないからね!!!」

と真つ赤な顔で反発してくるカナエそれを見て剣心は。

「いえ、今ので大体わかちたので」

「もう!!!緋村君の意地悪!!!」

とカナエが怒りだした瞬間……………。

「こらあ!!!剣心!!!何姉さんをいじめてるのよ!!!」

「助けて!!!しのぶ!!!」

「いやしのぶ、カナエさんはな不死川さんをな」

「剣心ちよつと詳しく聞かせなさいよ」

「もう勘弁してー……」

!!!!!!

とカナエの悲痛の叫びが屋敷全体に木霊したと言う。

熱き男

次の日、オレはカナエさんに連れられお館様に会いに来ていた。

「緋村君此処で待っていていけばいいから終わったら鴉を飛ばして教えてね!!後昨日の件覚えてなさい……………」

「わかりましたあのすいませんでした」

「なら後でね!!」

カナエは一旦屋敷を後にする、そして一人になった剣心は庭園が見える部屋で正座になり考え事を始める。

(鬼殺隊の一番偉い人がオレに一体何の用なのだろうか?)

一人考え事をしてしていると、襖が開く。

「お待たせしてすまないね」

と一人の青年が部屋に入ってきたこの人がお館様と呼ばれる人なのだろうと剣心は考える。

「いえ、大丈夫です」

と剣心は姿勢を整えお館様と向き合う。

「そうか、では先ずは最終選別においての上弦の鬼の討伐よくぞ成し遂げてくれた」

「いえ、師匠からも話には聞いていたので何とか倒すが出来ました」

「ふ清十郎か……………僕も君の事はよく知っているよ、彼から貰った手紙にも自慢げに書いてあった」

「師匠とは、その文通をしているのですか??」

「ああそうだよ、僕的には彼には隊に復帰して欲しいとさえ思っているんだ」

「お館様……………ですが師匠は……………」

「わかっているよ剣心、彼は責任感が強い男だからね自分自身が許せないのだろうねでもね、今は違うんだ」

「違うと言いますと??」

「今僕の目の前には、清十郎の意志をそしてあとを継ぐものがあるわかるよね?剣心」

「オレが師匠の代わりに柱になればそうお館様は言いたいのですか？」

「そうだ、君にならできる」

師匠とのやり取りを思い出す剣心。

「いいか？ 剣心恐らくお前は速い段階で柱に任命されるだろう」

「柱……………」

「そうだ文字通り鬼殺隊を支える隊士の事を言う、柱になれば今まで以上に鬼を斬らねばいけないだろう」

「……………はい」

「だがそれで大勢の人達を救う事が出来る、お前は自分に慢心する事なく戦えそしてオレの意志を継いでくれ……………頼んだぜ
剣心」

ただ静かに剣心は頷いていた。

そしてやり取りを思い出しながら。

「お館様、謹んで柱の任……………お受けしたいと思います」

「よろしく頼む、剣心……………」

この瞬間、最年少で柱の隊士が誕生したのだった。

「ではさっそくだが剣心、柱としての初任務をお願いしますよ」
「はい」

「剣心とは別にもう一人、柱にと思うこと隊士が居るんだその子と一緒に下弦の鬼を討伐してきて欲しい」

「つまりオレが、その隊士を見て力量を評価すればいい……………そう言う事ですね?」

「そうだ、頼めるかな? 剣心」

「御意」

剣心は任務に経つ前に、カナエに鴉を飛ばした柱になった事これから任務が入った事を報告する為だ鴉が飛んで行くのを確認し剣心はその隊士がいる茶屋を指す事にした。

「よし、行くか」

「カア!カアカア!!!カナエ!!!緋村から!!!」

「あらあら? 以外に早かったのね、ん? 手紙? 何かしら?」

「ん? どうしたの?? 姉さん??」

「えーと何何、柱になりましたこれから任務に行ってきます」

「え? 剣心もう柱に?? しかも任務に?? 私に挨拶もなしに……………」

「そんなに怒らないのしのぶ、姉さんはしのぶが笑った顔が好きだなあ、なら私から任務が終わったら屋敷に顔を出すように手紙を送っておくわね!」

「別に怒ってないから!!」

すると、玄関から一人の少女の声。

「ごめんくださいー!!!しのぶ?? 緋村君の御見舞いに来たんだけど??」

剣心はまだ知らない、上弦の鬼よりも恐ろしい者たちが屋敷に揃っている事を……。

しかもよく見ると、真菰の後ろにも剣心に負けず劣らずの仏頂面な男がいた。

穏やか昼下がりと言う事もあり、小腹が空いたたと剣心は考えながら歩いていった。

(もう少いで、落ち合う予定の隊士がいる茶屋か…そこで何か食べるとするか…)

すると、茶屋の方から何やら声が聞こえてきた。

「わっしょい!!! わっしょい!!! わっしょい!!!」

(何だ?このデカイ声は)

剣心は恐る恐る店の中に入るそして例のデカイ声をだしている男に視線をやる。

(鬼殺隊の隊服まさか今回の合同任務はあの人とか)

と一人剣心が考えていると、向こうの方が此方に気づき話しかけてきた。

「やや!!君が噂の天才剣士緋村殿か???会えて光栄だ!!オレは煉獄杏寿郎!!よろしくー!」

「はじめまして緋村と言います、よろしく」

「いや!すまない!此処のさつまいもが美味くてな!よしでは行くとしましょうー!」

「あの、煉獄さん何で殿を使って呼ぶのですか?オレはあなたより歳は下なのに」

「何を言うか!!鬼殺隊は階級制度がある自分よりも階級の上の者には敬意を表する必要がある!!それに君は柱だ!!敬意を表するのは、当たり前前だ!!」

「そうなんですか、でもやはり殿はいりません緋村でいいですよ」

「いや!!柱の君にはオレは呼び捨てはできん!!」

「わかりました……なら緋村殿でいいです」

「うぬ!!では行こう!!緋村殿!!後オレには敬語はやめてくれ!」

と煉獄さんが言ってきたが聞こえないフリをして、二人下弦の鬼討伐に出発する。

一日かけて移動をすると、昔ながらな雰囲気がある一つの町に着いた。

「煉獄さん、鴉からの報告によるとこの町で少年少女が行方不明になっているそうです」

「なるほど!!では此処は一先ず二手に別れて探索するとしよう!!」

「その方が効率がよさそうですね、では煉獄さん発見次第鴉を飛ばすようにお願いします」

「うぬ!!承知した!!」

と打ち合わせをし二人は別行動をとる。

煉獄は先ずは人に聞き込みをする事にした。

(先ずは、聞き込みの方がはやいな!よし!あの子に聞こう!!)

と煉獄は一人の少女に話しを聞くことにした。

「やや!!そこの君!!少しいいかい??」

と煉獄は爽やかな笑顔で少女に尋ねる。その少女は少し浮かない表情をしていた。

「はい…あの何か御用でしょうか??」

「いや!その前にどうしたんだい?浮かない顔をして何かあったのかい??」

「あの………実は私の弟が昨日から行方不明ですと両親と探してるんです」

「なんと!!よしならその話しを詳しく教えてくれないか?力になりた

い！」

「でも、見ず知らずの方に」

「大丈夫だ!!オレは煉獄杏寿郎!!君の名前は何と云うんだい?」

「私は、朱里です弟は結城って言います」

其処から煉獄は朱里から話しを聞いた所によると、結城は友達と町外れで遊んでいた所突然居なくなったと言うそれを聞き煉獄は。

「よし!!!朱里ならば、その町外れに行ってみよう何かわかるかもしれない!!!」

「はい!!!」

そして煉獄と朱里は町外れの結城が遊んでいた場所に着いた。

「なるほど!辺りにはむむ……………あの建物」

「あの建物はずっと前から廃墟になってますけど」

「よもや……………朱里!!君は」

「私も行きます!!!」

「むむ!仕方ない!!わかった!!但しオレの傍を離れるな!」

「はい!」

と煉獄と朱里は二人廃墟へと赴く、たがこの時煉獄はあるミスをしていた緋村に鴉を飛ばし忘れていたのだった。

「なるほど、この建物には日の光が届かないのか」

「煉獄さん」

すると、向こうの方から足音が近づいてくる煉獄も臨戦態勢に入る。

「姉ちゃーん!!!!」

「結城!!!」

「ぬ、探していた弟か!!よかった!!無事で!!結城少年一つ聞きたい何があった?」

「遊んでいたら、鞭みたいな物が足に巻き付いてきてこの廃墟に引き釣りこまれましたんだそしてたら化物が居てそいつはこう言ったんだ「後からお前は食べることにしよう」とそれで今まで」

「朱里！結城！今すぐ此処はから……………」

と煉獄が二人に指示を出そうとする瞬間……………鬼が姿を見せる。

「貴様私の食料をどうするつもりだ??」

人間と同じ位の背丈に背中に鞭を二本装備し、目には下弦の参の文字が掘られていた。

更に煉獄は気付いてないが辺りを無数の何かが飛び回っている。

「ぬう！下弦の参か、だがやるしかないな!!!結城！朱里！下がっていろ!!」

「はっ」

こうして甲の隊士煉獄杏寿郎と下弦の参との激闘が始まる。

オレは…そこまで熱くない

「どうした?? 貴様はその程度か?」

と小呂地は二本の鞭を交互に煉獄へと打ち付ける。

「ぬう、なるほどこれが」

刀で自身に向かつてくる鞭を斬りつけるが鞭は少しすると、再生してしまふ。

(この鞭も恐らくは奴の体の一部かならば、やる事は一つか)

「どうした? 防戦一方とはつまらん! ならば此方から行こうか! 血鬼術、二連大蛇、蛇行の舞」

鞭はまるで生きているかの様にうねりを上げながら煉獄へと向かう。

「よし!! 炎の呼吸!! 肆ノ型盛炎うねり!!」

渦巻く炎の如き剣捌きで、向かつてくる鞭を全て叩き落としていく。

「なるほど、少しは出来るか! 血鬼術!! 二連大蛇、全裂!!」

鞭に対して先程迄とは違う力を加えてやる事により、ざまざまな方向へ向かう即ち全方位攻撃となる。

(先程迄とは段違いかならば!!!)

「炎の呼吸!!! 陸ノ型、炎流撃!!!」

炎を辺りに撒き散らつ様に刀を振りながら、間合いを詰め懐に入ると頸を狙う。

(とった!!!)

小呂地の頸を斬る瞬間何故か煉獄の剣は空を斬る。

(何だ今感覚が狂ったような??)

「ふ!!! 貫った!!! 鬼血術!!! 二連大蛇、全裂!!!」

全方位の攻撃が煉獄を襲う。が致命傷にはならないように全力で防御にまわるが一手間に合わず攻撃を受ける。

「ぐうう!!!」

(何故感覚をクソ!! あの子達だけでもどうにか!!!)

体中に鋭い鞭の攻撃を受け血が滲み出していた。

「此処までだな!!! ならば死ぬ!!! 鬼血術!!! 奥義!!! 二連大蛇、地走り!!!」
鞭を地面に叩き付け全てを巻き込みながら衝撃波が煉獄を襲う。

「煉獄さー………ん」

(すまない………二人共………)

「龍の呼吸!!! 陸ノ型!!! 土龍閃!!!」

反対からも別の衝撃波がその威力は小呂地の放った技をも呑み込み更に小呂地すらをも巻き込み壁に衝突した。

「ふっ、緋村殿!!! 君は中々熱い登場が好きな様だな!! 熱い男だ!!!」

「………いや、別にオレは熱くないそれにあなたは鴉で連絡してくださいと言ったのに」

「いや! すまない!!! すっかり忘れていた様だ!!!」

「後もう一つ助言をします、あなたは熱くなり過ぎて敵だけしか見ていないもつと周りにも注意を向けるべきです」

「なるほど! 了解した!!! 緋村殿あなたは此処でこの子を見ていてくれ!」

「わかりました、さっさと終わらせて下さいね」

煉獄は小呂地の元へと向かう。剣心は朱里と結城の傍に行き。

「二人共心配はいらないよ、あの人は勝つ必ずね」

と言いながら二人の頭を撫で落ち着かせるのであった。

小呂地は何とか体を再生させ起き上がる。

「くそ！何だ今の一撃は次元がまるで違った。まさか柱か……………くそ！ん??？」

「残念だがオレだ!!!さあそろそろ終わりにしようじゃないか!!!」

「ち!!!調子にのるな!!!鬼血術奥義二連大蛇!!!地走り!!!」

「炎の呼吸!!!奥義!!!煉獄!!!」

小呂地の放つ衝撃波を煉獄は業火の如き突進で衝撃波を突き破る。

(ちーだが奴はもう一つの秘密を暴いていない)

と次の瞬間。

煉獄は大きな声を出した!!!!

それに反応するかの様に無数のコウモリが落ちてくる。

(そうか！やはりコウモリかこいつ等が超音波をオレに送って感覚を鈍らせていたのか、流石だ緋村！)

「馬鹿な!!!オレの……………」

「終わりだあ!!!!!!」

煉獄の業火は鬼の頸を飛ばした、その瞬間煉獄の勝利が決まった。

「ふう、何とか勝てたか……………厄介な奴だった」

「終わりましたか??」

と剣心も煉獄に声をかける、二人も煉獄に駆け寄る。

「緋村殿あなたのおかげで勝てた様な物だ！だがこの二人が無事ではなかった！」

「いえ、あくまで鬼を斬ったのはあなただその事実が変わらない」

「ならそう言う事にしよう！、先ずはこの子達を両親の所へ連れて行くこうー！」

「ですね」

その後剣心と煉獄は二人を両親の元へ連れて行き、家族に見送られながら町を後にした。

「緋村殿!!今回は世話になった!!オレは君と友になりたいと思ってる」

「え??オレとですか?」

「ああ!そうだ!今日は助けられたがいつかはオレがお前を助けたいと思ってる!」

「ふふっ、その時を楽しみにしています、煉獄さん」

「緋村!!杏寿郎と呼んでくれ!!オレも君の事は緋村と呼ぶ!!後敬語はなしだ!」

「……………わかった……杏寿郎……………」

「改めて今後も宜しく頼む!!緋村!!」

「とりあえず杏寿郎お前怪我が酷いから蝶屋敷に向かってくれないか?カナエさんには話してあるから」

「うん?そうか!!!わかった!!!緋村お前はどするのだ??」

「オレはちよつと用事を片付けてから蝶屋敷に向かう」

「では、後でな!!!緋村!!!」

別れて杏寿郎は結局隠に運ばれて行った。

「上弦の月が消えた、それも柱でもない剣士に負けただと馬鹿な」

「繪宮め敗れるとは……………」

「へえーそんな強いんならオレも戦ってみたいなあーねえ？ 猗窩座殿?！」

「話しかけるな、カス」

「ビイイイー恐ろしい恐ろしい」

「醜いわね、全く」

「今後は、伍には墮姫お前がその座に着け陸には☒壺お前にするよいな?！」

「はい」

「ははあ!!」

「その剣士と遭遇した場合は全力で殺せよいな?！」

「」「」「承知」「」「」

「お館様、只今戻りました」

「入っておくれ、わざわざすまない剣心さて今回の任務どうだった?！」

「はい、杏寿郎は熱くなり過ぎるのが弱点ですが……………戦いに対する面構え、強敵に挑む姿勢充分柱になれる隊士かとオレは思います」

「わかった、ありがとう剣心もう下がってくれて構わないよ」

「はい、ではオレはこれで」

「後剣心的には、今回の下弦の鬼はどう感じた?！」

「……………杏寿郎の補助に徹しなければ、瞬殺できます」

「そうか、わかった」

「失礼します」

「いやあすまんすまん！此処まで傷が深いとは！！そんなに怒るな！胡蝶妹！！」

「全くです！！そんな傷で此処まで走って帰ろうとするなんて！」

と煉獄はしのぶにお叱り？を受けていた、傷は思いの他に深く危険な状態だったのにもかかわらず走って蝶屋敷に行こうとしたからだ。

「わかった！今度からは注意する！許せ！！」

「次はないようにお願いしますね！！所であるの………：………：剣心は??」

としのぶの後ろからも狐のお面を被った少女も煉獄に尋ねる。

「そうだよ！！緋村君は何処に行ったんですか??後始めまして煉獄さん！私は鱗滝真菰って言います！」

「鱗滝！なるほど！君が水柱の継子か！噂は、聞いているぞ！！」

「え？真菰あんた継子なの??？」

「そうだよ!!!今は新しい呼吸を練習してるけどね！、でもしのぶもでしよっ！」

「そうだけど」

「二人共柱の継子か！これは将来が楽しみだ!!!そうそう緋村だが用事

を片付けたら此方に寄ると言っていたぞ!!!」

と煉獄の返事を聞いた瞬間二人はニヤニヤし始める、そこに煉獄が爆弾を落とす。

「ん???どうした??お前達!!!さては緋村の事を好い……………」

と煉獄が喋ろうとした瞬間二人に口を防がれていた。

(一体何なんだこの人は?、何故オレを黙って仁王立ちでオレを見ている?)

剣心が蝶屋敷に着き門を潜ろうとしたら、門の目の前に左右バラバラな着物を身に着け深海を思わせる瞳をした男が緋村を凝視していた。

此処は修羅の国か

「何かオレに用ですか？」

「水柱、富岡義勇真菰の兄弟子だ」

と言いながら富岡は木刀を二本取り出し、一本をオレに渡してきた。

「あの？、富岡さん？此れで一体何を？」

（なるほど………この人は、オレの力を見たいと思っっているのか）

「お前に、真菰が相応しいか試す」

（後、オレの妹弟子兼継子を助けてくれてありがとう）

「いいでしょう、龍柱緋村剣心参ります」

（いえいえお安い御用です）

と何故か心が通じ合っている？義勇と剣心今二人の手合わせが始まる。

しのぶと真菰は煉獄の病室で緋村が来るのを待っていた。

「緋村君来るの遅いよね？まだかなあーん？あれ？」

と真菰は辺りをキョロキョロと見渡す。

「どうしたのよ、真菰??」

「いや、一緒に来た義勇は何処行ったのかなと思って」

「義勇ってあの剣心に負けず劣らずの仏頂面の水柱??？」

「よもや！水柱も近くにいいのか!!それは是非手合わせを」

しのぶに睨まれたので、思わず黙る煉獄。

「まさかのは思うけど、緋村君と手合わせしてたりして」

「そんな事あるわけないでしょ!こんな所で戦うなんて馬鹿よ!」

「それもそうだね!!!あーあはやく来ないかなあー緋村君」

蝶屋敷の前では水柱と龍柱の手合わせが始まっていた。

「……………」

互いに無言のまま木刀を打ち合っていた。剣心は透き通る世界は発動せず素のまま義勇と打ち合っている義勇は左右から高速で交互に打ち込むが剣心は苦にもせずなんなく受け切る。

(なるほど、これが水柱か……………下弦の鬼位、力はあるな)

(此れが上弦の鬼を討った剣士の力か？恐らく手を抜いてるな)

剣心は素早く義勇の突きを柄を使って防ぐと、そのまま柄を義勇の腹に当てる。

「つつ流石だ、真菰を頼む」

「ん??、あの何で真菰が出てくるのですか?」

「??真菰は最近お前の話しばかりするから、お願いしよう」と

「なるほど、ですが真菰は水の呼吸オレではあいつを鍛える事はできません」

「それも、そうだな」

(こいつオレの話しがわかるのか!嬉しい)

「それで、どうしますか?終わりますか?富岡さん」

「義勇でいい、そうだな鍛錬になる此処からは行くぞ」(本気で行く)
「どうぞ義勇さん」

三人でのんびりお茶を飲んでいると、隠が慌てて部屋にやってきた。

「真菰様!!!!しのぶ様!!!!!!」

「何???'」

「外で水柱様と龍柱様が」

「行こう!!しのぶ!!」

「うん!」

「待て!!!オレも行くぞ!!!!!!」

三人は呆れた表情で二人を見ていた、話しは少し前に戻る。

「水の呼吸!!!式ノ型水車!!!」

回転しながら向かってくるが剣心は臆する事なく接近する、そのまま型は使わずにただの斬り上げで回転を止める。

(なっ、水車を)

「回転が遅い……………行きます」

剣心の鋭い一太刀が迫る。此れを義勇は再度水車で防ごうとするも型を放つ前に先に剣心の一太刀がそれを阻む、そのまま剣心は左右に三連撃で木刀を打ち込んでくる。

「水の呼吸、肆ノ型、打ち潮」

三連撃を義勇は流れる様な四連撃で防ぐ。

(この技は、確か真菰が使っていたかあの時は刀が真菰の技に耐えきれなかったが見事な技だったな、だが義勇さんの放つこの技は……………流石だ)

「流石です、義勇さんそろそろオレも行きますね」

「褒めても何も出ん」

「水の呼吸、参ノ型流流舞い」

流れる様な動きで剣心へと近づく義勇。しかし

「龍の呼吸、伍ノ型、龍巢閃!!」

高速連撃に、より義勇は後方に飛ばされる。

そのまま、更に剣心は距離を一気に詰める。

(まさかこれ程とは)

「龍の呼吸、参ノ型、龍翔閃!」

(奴の先程の高速連撃今のでオレの中にある可能性が今繋がった気がする今なら、錆兎見ててくれ)

「水の呼吸、拾壹ノ型、凧」

剣心の高速を超える斬り上げ攻撃は何かを防がれた。

(ん??何だ今のは、恐らくは間合いに入った物を……………なるほどそれで凧か)

「ありがとう、緋村お前のおかげで型が完成した」

「それはよかったです、ではそろそろ終わらせましょう木刀を折った方の勝ちで」

「わかった」

「龍の呼吸!!!陸ノ型!!土龍閃・槍」

剣心は地面に強い衝撃を与え粒でを槍が如く、義勇に向けて放つ。

「水の呼吸、拾壹ノ型、凧」

再度義勇は風で防ぐがこの時木刀にはヒビが。

「龍の呼吸、陸ノ型!!土龍閃!!!」

今度は、剣心は本気で衝撃波を放つ。

義勇もそれを見た瞬間風で迎え撃つが木刀は折れ衝撃波は義勇を躲していった。

「オレの勝ちですね」

「最後の最後がお前の本気か緋村」

「さあどうですかね」

と二人が顔を合わせている。

そして今現在に至る、義勇はボロボロで剣心は無傷だった。

「こらあ!!!二人共何してるんですか!!!」

しのぶと真菰の怒号に、義勇と剣心はびくりと反応する。

「ん?しのぶとあ真菰だ元気にしたてか?」

「どうした?胡蝶妹、それに真菰も」

「緋村君も義勇も何してるんだよ!!隠の人達を怖がらせて辺りもボロボロだよ!」

「全く、柱二人が何とまあ馬鹿ですね」

「馬鹿……………」

「オレは馬鹿じゃない」

「緋村!!!次はオレとも手合わせしてくれ!!!」

「杏寿郎お前は先ずは怪我を治せ」

!!!!!!

その後、義勇と剣心は上からもお叱りを受けた、そして今現在二人は花柱の前で正座をしている。

「緋村君、富岡君、此処は病院なのよ??その病院の目の前で大暴れ??」

あの優しい花柱カナエでさえ笑顔で怒っている、それが余計に怖

かった。

「すみません、カナエさん」

「すまん、胡蝶」

「反省しているみたいだし今回は、これくらいにしとこうかしら？
それで富岡君もわざわざ緋村君を見にきたの??」

と三人の会話を隠れて聞いている、真菰しのぶ煉獄。

「緋村に真菰を託そうと思っていた」

この義勇の発言にそれぞれがリアクションをとる、まあ！と口に手を当て驚くカナエ、顔を真っ赤にして辺りをキョロキョロするしのぶ、同じ顔を真っ赤にし俯いている真菰、よもや！と驚く煉獄、そしてこの修羅場の中心にいる剣心は??と言った顔をしていた。

「だが緋村が教えてくれた、やはり真菰はオレの見るべきだと」

「その通りです、義勇さん真菰はあなたが導くべきです」

「え??ひよつとして義勇は、緋村君に私の指導をお願いしようとしたの?」

「??そうだが?」

しのぶとカナエは思ったこの水柱はやばいと、其処へ更に煉獄が斬り込む。

「全く緋村は、一つオレは思った!この二人!!どっちが好みなんだ??」

「あらあら!煉獄君いい質問するわね!どうなの?緋村君??」

「そうだな、気になるな答えろ緋村」

「ぶっ!!」

二人も思わず吹き出してしまった、剣心は考え込む。

だが今迄そんな気持ちで異性と接した事がない、他人のそう言う所には気づけるが自分の事となると。

「わからん」

「何と!!」

と煉獄は叫ぶ、義勇も。

「緋村……………お前は」

と義勇が言いきる前にカナエが突っ込む。

「緋村君!!!今から任務が入ってくるまで私と話しあいましょう!!!」

「え?何の話ですか?」

「好きなタイプについてよ!」

「なら行くわよ!!緋村君!!、しのぶ!真菰ちゃん!後は私に任せて!!」

剣心は心の底から思っていた蝶屋敷は修羅場か……………。

その後は皆それぞれの持ち場へと、戻って行った。

しのぶと真菰はカナエが剣心に変な事を、教えていないか心配で気がなかった。

剣心は、いずれ気づくある少女が自分の……………。

花柱と風柱其の弐

剣心は不死川と共にとある山に来ていた、複数の隊士が行方を晦ませた為だそれにより柱の二人が派遣されたと言う訳だ。

二人既に鬼の縄張りの中へと侵入している。

「不死川さん……………恐らく鬼はこの辺でしょう」

「つけ、いちいちうるせえ、わかってるよ」

（つたく何でこいつと任務何だよクソ！、こんな奴と）

二人が辺りを警戒していると、真上から鬼が飛びついてきた。

「けっ！いきなり出て来やがったな!!!風の呼吸!!!参ノ型、晴嵐風樹！」

飛びついて来た鬼に対して、不死川は刀を回転させ生まれる風圧と剣戟で鬼を斬り刻む。

「……………」

鬼は、斬られても悲鳴も何も上げない。

「おいおい、もう終わりかよお？」

（妙だな、この鬼……………恐らくは傀儡か）

と剣心は予想し、透き通る世界を発動させる。

（大方この鬼の術だろうな、……………見つけた）

と剣心は即座に不死川の耳元へ鋭い突きを放つ。

「龍の呼吸、弐ノ型、龍牙閃」

「なっ!!てめえ何を」

と不死川が剣心に向かって喋る前に透明になった鬼が頸を斬られた状態で姿を見せる。

「馬鹿つな、何故オレの姿を」

「……………お前に教える、義理はない」

鬼は消えて行った。

「おい緋村あ、何余計なマネしてんだよ」

「お言葉ですが……………これは二人の任務です、助け合うのは当然でしょう」

「そうかよ、おいとつとこの怪我人を蝶屋敷に連れて行くぞ、手えかせ」

「はい」

不死川は隊士を抱えながら考える。

(天才だのと言われているからだかだか十三のガキが柱だあ？それにてめえはさも当たり前前の様な面しやがって……)

今迄もてめえは自分の守りたいもんは守って来たんだろう、そう勝手に思うだけでもイライラするぜまあオレが思った奴とは少しは違うみたいだな)

二人は蝶屋敷へ到着し、しのぶへ怪我人を託す剣心はそのまま次の任務へと向かって直ぐに屋敷を出ていった。

(もう!!! 剣心だったら!!! 直ぐ行っちゃうんだから!!!)

としのぶは治療を終え………、廊下を歩いていると話し声が。

「どうだったの？ 不死川君、緋村君との任務は………」

「ああ?? 緋村かぁーまあオレが思っていた奴とは少し違うかな」

不死川のその言葉を聞き思わず笑顔になるカナエ。

「何だよ？ 人が真面目に話してんのによお？」

「違うの！ ただ緋村君はあんな感じだからね、周りに誤解されてるみたいだし」

「そらそうだろ！ あの面、水柱といい勝負だぜ」

「そんな事言いながら、不死川君楽しそうね!!」

「つけ!!! 別にそんなんじゃないやねえよ、オレはまだ認めてねえしな」

「二人の誤解もはやく解けるといいわね」

と言いながらカナエは不死川に近付く。

「だからよ、そんな事したらお前………」

「不死川君、本当は私の気持ちに気付いてるんでしょ??？」

「………でもオレ達は、鬼殺隊士だ」

「そんな事は、わかっているでも気持ちは伝えておきたいの

……………ねえ不死川君は私の事どう思ってるの???

と目を見て言われ。不死川は思わず視線を逸らす。

「それはよお……………」

と不死川が答えようとした、瞬間鴉がカナエの元へ翔んできた。

「カーカーカー!!!カナエ任務だ!!!任務だ!!!」

と鴉が高らかに叫んだ事で二人は再び動き始めた。

「あら?もう残念ね、ごめんね不死川君……私任務があるみたい」

「ああ」

「ねえ不死川君???私が帰って来たら返事を聞かせてくれる???

「わかった」

「約束よ!!!」

とカナエは満面の、笑みを浮かべて屋敷を出て行った。それを不死川としのぶ、カナヲ、更に新しく蝶屋敷の住人となった。アオイ、なほ、すみ、きよ皆で見送った。

この時は、まさかあんな事になるとは誰も考えもしなかった。

「不死川さん」

「何だあ?、胡蝶妹???

「姉さんの事……………」

「わかってるよ」

その頃、剣心はと言うと。

「カアカアカア!!! 剣心!!! お館様からの指示だ!!! 休め休め!!! カア!!!」

と突然の休暇を命令されていた。

「解せぬ」

最近夜な夜な若い女性が一人また一人と行方不明になると言う、事件が起きている。

「この街ね」

花柱胡蝶カナエは、一人事件が起きている街に到着した此処は近くには温泉もある事から多くの人が訪れる。

その日は、今にも一雨来そうなどんよりした天気だった。

昼の間は主に聞き込みをする、教えて貰った情報から推測してみると行方不明になるのは女性でも若い女性に限定される事だ。

(なるほどね、だからこそ私が……)

そして夜即ち鬼達の時間がやってきた。

カナエは一人路地裏を歩いていた、すると横から誰かが声をかけてきた。

「おやおや? こんな夜更けに一人で出歩くなんて、危ないよ?」

カナエは瞬時に理解した、こいつは鬼だとしかもこの鬼は。

「こんばんは? 鬼さん、一つ聞いてもいいかしら?」

「うん???何だい?君はかわいいから何でも答えてあげるよ!!」

「この街で若い女性が行方不明になってます、貴方の仕業でしょうか??」

「そうだよ!!皆親と喧嘩して家を飛び出してきたとか言っていたからね!可哀想だと思ったんだ、だから僕が救ってあげたんだ!」

「そうですか……………わかりました」

とカナエは剣を抜き、臨戦態勢に入る。

「おや?ひよつとして僕と戦うつもりかい??よし!君も救ってあげるね!!」

(あの瞳にある文字は……………上弦の式)

不死川は蝶屋敷にいた、カナエの帰りを待っているためだ。

「不死川さん、其処にいたら冷えますよ」

「いや、オレは此処にいる」

しのぶは内心全くといいながら、更に声を掛けようとする瞬間鴉から連絡が入る。

「カアカア!!花柱!!上弦と交戦開始!!風柱!!しのぶ至急応援に迎え!!」

不死川としのぶは屋敷を飛び出した、どうか無事でと心の中で叫びながら。

「オレは、童磨!!よろしくね!!」

と言いながら、手に持つ鉄製の扇をカナエに向かって振り降ろす。がカナエは刀で防ぎ尚かつ素早く三回斬撃を放つ。

「おや?へえーこの速度には、ついてこれるのかー」

「当たり前です、女だからと言って甘く見ない事ね!」

今度はカナエから斬り込む、横から刀を振って童磨の頸を狙うが体を逸らされ躲される。

「うんうん、いい斬り込みだね!!よしなら血鬼術!!冬ざれ氷柱」

無数の氷柱がカナエに向かって翔んでくる。それを何とか躲す。

(はよい攻撃、ならば此方も)

更に氷柱がカナエを襲う。

「花の呼吸!!式ノ型、御影梅!!!」

襲ってくる氷柱を連撃ので撃ち落とすし、更に次なる型を放つ。

「花の呼吸!!参ノ型、百合の花!!!」

鋭い一太刀が童磨の体を斬り裂く、が怯む事なく童磨も更に血鬼術を放つ。

「やるねえー！君は柱だね!!!その強さ!!血鬼術!!!蓮葉氷!!!」

扇を大きく振って冷気を飛ばす。

(この冷気は……………一旦距離をとるしかない!!)

と距離をとるカナエ、だが追撃がくる。

「あは!!!まてまて!!!血鬼術!!!冬ざれ氷柱!!!」

それを御影梅で弾くが、氷柱が体を斬り裂く。

「おやおや??大丈夫かい??はやく諦めてくれると助かるんだけど」

と童磨は優しく、だがカナエは気付いていた。

「貴方……………可哀想だわ」

「え??何だって??」

「貴方は感情がないのね……………」

「……………」

童磨は無言で扇をカナエに向かって振り降ろす、がカナエは難なく防ぎ。

「花の呼吸!!!伍ノ型!!!徒の芍薬!!!」

(連撃かならば此方も)

「血鬼術!!!枯園垂り」

互いに連撃を放つがカナエが競り負け、後方に弾かれる。

(つく、まだよ!!!)

型を放つべく呼吸を整えようとした時、突然カナエは吐血する。

静かに別れの時が近いているのだった……………。

ありがとうよ

突然の吐血に驚く、カナエ。

(これは……………そうか肺を恐らくはさっきの氷が…………)

「どうたのかい??ひよつとして肺が…………そうか可哀想に」

(このまま無理に呼吸を使い続けたら…でも此処で引く訳にはいかな
い)

と静かに構えるカナエ。

「ええ!!辞めときなよ!!!それに君に勝ち目はないよ!!」

カナエは決死の覚悟で斬りかかる。

「花の呼吸!!漆ノ型!!乱桜!!」

体を回転させてその遠心力で攻撃をする。

(どうやらこれが奥の手か)

「血鬼術!!!枯園垂り!!!」

今度はカナエが競り勝ち童磨に斬撃をお見舞いするが、頸には攻撃が入らなかった。

途端に膝を着く、カナエ。

「さあ避けないと危ないよ???血鬼術!!!冬ざれ氷柱!!!」

「つつ!!!」

何とか攻撃を躲すが、もう躲す力も残っていない。

(ごめんね、不死川君……………しのぶ……………皆)

「ごめんね!!!苦しい思いをさせて、これでおしまい!!!」

と童磨が扇をカナエに、向かって振り降ろす時だった。

「龍の呼吸、肆ノ型、飛龍閃」

翔んできた刀が童磨の腕を飛ばしていた。そして童磨は刀が翔んできた方向を見ると其処には誰も居なく、その男は先程迄戦っていた女性を壁に寝かせ飛ばした筈の刀を既に持っている状態だった。

(今の一瞬で、なるほど速いなこの男)

「どうして、緋村君が此処に???'」

「温泉……………に宿で寛いでいたら鴉から連絡を」

「緋村君……………温泉好きだったのね」

「カナエさんは此処に居てください、後はオレが」

と立ち上がり童磨の方を見る。

「君は確かあのお方からの情報にあつた、繪宮君を倒した鬼狩りか!!!」

「それがどうした?」

「君と遭遇したら、全力で殺せと命令を受けていてね!!!」

剣心と童磨は激突する。

不死川はカナエの、元へと急ぎながら考えていた。

(此れでもし二度とカナエと会って話しも出来なかつたら……………クソが!オレが素直になれたらカナエ……………お前は絶対死なせねえ、そして生きて帰れたらお前を嫁に貰う例えお前が嫌がってもな……………頼む間に合え!!!)

「姉さん……………」

「血鬼術!!!冬ざれ氷柱!!!」

カナエの時とは違い、高速で氷柱を剣心に向かって飛ばす。

「氷か、これでカナエさんはやられたのか」

「へえ僕の攻撃を躲しながら喋れる何て凄い!!!」

絶え間なく氷柱を飛ばすが、剣心は高速で剣を振りながら躲し続ける。更に一瞬で童磨の間合いに入ると左右に斬り込みを入れるが童磨も扇で防ぐ。

(……………なるほど、これは中々)

と剣心は考える。

「考え事かい???血鬼術!!!凍て曇!!!」

凍てつく氷を粉状にして放つが剣心はその場で、

「おおおおおお!!!」

自身の剣気を周囲に放って全て吹き飛ばした。

「え?嘘」

と見ているカナエも思わず声が出た、今思えば剣心が戦う姿を見るのは始めてだから仕方ないが

自分の時とは明らかに鬼の動きが違う。此れがこの鬼の力と考えるしかなかった。

「中々滅茶苦茶だねえー君は」

「遅い……………」

腕を斬り裂く一閃、童磨は考えた。

(どうしたものか、強いな彼オレも出し惜しみをしてる場合じゃないかも)

対する剣心も

(透き通る世界で先読みして斬り込みを入れても反応するか、夜が明けける迄にいけるか)

両者はほぼ同時に距離を詰める、が剣心が遥かに速く攻撃に移る。

「龍の呼吸!!参ノ型!龍翔閃!!」

斬り上げを放ち顔を、斬り裂く。

「く、血鬼術、枯園垂り」

「龍の呼吸！伍ノ型！！龍巢閃！！」

互いに連撃を、放つが剣心が放つ連撃は神速の連撃童磨が対抗できる筈もなく無数に斬り裂かれる。

「嘘……………参ったな」

堪らず距離をとる童磨、僅かに動揺さえ見える。

「どうした?？」

「くっ」

その時、不死川としのぶが到着した。

「カナエ!!!!」

「姉さん!!!!」

戦場の様子を見て二人は絶句している、膝をついて回復に務めている鬼とそれを静かに見ている剣心。

「てめえがカナエを、!!!!」

不死川が、童磨に斬りかかろうとするが剣心が止める。

「不死川さん、カナエさんは大丈夫です急いで屋敷に帰って治療すれば助かります」

「本当か……………緋村……………」

「剣心…………まさか一人で」

「ふざんなあよ!!緋村!!!オレも戦う」

すると、剣心はしのぶすらも見たことのない慈愛を込めた表情で不死川に話す。

「不死川さん、貴方にとってカナエさんは何なんですか??貴方が一番知ってる筈」

「わかったよ!!!緋村!!!但しカナエを屋敷に運んだら!オレはまた此処に戻る!!」

「ごめんね……………剣心…」

と不死川がカナエを抱えその場をする前に剣心に声をかける。

「剣心!!!、ありがとよ」

その声を聞き剣心は、静かに微笑んだ。

!!!

「血鬼術!!!冬ざれ氷柱!!!」

剣心は、龍巢閃で何なん防ぐ。

「不意打ちか、つまらん真似を」

「とりあえず、此れで倒せないかなと思ったけどしようがないね!もう辺りがどうなつても仕方がない!!!」

(雰囲気が変わった、本気でくる)

剣心も構えを本来の形に戻す。

「行くよ!!!血鬼術!!!寒烈の白姫!!!」

氷の氷像が二体現れ、辺りへと冷気を放つ。剣心も堪らず後退をする。冷気は辺りを凍らせながら剣心へと迫る。

(凍結の範囲が今迄の比ではないな)

「龍の呼吸!!!陸ノ型!!!土龍閃!!!」

剣心も地面を斬り上げ衝撃波を放つ、冷気すらも容易く巻き込み童磨に向かうが。上空へと翔んで衝撃波を躲す。

「まさか……………これ程とは、血鬼術!!!結晶ノ御子」

空中で小さな氷像が二体童磨の扇から現れた。

(先程の氷像とは何か違うな……………何をするつもりだ?)

と剣心が思考する中、童磨と氷像二体は同時に血鬼術を放ってくる。何倍も増えた氷柱をかるうじて躲して行くが更に次の術を放ってくる。

「この子達もねオレと同じ威力の血鬼術を使う事が出来るのさ!!!血鬼術!!!寒烈の白姫!」

(……………なるほど二対一か……………)

辺りを凍らせる冷気は先程よりも遥かに高い威力で襲いかかる。

「龍の呼吸!!!陸ノ型!!!土龍閃・伍連!!!」

が衝撃波を、五つ放ち前方の冷気を全て吹き飛ばし更に氷像に斬撃を放つ。

「龍の呼吸!!伍ノ型!!龍巢閃・乱!!!」

神速で全方位を斬り裂く様に辺りに放つ、氷像は粉々になって塵になつて消えた。

「嘘???ならば五体出すしかないね!!!血鬼術!!!結晶ノ御子!!」

更に氷像を五体出し更に術を放とうとするがその瞬間。

「龍の呼吸!!!拾壺ノ型!!戦乱龍撃閃!!!」

突進しながら突き更には斬撃を放ち続ける、加速していく為威力はどんどん上がっていく。

五体の氷像を一瞬にして斬り刻み、童磨の頸に斬撃を入れる。

がそれは予め用意していた、氷像だった……………。

(やはり……………か奴は??後ろか……………)

「危ない危ない!!!念を入れといてよかった!!!でも此れでおしまいだね!!!」

(つち、まさかこんな小細工を上弦の鬼が使うとは……………)

「血鬼術!!!!霧氷睡蓮菩薩!!!!」

現れた巨大な観音は剣心事辺りを全て凍らせた。

雷龍は轟き風は告げる

辺りは氷の塊がいくつもできており、まさしく地獄絵図と言ってもいい有様だった。

そして徐々にはあるが夜が明けようとしていた、以前黒い雲もちらほらあるが。

「やれやれ危なかったなーでも、これで終わったかな」

氣を失ったカナエを蝶屋敷に預け後はしのぶに任せ不死川は劍心の戦っている所へ急ぐ。

(散々好き勝手言いやがってえ、あの野郎!!待ってやがれ!!!)

「とりあえずオレは此処からお暇しようかな」

と童磨が此処から去ろうとした瞬間背後から氣配が、まさかと童磨が振り返ると。

「どうした??まさか倒したと思ったか??」

「どうして??確かに」

「もう時期夜が明ける……………行くぞ」

と劍心が迫るが童磨は逃げの一手をとる。

(逃げる気か、ならば此処は……………仕方ないな)

劍心は童磨に近付きつつ刀を天に向かって突き上げた、その瞬間雷が鳴り出しその内の一つが近くに落ちた、そして劍心はその雷の光を自身の刀で反射させそのまま童磨の目を斬り裂く。

「龍の呼吸、秘ノ型、雷龍閃」

「え?????目が」

斬り裂くと同時に辺りを眩ゆい閃光が照らした。

童磨は激しく動揺していた、何故なら童磨の目は光を失ったからだ。

「何で回復しないんだ、目が見えないそんな事が君はオレに何をした??」

「雷龍閃、相手の視力を奪う技オレを倒さない限り目に光が宿る事は
ない」

「つく!!!!」

「まあ此れでお前は、終わりだがな……………」

と剣心が童磨に近付くその瞬間。

「月の呼吸、伍ノ型、月魄災禍」

無数の実現する斬撃が童磨と剣心の間割って入る。

「誰だ??」

と剣心が技を翔んできた方を見ると其処に居たのは。

「上弦の壺、名を黒死牟……………」

「上弦の壺」

と剣心は型を放つ構えに入る。

「そう慌てるな……………鬼狩り……………戦うつもりは……………ない」

「何??」

「それにもう時期……………夜明け此度は此処まで……………」

「逃がすと思うか??」

と剣心が距離を詰めようとするが。

「月の呼吸、漆ノ型、厄鏡・月映え」

地を這う斬撃が剣心の行く手を遮る。

「……………逃したか」

「また……………次会うときは……………」

「ごめんよ黒死牟殿、わざわざ助けに来てくれて」

「いや……………奴に興味が……………あっただけ……………」

「全く今後は、更に戦いは激しさを増しそうだね、あーああのお方に怒られる」

「それは……………仕方無き……………事」

その後、童磨は無惨に叱られました。

不死川が街に辿り着くとその有様に思わず血の気を引いてしまった、今現在は隠が後処理をしている最中だったがそれでも剣心と上弦の鬼との戦いの余波はこれ程とは、と考えていた。

剣心は、一人天を見上げていた。

(取り逃がした……………不死川さんにしのぶにカナエさんに何
と言えば……………)

「おい!!! 剣心!!! 聞こえてんのかあ????」

「不死川さん??……………すみません逃しました……………」

「何言つてんだあ上弦の式と殺りあつて生きててくれたんだあ、それだけで充分だろお」

「上弦の壺が加勢に入つてこなければ……………いや言い訳ですなこれも」

「まさか上弦の壺迄も……………取り敢えずは剣心、オメエの傷の手当もしないとな」

「わかりました。あのカナエさんは??」

「カナエならしのぶが大丈夫だつて、連絡がきただがもう隊士としては……………」

と不死川は、齒を噛み締めていた。

「そうですか……………」

「オレはお前に謝らなきやいけねえ、剣心お前一人に戦わせちまつたあ」

「……………いえ、不死川さん貴方の判断は正しいそうオレは思っています」

「実弥でいい、オレはお前を誤解してたあみたいだ、剣心お前はひよつとしてえ」

「……………実弥さんオレは守れなかっただからこそ貴方は守るべきだつたそう思つただけです」

「ああ、剣心オレはああいつを許さねえしのぶも同じ考えだあ」
「……………はい」

「あいつはオレとしのぶで必ず倒す!!地獄を見せてやる」

「実弥さん奴に関してある情報があります」

「ああ??」

その後、後処理は隠に任せて剣心は疲労により気を失つた実弥は剣心を担いで蝶屋敷へと急いだその日の内に今回の戦いの事は、鬼殺隊全体に伝わった。

上弦の式と花柱が戦い一命は取り留めたものの隊士として戦う事はできなくなった、更には花柱を救出すべく、と言うよりもあらかじめお館様が保険として近くに剣心を配置していた事により龍柱が二人の戦いに乱入……し上弦式対龍柱の戦いになった。

見ていた隠は信じられないものを見たと言った様子だった。上弦式を圧倒する強さ、トドメを刺す瞬間にまさかの上弦の壺も乱入するが時間切れになり戦闘は終了となった。

その日より龍柱は鬼殺隊最高戦力と謳われる様になった。

それともう一つ、嬉しい情報がある胡蝶カナエは三日後に覚ました、それと同時に傍にいた風柱が思い告げてまさかのその日の内に籍を入れてしまったのだ式は全てを終らせてから行くと二人は話しあつて決めたらしい、喜びと阿鼻叫喚が飛び交ったそうなあれから更に一週間経つが未だに龍柱、緋村剣心は目を覚まさない。

「おい、しのぶお前いい加減に休めえ」

「大丈夫ですよ、義兄さん………好きでやってるだけなんで」

「そうかよお、しのぶいいかあ?? 一人で背負い込むなよあいつは二人で倒すぞわかったかあ?」

「はい」

あれから眠りについて緋村は目を覚まさない、しのぶが言うにはただの疲労による物だとは言ってはいるがこうも寝たままだと気にはなる。

実弥もお館様の配慮もあり蝶屋敷に身を置いている、柱としての警備を其処からでも通える距離に変えてもらっている。

「実弥君………緋村君は??」

「わかんねえな、ったくいい加減に起きやがれってんだ………」

「ふふ心配なのね実弥君は………ねえ後弟君の話しだけど」

「わかつてるよ」

と二人で話していると、一人の少女がカナエの元に。

「あら??カナヲどうしたのかしら??」

この少女は栗落花カナヲ胡蝶姉妹が保護した少女だ、彼女らの義妹になると言うことは実弥の義妹になる。

「カナエ姉さん私も戦いたい………」

「………本気なのね??」

コクリと頷く少女、それを黙って見つめる二人の男女。

剣心は夢の中にいた、一人の少女と向き合っていた。

「すまん、巴………また心配をかけてしまったね」

「………」

「でも今回は間に合ってよかったと思ってる、実弥さんの大切な人を守れた………やっと強くなれたんだと実感できた」

と巴は無表情だが剣心は静かに微笑むすると、巴を微笑んだ。

「やっと笑ってくれた………」

「貴方が笑えば私も笑いますよ、それに貴方は自分を攻めてあまり笑わなくなったから」

「………」

今度は逆に剣心が思わず黙り込む。

「もう、はやく目を覚ましてあげてください」

「え?」

「貴方の事を心配している、女の子もいるんですからはやく安心させてあげて」

「……………わかった、行ってくる……………巴」
と剣心は、言うとは巴は優しく微笑んだ。

静かに、目を開けるとすぐ隣には。

一人の女の子が椅子に座りベットにうつ伏せる様にして眠っている。

気配に気付いたんだろうか、バツと顔をあげ視線の先には。

「おはよう、しのぶ」

柱揃う

やっと目を覚ましてくれた、気付いたら私の目からは涙が溢れていた。

「剣心ごめん、私……………私……………」

としのぶは剣心の顔を見れず俯いてしまう。

「しのぶ、顔をあげてくれ実弥さんにも言ったがオレはあの判断が正しいと思う」

「剣心……………わかった」

「わかってくれればいい」

「あの!!!剣心一つ頼みがあるの?」

「ん??何だ??しのぶ?」

「私に剣を教えてほしい!!効率よく毒を鬼に打てるようにそれにあいつを倒す為に」

「……………わかった、明日から時間がある時は此処による」

「あらあらしのぶったらそんなに喜んでやっとうふふ」

「おいしいカナエそんなに妹を、いじめんなよお」

「姉さん、義兄さんいつから其処に??」

「剣心ごめんってどこから」

「最初からじゃないのよ!!!」

その後は、煉獄、義勇、真菰が見舞いにきてくれた。その日の内に任務に戻ろうとするものぶに止められ次の日からの復帰となった。

剣心は、一人蝶屋敷の縁側で夜空を見ていたら真菰が近づいてきた。

「……………真菰か」

「緋村君、隣いいかな??」

「好きにするといい」

「凄いね、緋村君皆君の話題で持ち切りだよ！同じ同期として鼻が高いな!!」

「そんな事はない、真菰も甲の隊士だろ？それに新しい派生の呼吸も大分形になってきただろ？」

「うん、派生を作るって言ったら義勇がいじけるから大変だったけどね」

「……………それは」

「ねえ、緋村君!!明日朝一に私と手合わせしてくれないかな??」

「オレと??」

(しのぶとも約束しているがまあいいだろう)

「うん、新しい派生の呼吸を緋村君に一番に見てほしいんだ!!」

何故オレ??と剣心は考えたが口に出したらまずいと考え気にしないことにした。

「では、明日の朝一」

「うん!!!よろしく!!緋村君!!!」

と真菰は笑顔で屋敷を後にする、その様子を一人の少女が拳をブンブンと動かしながら見ていた。

翌朝剣心と真菰は庭で木刀を持って向かいあっていた。

「行くよ!!!緋村君!!!」

「ああ」

と真菰は呼吸をしながら剣心へと剣を振る。

「雲の呼吸、肆ノ型、高積雲!!」

高速の連続突きを剣心に放つ真菰、それを剣心は木刀の柄を使い全て防ぐ。

「嘘???!、流石鬼殺隊最強だね!なら雲の呼吸、漆ノ型、積雲!!」

高速の突き変化をつけながら再び剣心に放つ。

(此れが、真菰の剣技かなるほど……………これなら近い内に柱に任命されるな)

と考えながら剣心も型に入る。

「龍の呼吸、壱ノ型、龍槌閃!!」

瞬間真菰の前から姿を消し、上空から剣を振り降ろし真菰の木刀をへし折る。

「悪くない……真菰まあ相手がオレと言うのもあるがその………」

「大丈夫だよ!!!そんな事気にしないで!!私がお願した事なんだから!!」

「そうか、すまんな上手くできなくて」

「また手合わせしてね!!!なら私は、行くから!!!」

「ああ」

「朝からそんなに元気なら私の稽古にも付き合って貰おうかな、蟲の呼吸、蝶ノ舞、戯れ」

「おっと、しのぶ不意打ちはどうかと思うぞ」

連続攻撃を剣心に放つがひよいと躲されてしまった。

「このまま今日の稽古始めましょ!!!」

「何かしのぶ、お前怒ってないか??」

「べっ別に!!!続き行くわよ!!!」

その日からしのぶとたまーに真菰と手合わせが日課になっていき、メキメキと力をつけた。二人は柱に任命される事となった。

柱合会議、その場には柱と呼ばれる剣士がいた。

岩柱、悲鳴嶼行冥、蛇柱、伊黒小芭内、風柱、不死川実弥、炎柱、煉獄杏寿郎、水柱、富岡義勇、音柱、宇髄天元、龍柱、緋村剣心、の七人だ、この前までは旧姓胡蝶カナエが花柱を務めていたが先の戦いで戦線を退き今現在は、七人だった。

「不死川!!!あれから!奥方殿の調子はどうか??」

「ん??ああおかげで日常生活は、支障なく過ごせる様になったぜえ」

「まさか胡蝶めが不死川とありえないな」

と煉獄と不死川の会話を聞き小言を言う小黒

「んあ??なんか文句でもあんのかあ??伊黒??」

「南無……………嗚呼二人の男女が夫婦になる実に尊い」

「まさか胡蝶が目を覚ますと同時に告るたあ派手派手じゃねーか!!!」

「所で煉獄、今度貴様の継子と手合わせをしてやりたいのだが」

「ん??ああ!!!いぞ!!!伊黒!!!甘露寺も喜ぶ!!!」

と話してる中、義勇と剣心はボソボソと会話をしていた。

「緋村、真菰が世話になったみたいだな、やはりお前だ」

「たまたまですよ、義勇さんそれにオレは真菰の、面倒は見ません何故なら」

「ああそうだな、緋村……………」

「よお剣心、たまにあオレとも手合わせしろ」

「ん??それはするいぞ!!不死川!!!オレも緋村と戦いたい!!」

と騒がしくなってきた所で双子の幼子が。

「お館様の御成です」

と一同静まり帰り、即座に膝をつき頭を下げる七人。

「半年振りだね皆、カナエの事は剣心礼を言うよ、君のおかげで彼女は助かった」

「いえ、結局上弦、壺、式を逃した事には変わりありません」

「ふ、君は相変わらずだね、剣心安心したが今回の件は誇るべきだ他の者もそう考えている」

とお館様が他の六人を見ると静かに頷いていた、それを見て剣心は思わず微笑んだ。

「それに今日は、新しい柱の顔合わせの日でもあるんだ二人共入っておいで」

と二人の女性がお館様の隣に移動し正座の姿勢になり、頭を下げる。

「この度は、蟲柱の称号をいただきました胡蝶しのぶと申します。お見知りおきを」

「この度は、雲柱の称号をいただいた、鱗滝真菰です！皆さんよろしく!!!」

「この二人に、新たに柱となってもらうことにしたよ皆いいかい？」

七人全員静かに頷く。

「更に他にも優秀な隊士がちらほらいるみたいなんだ、十三歳の子供らしいが凄腕らしいそれに杏寿郎の継子も中々と聞く」

うぬ!!と頷く杏寿郎、何故か赤い顔をする伊黒。

「嗚呼戦える隊士が増える事は実にありがたい」

「オレは柱を、……………離せ緋村」

「義勇さん貴方の話しをわかるのはオレと真菰だけ何ですから」

「全く義勇は、相変わらずだね!!」

「ですね、富岡さんそんなだから皆に」

「オレは嫌われてない」

「こらしのぶ、義勇さんの方が先輩なんだから」

と剣心、義勇、しのぶ、真菰も雑談を始めるが。お館様が入り指を口に当て皆を静かにさせる。

「このまま優秀な、隊士も増えるようなら最悪柱の籍を増やす考えもある」

「それはいいですね!!お館様!!派手派手じゃないですか!!」

「それは皆の活躍にかかっていると考えている、十二鬼月の動きも気になる今後の皆の活躍を期待しているよ私のかわいい子供達」

九人全員が、御意と、返事をし柱合会議は終了となる。

「しのぶ」

「どうしたの??? 剣心??」

「無理はするな……………それとあのカナヲお前の継子にする気か?」

「わかっているは、剣心でもそれはこっちの台詞だわ!そうねカナヲは才があるから」

「そうか……………しっかりお前が導いてやれ」

「おい剣心、カナヲはそんなにやわじやねえぞ」

「実弥さん、わかってます貴方が誰よりも、心配してるって事は」
「うるせえ」

と顔を真つ赤にしながら去っていった不死川だった。

「緋村君、あらためてよろしくね!!」

「ああよろしくな、真菰」

と挨拶を、すると真菰も任務へと向かっていった。

「緋村……………遠いぞ」

「ですね、はやめに行きましょう今回はよろしく義勇さん」

義勇と剣心これからとある山に向かう。

原作開始??

健気な思いと剣心の賭け

「吹雪いてきましたね、義勇さん」

「オレは……………苦手だ」

「寒くなってきましたからね……………この辺りでしようか？」

龍柱、緋村剣心、水柱、富岡義勇今この二人はとある山にきている鬼が出たと言う情報を得た為だ今回二人での任務になった理由は突然鬼がその山に現れた為だ、今迄なら縄張りを作り活動するのが鬼の基本だろうその為念には念をの考えで柱を二人派遣する事となった。

それから一晩剣心と義勇は手分けして山の探索を行ったが鬼を見つける事ができなかった。

オレはある小屋を見つけた、その中を覗くと全員食い殺されていた。

(……………恐らくは鬼の仕業か、ん??この足跡は…………)

剣心はその足跡を追うことにした。

「頑張れ、禰豆子鬼に何てなるな!!!」

(何でこんな事に、オレが家に帰ってれば)

と今にも、少年が食われようとしたその時、一人の剣士が刀を振り下ろしてきた。

「何故お前は……そいつを庇った??」

(何だこの人は??、それに手に持つてるのは刀??まさか禰豆子を)

「オレの妹何だ!!!禰豆子は!!!」

「……………妹か……………違うなそいつは鬼だ」

と言いながら剣心は即座に兄から鬼となった妹を奪い取る。

「なっ、やめろ!!!妹を殺さないでくれ!!!お願いだから」

「ならば、何故お前はオレに向かって来なかった?」

「……………それは」

「それに此処でコイツを見逃せば大勢の人が食われるだろう、だから此処で斬る」

「禰豆子は人を食ったり何かしない!!!オレがさせないから!禰豆子を人間に戻してみせるから」

と少年はいわゆる土下座の構えになる。

「だからお願いします、禰豆子を殺さないで下さい」

「断る!!!オレは鬼を斬る!!!嫌なら力づくで止めてみせろ!!!」

と剣心は、鬼になった妹に刀を突き刺す。

「やめろ!!!」

!!!!!!

少年は斧を片手に剣心に向かって突っ込んでいき、振りかざすが当たるとる筈もなく空を斬るだけだった。

「終わりだな……………」

と剣心は、少年の背後に周り込み手刀を首筋に当て気を失わせようとする。

(ごめん……………父さんオレ守れなかった)

「炭治郎、どんな時でも諦めてはいけないヒノカミ様はいかなる時でもお前を助けてくれるよ」

「……………父さん」

「さあ炭治郎息を整えてヒノカミ様になりきるんだ、そうすれば守れるきつとね」

「父さん……………ありがとう」

(なつ、耐えただと……………コイツは)

「此処でやらなければ、禰豆子を守らなくては、ヒノカミ神楽、円舞!!!」

少年は緋村の手刀に耐えただけでなく、攻撃を仕掛けてきた。

(此れは、全集中の呼吸???しかも何だ??この型は見切れん)

と剣心は妹を持ったまま攻撃を躲すが何と服が斬られていた。

「……………何だ??今のは??」

(ぐっ、体が軋むでもこのヒノカミ神楽なら戦える!!!)

再度少年は剣心に向かって斬りかかるが。

「二度はオレには通じない……………」

少年の攻撃を躲しながら背後に周り込み今度は鞘で攻撃をする。ようやく気を失ったようだった。

(この手応え、コイツ……………頭硬いな)

と考えていると、妹が剣心の拘束を振り解き兄の元へと駆け寄る。

(しまった、食われる)

其処で剣心が目の当たりにしたのは。

(守る所作だと……………鬼が??)

と妹が襲ってくるのを、剣心は兄と同じく鞘で頭をうち気絶させる。

「ふう……………さてまずは義勇さんいるんでしょ

??」

と辺りに声をかけると物陰から。

「そいつ等をどうするつもりだ?? 緋村」

「この二人はオレが見ます、取り敢えずは屋敷に連れていきます」

「鬼を庇ったら、隊立違反になるぞそれでもか??」

「はい……………オレはこいつ等兄妹に賭けてみたい」

「わかった、緋村がそう言うならオレも乗ろう」

「ふっ、物好きですね義勇さんは」

「お館様への報告はオレがする、後は任せろ」

と二人が話し込んでいたら。

「炭治郎、置き去りにしてごめんね彌豆子を頼むわね」

「あれ?? 此処は?? 彌豆子は??」

と炭治郎が辺りを見ると、横に寝かせてある彌豆子を見てホッと息をならす。

「目が覚めたか」

と炭治郎が声のする方を見ると一人、人が増えていた。

「俺たちは鬼殺隊と言う組織に所属している、名は緋村剣心」

「富岡義勇」

「あの、オレは竈門炭治郎です！こっちは妹の禰豆子!!」

と自己紹介をしたら緋村と言う人がある提案をしてきた。

「炭治郎、鬼と共に生きていくのははつきり言っただけで難しいだろうだが人に戻す方法もあるかもしれん」

「はい」

「今二つの選択肢があるお前は此処で一人で暮らし妹は此方で保護する」

と更に緋村は言葉を続ける。

「もう一つは鬼殺の剣士になる事だ、鬼の始祖を探し出しそいつに人に戻る方法はないかを聞き出す此れがもう一つの道だ」

「なります！緋村さん!!オレは家族の仇をそして妹を人間に戻す為にも」

「そうか……………義勇さんお館様への報告お願いします、後からオレも報告をするので」

「わかった……………」

と言うと、義勇はその場から音もなく消えていった。

「よし、先ずはお前の家族を弔ってやらねばな」

「はい」

そして家族を弔って炭治郎は緋村と共に山をおり、ある屋敷にやってきた。

「あの？緋村さんこの屋敷は??？」

「此処はオレの家だ、ほら妹は此処に寝かせるといい」

「見つかったりしないんでしょうか??？」

「心配いらない、この屋敷の場所を知っているのはお館様だけだ」

その話は本当である、今迄もしのぶ、真菰が剣心の屋敷の場所を探る為に後をつけたりしたが移動速度についていけずに見失ってしまったのだそれ故に誰一人として緋村の屋敷の場所は知らない隠にも教えていない為、掃除洗濯も食事も自分でしている。

「では、先ずは炭治郎オレに攻撃した時の事は覚えてるか??」

(え??ひよつとして怒ってるかな? 緋村さんいやでも怒ってる匂いはいない)

「はい、覚えています」

「その時の、呼吸の仕方はわかるな??」

「はい!、わかります!」

「なら今日からその呼吸を常にしておけ、そしてこれからお前にはあの事をしてもらおう」

「ある事???」

「オレから逃げるそれだけだ、五時間逃げれるようになったら剣を教える」

「緋村さんから……………」

「勿論ハンデは与える、オレは目隠しをする」

「わかりました、頑張ります」

そうして地獄の修行が始まった。緋村さんは夜は自身の任があるから屋敷を留守にするその間はオレが家事をし自主鍛錬を行う呼吸を維持できるようにする為に山をとにかく走りまくる。

でも緋村さんからは逃げ切ることはいできない。

(はあはあはあ、よし大分呼吸が安定してきたちよつとずつだけど移動速度が上がってるぞ)

と炭治郎は考えながら山を駆ける、そしてそれを追う目隠しをした男。

(なるほど、真面目な性格だな恐らくオレがいない間も一人で)

それから半年が経った、その間禰豆子は目を覚まなくなった念の為緋村さんが医者を呼んでくれた(もしこの屋敷の場所を誰かに教えてみる)と脅しつきで、医者が言うには命に別状はないらしい。

今日もオレは緋村さんから逃げる。

(よし!!後数分だそれでこの稽古は終わる!!)

と緋村が前方から音もなく現れる。

「まだまだ……………甘い」

と剣心が炭治郎を捕まえたと思った瞬間。

「ヒノカミ神楽、幻日紅!!!」

それは、炭治郎のフェイントだった。

「まさか……………だがやはりその呼吸は」

「つつ!!はいまだ体には負担がかかります」

「お前には、オレの剣を教えるあまりその型は使わないようにな」

「って事は!!!緋村さん!!!」

「明日からは剣の稽古に入るぞ」

花に日輪を添えて

「ん??あれは鋳鴉か??、手紙か……………ほうあいつも人に物を教える立場になったかなるほど、竈門炭治郎か楽しみだなどんな剣士になるか」

あれからオレは緋村さんから龍の呼吸でも基本となる型を六つ教えてもらった、ヒノカミ神楽は本当にやばい時だけ使う様に念を押されたが。

「炭治郎、最終選別は七日間生き残ればいいのか決して無理はするな?」

「はい！大丈夫です!!緋村さん!!!」

「オレと禰豆子はお前の帰りを待ってるからな」

「はい!!!、では行つてきます!!!」

と笑顔で手を振りながら炭治郎は選別へと向かつて行つた、今思うと師匠もこんな気持ちだったのかもな。

私の名前は栗花落カナヲ蟲柱事、胡蝶しのぶの継子だ最初の方はカナエ姉さんや実弥義兄さんから剣の手ほどきを受けながら修行をしていった。その中でも一番剣の修行をしていて楽しかった相手と言えは龍柱様だ。

「花の呼吸!!!陸ノ型、渦桃!!!」

回転斬りに対して、突き技を使い回転を無理矢理止める。

「カナヲ、回転のかけ方が甘いそれでは上弦には通用しない」

「はい!!!」

「今日は此処までだな」

「お疲れ、剣心」

「ああ、すまないしのぶどうだろかこの後カナヲを連れて食事処でも行かんか?」

「え?????いいの????カナヲ!!!!行くわよ!!!」
「はい!!!!しのぶ姉さん」

と言うようにしのぶ姉さん、今は師範と呼んでいるが龍柱様と話す時はとても嬉しそうにしており見ているこっち迄楽しくなってくる。

だがしのぶ姉さんが柱になってから二年が過ぎたが龍柱様は何故か蝶屋敷にも来なくなってしまった、更には柱合会議にすら来ないらしいのぶ姉さんはすっかり平常心を保てないでいる。

だから私は思ったやはり男は女の敵、あの糞鈍感柱は今度あったら叩きのめす。

そう考えながら一人最終選別へと向かっていった。

この後、カナヲはころつと恋に堕ちるのだがそれはまだ誰も知らない。

(此処が最終選別の場所か……………)

と炭治郎は広場についた、その同じタイミングで双子の幼子が現れ試験の説明を受け各々山の中へと入って行った。

「ぐへえ!!!!肉を食わせろ!!!!!!」

背後から炭治郎めがけて鬼が飛びついてくる、がそれを匂いで察知し躲す。

「おい!!!お前に一つ聞きたい事がある!!!!」

「がアアアアアアアア」

!!!!!!!

(やはり駄目かこの鬼は理性がないのか!?)

「全集中、龍の呼吸、伍ノ型、龍巢閃!!!!」

連続斬りをくらい、姿を消していく鬼を静かに見つめる炭治郎。

(どうか安らかに……………)

「ぎゃあ!あ!あ!あ!あ!あ!あ!あ!あ!あ!あ!あ!!!!」

すると別方向から悲鳴が聞こえてきたから炭治郎はすかさずその場に向かう。

「龍の呼吸、壹ノ型、龍槌閃!!!!」

と今にも食われそうになつてる人を助け、そのまま礼も聞かずにその場を去る炭治郎。

「何なお!!!今!!!礼ぐらい聞いてもいいじゃんか!!!!」

!!!!

一人の少年の悲鳴が辺りに木霊した。

その後は炭治郎は、人を助けながら動く事にした。

(凄い、こんなに動いても疲れな、緋村さんとの修行は無駄じゃなかった)

そして残り一日の事だった。

(つつ、まずい何でこんな鬼が此処に??完全に油断していた)

「あらあら、かわいいのねお嬢さん美味しそうだわ」

「気色悪いから、いちいち私に話しかけて来ないで」

「あら？そうならとつと死んでくれる??血鬼術、鬼石魔弾!!」

(はやいけど姉さん達には遠く及ばない!!!)

躲しながらカナヲは型に入ろうとするが、地面から別の攻撃が。

「残念だったわね、この魔弾はね地面にも埋め込む事ができるのよ!!!!」

(しまった、此れは私のミスだ恐らく此処で私が負ければ他の人では!)

「此れでおしまいね!!!お嬢さん!!!」

!!!!!!

「ヒノカミ神楽、炎舞」

!!!!!!

今一瞬だけ、お日様が上がった様な気がした恐らく他の誰かに言っても信じてはくれないだろうけど確かに私はお日様を見た。

「大丈夫????」

「うん、ちよつと油断しただけ……………」

「後は、オレが」

「わかった」

と私が返事をするのと彼はお日様を思わずような優しい笑みを浮かべていた、思わず私は見惚れてしまった。

「何よ!!!!!!邪魔しないでよ!!!!!!」

と言いながら魔弾を一気に炭治郎に、向けて放つがそれを躲す。

「おい!!!お前に聞きたい事がある、鬼にされた人間を元に戻す方法はないか?」

「そんなもん私がかよ!!!!!!」

「そうか、ヒノカミ神楽、幼日紅!!!」

「なっ!!!!!!何処だ???奴は????????」

??????

「ヒノカミ神楽、火車!!!!」

背後からの回転斬りを頸に斬り込み鬼は消滅を始める。

(ああ、誰かに私は愛されたかった……………ただそれだけなのに)
「どうか、この人が次産まれてくる時は鬼になんてなりません様に……………」

私はその人の剣技にすらも見惚れてしまい立ち竦んでいたが。

「どうして??鬼にそんな事を言うの??鬼何て醜い化け物でしょ?」

「化け物??違うよ……………鬼は人間だったんだ、オレと同じ……………だからせめて来世があるなら鬼だった人間にも幸せになつてほしい」
「そんなの」

「わかつてる、だからオレは勿論容赦なく鬼の頸に刃を振るうよ」

と言いながら少年は蹲ってしまった。

「どうしたの??」

「いや、すまない今の技は体に負担がかかるから師匠に止められてるんだ」

「なら、どうして使ったの??」

「あの鬼は強いから、それに何故か君を守りたいって思ってしまったから」

キユンと言う表現が正しいだろうか確かにカナヲの心が跳ね上がる音を感じた。

「ありがとう……………なら助けてくれたお礼に一晩一緒にいよ??」

「すまない、世話になる」

こうして炭治郎の最終選別は終わりを迎えるのであった、その感一人の少年が幼子に掴みかかっていたのを止めた炭治郎にまたもカナヲはキユンと胸がときめいたらしい。

「カナヲ!!!! ありがとな!!!! また!!!!」
「うん!!! またね!!!! 炭治郎!!!!」

「誰かと思えば久しぶりだね、清十郎」

「すまん、急に訪ねてきちまって念の為に話しておきたい事があったな」

「ふふ、大丈夫剣心が面倒を見てる子供の事だね、鬼の妹を連れている共聞いているよ」

「話しがはやくて助かるぜ」

と言いなながら比古は頭を下げる。

「どうか、剣心が信じたあの兄妹を見逃してほしい、聞けば鬼の妹禰豆子はもう二年も人を食ってないと聞いただからどうか」

「頭をあげておくれ清十郎、わかっているこの件は剣心の他にももう一人柱の者が関わっている」

「私の子供達が信じたならば私も信じるだけでもこの件が公の場に出たときは」

「その時は、オレも剣心も覚悟はできております」

「わかった、ならば今回の件は黙認しておこう」

「ありがとうございます」

と礼を述べ清十郎は部屋を後にしようとするが。

「清十郎、丁度例の少年炭治郎と言うのか最終選別の報告が来たよ」

「ほう」

「流石は剣心の弟子だね、一人だけ異能を使える鬼を送っていたが倒されている」

「当たり前だ、何せ剣心に掠り傷を負わせた(服を掠めただけ)小僧だ」
「ああ、実に楽しみだね、五人も残ってるよ今回は」

「それは、（大方炭治郎が殆どの鬼を斬ったんだろうが）豊作だな」

「清十郎此れは貸しだよ??？」

「ああわかつてるさ一回位はお前の依頼受けてやる」

と言いながら清十郎は屋敷を後にした。

しのぶはそわそわしていた、かわいい妹「継子」が最終選別から帰ってくるからだカナエと実弥はやれやれと呆れていたがそうこうして
る内にカナヲは帰ってきた。

「ただいま戻りました、師範」

「お疲れ様、カナヲ無事で何よりです」

「師範いえ、しのぶ姉さん」

「何?????」

「男を口説くにはどうすればいい??？」

「は」

カナヲはまた、一つ成長して帰ってきた様です。
????????????

蟲柱の苦悩と日輪の旅路

蟲柱、胡蝶しのぶ私は普段どんな事が起きても動揺しない様に心掛けている、が今現在に至るまで激しく動揺していた。

まずはあの鈍感クス野郎（剣心）のせいだろうかあの男私が柱になった後は一切蝶屋敷にも姿を見せない更には柱合会議にすら顔を出さないと言う何をふざけているんだ、とわかるように私は動揺していたのだ、だから日々。

（心を乱すのは未熟な証拠）

と自分に言い聞かせる日々だ、そして今この妹は私に何て言ったのだろうか?。

「カナヲ詳しく話しを聞かせてくれない?」

「はい」

とカナヲが息を整えて瞑った目を開眼させ喋り始める。

「太陽を見たんです、姉さん」

「はい?」

「本当何ですよ、私は太陽の様な笑顔をする炭治郎に恋をしたようです」

「炭治郎?なるほどね、（恐らくは男の子ね）それで私に相談をしたと」

「はい、後一つ気になる事がありましたその炭治郎が使ってる呼吸が二つありまして」

「へえ二つも」

「はい、一つは私は見た事もない呼吸でしたが、もう一つは龍の呼吸でした姉さんこれって」

「……………なるほど、カナヲ今度その炭治郎君を見かけたら家に連れ込みなさい」

「え!!!いいの??」

「ええ、私が姉さんには話しておくから」

と二人が盛り上がり始めたがいつの間横にはカナエがいた。

「ちよつと二人共、そんな楽しい話しに何で私を入れてくれないのかなあ?」

「姉さん」

「それにこの中じや、私が一番詳しいわよ!!だって既婚者ですもの」
「カナエ姉さん教えてください、炭治郎を連れ込んだ後はどうすればいいですか?」

「こらあカナヲ、姉さんのを参考にしてはダメよ!!!」

「しのぶ姉さんは龍柱様とそんな関係になりたくないの??」

「……………教えて姉さん」

「此処は、実際にやって見ましようちよつと!!!実弥くん!!!こつち来て!!」

「どおしたあ???カナエ、おお帰ってきたかあカナヲ!!!」

「はい、義兄さんあれ?何か義兄さんにそっくりな男の子が最終選別にいたような」

「それ、本当かあカナヲ??」

「はい」

「そうかああいつ……………でえカナエ何かようかあ??」

「あのね!!!実弥くん!!!カナヲとしのぶの為にね私に落とされた時を再現したいのよ!」

「断る!!!」

と実弥は顔を真っ赤にしながら屋敷の奥に逃げて行った。

「もう!!!なら今から口頭で説明してあげる!!!」

「はい!! お願いしますカナエ姉さん!!!」

「私は自分の仕事に戻るから後は二人で、離してよ」

とカナヲとカナエに捕まり結局あの後カナエの話しを聞き、げっそりするしのぶであった。

「そろそろか」

と剣心は最終選別が終わり炭治郎が帰ってくる頃合いと読む。

(禰豆子には、一応暗示はかけたがどうなるか)

と禰豆子の方を見ると何と禰豆子が目を覚ましていた。そして突然屋敷から飛び出した。

「なるほど、鬼になつても兄の気配はわかるか……………」

すると、屋敷の外から声が。

「禰豆子!!!お前目を覚ましたんだな!!!よかった!!!」

と泣きながら抱き合う兄妹、そして剣心も二人に近づきそつと頭を撫でる。

「よく頑張ったね、炭治郎、禰豆子さあ今夜はうまい飯でも食べようか」

「はい!!!緋村さん!!!」

「おいおい、そんな三人だけで盛り上がりつても寂しいだろ?」

「誰???'」

と突然現れた大男に驚く炭治郎、だが剣心は。

「お久しぶりです、師匠」

「え???緋村の師匠???'」

「そーゆ事だよろじくな炭治郎?と禰豆子」

と清十郎は言いながら禰豆子の頭を撫でる。

「あの清十郎さん、禰豆子は……………」

「ああ知ってるぜ、鬼何だろ???'だが人は食わないだろ?」

「え???'」

と驚く炭治郎は横にいる剣心を見る。

「オレが師匠に、手紙を送った後お館様にも話しをしてくれたそうだしよ師匠?」

「ご明察、更に洞察力も優れてきたな剣心、流石は鬼殺隊最高戦力と謳われるだけはある」

「え???緋村さんが???'」

「……………買いかぶり過ぎです、それにまだ師匠の方が強いでしょう」

「ふっどうだかな、さて飯を食う前に一つ聞く炭治郎もし禰豆子が人を食った時お前は、どうする?」

「決まっています!!禰豆子の頸を斬りオレ自身も腹を斬ります」

と更に炭治郎は言葉を、続ける。

「でも絶対に、禰豆子は人を食わないオレは禰豆子を信じていますから!!」

「いい決意だ、炭治郎、さあ今日は祝いの席がオレにとつては二人目の弟子の様なもんだからな門出はしっかり祝ってやらないとな」

「はい!!!」

「あの?! 師匠つかぬ事お聞きしますがそのお金は」

「勿論お前の、奢りだ柱だろ? 金何て腐る程あるだろが!!!」

「解せぬ」

その日の宴会は楽しかった、家族を殺されて以来初めて心の其処から笑えた気がした。

次の日の朝には比古さんは帰って行った、そして十五日が過ぎた。

「此処に竈門炭治郎は、いるかい??」

「はい!!! オレが竈門炭治郎です!!! お入りください!!!」

「先ずはこの刀の説明を」

とひよつとこのお面を被った男が説明をし始めるが。

「相変わらずですね、蛍さん中に入って下さい」

「??? おお緋村じゃねーか!!! ん??、てことはこの小僧は」

「はい、一応オレの弟子見たいなもんですかね」

「あれ??? 緋村さんはこの方と知り合い何ですか??」

「オレ担当の刀鍛冶だよ」

「そうかあ!!! 緋村の弟子なら期待ができるな!!! こいつはオレの刀を愛してくれるからな」

「大事にしているだけです、蛍さん」

「それにお前名は炭治郎と言ったか、お前んちは火を使ってるのか??」

「え??? はい!!! そうですが」

「なら、刀も赤くそれか緋村みたく緋色になるかもな!! ほれ抜いてみな」

と炭治郎はわくわくしながら、刀を抜くがその色は。

「黒だな」

「まあいい、大事に使ってくれよ！炭治郎!!!ならオレは行くから、緋村!!たまには里に顔出せ!!刀を見てやるからよ!!」

「はい、その時はお願いします!」

「はい!!!ありがとうございます!!!」

と二人で頭を下げていた。!!!

「さて炭治郎お前もこれからは鬼殺隊士となる、師匠からこれを預かっている」

「此れはひよつとして禰豆子の為に………ありがとうございます!!!」

「今後は、任務で各地を回ることになるだろうしっかり信念をもっていけ」

「はい、今迄お世話になりました!!!緋村さん!!!」

「礼なら師匠とあの時一緒にいた義勇に言ってくれ」

「あの時の人とは会えないんでしようか」

「任務をこなしていけばその内会えるさ」

とその時、炭治郎の鎧鴉が叫ぶ。

「カアカアカア!!!炭治郎!!!最初の任務だ西の街へ行け!!!カア!!!」

「よし!!!行こう!!!禰豆子!!!」

「炭治郎!、行ってこい」

「はい!!!」

と大きく返事をし屋敷を飛び出して行った、剣心はそれを温かな目で見守っていた。

それからは任務の日々だった、沼の鬼を斬り、大勢の人が悲しみに覆われている事を知った。

更に浅草では、何とあの鬼の始祖無惨に遭遇更にはその無惨に敵対

する鬼もいた。

其処で鬼を人間に戻す方法があると、ある鬼、珠代さんに教えてもらいオレは血を集める為に更に戦う事を決意する。

無惨が送ってきた刺客の鬼二体を龍巢閃で斬り捨てる、その時はじめて無惨直属の鬼、十二鬼月がいる事を知った。

そしてオレは任務の中で、同期の内二人と再開し合同で任務を行う様になった。

尚その感伊之助が禰豆子の箱を攻撃しようとしたので
.....。

今オレ達は那田蜘蛛山へ向かっている。

偽りの家族

「どうやらかなりの数の子供が殺されてしまった様だ、其処には十二鬼月がいるかもしれない柱を向かわせなければいけないようだ」

「しのぶ、剣心」

とお館様の後ろに座る、しのぶと剣心。

「御意」

「久しぶりの再開なのに随分つれないのね剣心」

「……………行くぞ、しのぶ」

「ねえちゃんと人の話しを聞きなさいよ」

と二人が雑談をし始めたのを微笑ましく見るお館様。

「相変わらず仲がいいね、でも今は先に任務を優先してくれるとありがたいな?」

「あっ!!!すみません、ほら剣心も謝って!!!」

「絡んで来たのは、しのぶだろう」

と言いながら二人は那田蜘蛛山を目指す。

山に新たに入った隊士は三人、炭治郎、伊之助、善逸。

三人は最初は苦戦していた、先輩隊士村田を助けるとそれぞれに動いて他の隊士を助ける事為に別行動をとる事にした。

此処には鬼の家族が住んでいるようだ。

善逸は蜘蛛の毒を打たれ後がない状態だった。

(爺ちゃんはオレを信じてくれた、一つの技を極め抜けと)

「けけけけ、さあこれでもくらって溶けちまえ!!!」

蜘蛛の鬼は善☒に向かってヘッドロ爆弾を放つ。

「雷の呼吸、壱ノ型、霹靂一閃、六連!!!」
「な……………」

全方位へ六回切り替えを繰り返して最後の一閃が鬼の頸を落とす。

「オレは強くなるんだ禰豆子ちゃんを守れるくらい」

と善☒は蜘蛛の毒の影響で動けなくなる。

「息を整えないと、また爺ちゃんに叱られる」

すると、意識が朦朧とする中で綺麗な蝶が舞い降りた気がした。

「もしもし???大丈夫???」

「爺ちゃん……………」

「誰が!!!爺ちゃんよ!!!」

「落ち着け、しのぶ恐らくこの少年は走馬灯を見ているのだろう」

「わかってるわよ、そんなくらい」

と到着した、剣心としのぶは辺りを見渡す。

「かなりの隊士が……………しのぶ」

「はいはい、此処の処理と隠への支持は私がします剣心は十二鬼月を」

「わかった」

「無茶はしないでよね……………カナヲニヤニヤしないで貴方も動

きなさい」

「はい」

としのぶにその場に預け剣心は更に山の奥へ入る。

「糞!!!紋一郎が遠くに飛ばされつちまった!!!」

「ガア!アアオレの家族に近づくな!!!」

!!!!!!

巨大な人型の鬼が伊之助に向かって鋭い蹴りを放つ。

「あつぶねーぜ!!!へそんな攻撃当たるかよ!!!」

蹴りを掻い潜り伊之助は刀を抜き腕に斬撃を入れる。

ガキーン鈍い音が響いた、伊之助の刀が折れたのだ。

「はふぎけんな!!!!!!」
「近づくなあ!!!!!!」
「やばい殺られる」

その刹那。!!!!

「伊之助ごめんね、バカな母親を許して」

「伊之助といると元気になる、ずーっと一緒だよ」

だが気が付けば目の前にいた鬼は斬り刻まれており既に消滅をはじめていた、伊之助は暫くの間状況に追いつけず混乱したが漸く状況を理解した。

「は???鬼は???」

と真横には、先程までいなかった一人の男がいた。

「無事か???」

「お前がやったのか???人の獲物を取りやがって!!!!」

「それは悪い事をしたな、すまない謝ろう一つ聞きたい事がある」

「わかりやいんだよ!!!ん??、何だ答えてやる!!!」

「この山に新たに入ったのは三人と聞いたがもう一人は何処だ???」

「いっけね!!!炭治郎があっちの方にオレを庇って飛ばされたんだ!!!」

と伊之助が男の方に視線をやると既に其処には男はいなかった。

「え???おおおいいいいいい!!!!!!」

伊之助を庇ってかなり遠く迄飛ばされた、炭治郎そして今日の前には二匹の鬼がいる。

少年の鬼が女の鬼を一方的に攻撃していた。

「おい!!!お前達は家族ではないのか??」

「ねえ、何で家族じゃない奴が口をだしてくるの???此れは僕と姉さんの問題なんだから」

「……………累」

「何で謝るのかな??大丈夫だよ?この山にきているゴミ共を始末してくれたら許してあげるよ」

「累、わかった行ってくる」

と女の姉と名乗る鬼は累と呼ばれる鬼の元から別の場所へと移動していった。

「お前に、一つ言いたい事がある!!!」

「なあに??さつきから煩いな???殺すよ????」

「お前のやってる事は家族にする行為ではない!!!そんなものを家族とは言わない!!」

「君何かムカつくな、今何て言った??もう一度言ってみてごらん??」

先程とは違い威圧感を、放ちながら累は喋る、だが炭治郎の気迫も負けてはない。

「何度でも言ってる、お前達の関係は家族じゃない!!!」

「この十二鬼月の僕に此処まで喧嘩を売ってきたのははじめだよいいよかかってきなよどちらの考えが正しいか此処で決めようじゃないか」

(下弦の弍にこの鬼を倒せば血を禰豆子を人間に……………)
「望む所だ!!!」

と禰豆子の入った木箱を隠す様に木の隙間に置くそして小言で(此れは兄ちゃんの戦い何だからどうか其処で見守っていてくれ)と話しかけて炭治郎は累と向き合う。

「その顔、気にいらないなもつと恐怖に怯えた顔が見たいのに!!」

無数の白い糸を炭治郎めがけて飛ばす、炭治郎はかなりの速度で飛ばされてくる糸をしっかりと見切つて躲していくのだが躲しきれない箇所から糸が迫る。

(この糸は恐らくまだ力を込めては、いない様だな)

迫る糸を炭治郎は刀の軌道を水平にする事を意識し下から刀を振る。糸はプツンと斬れた音が響いた。

「へえ、凄いね君中々いないんだよ白い糸を斬れる奴はなら此れはどう???」

と手からでてくる糸を上空へと放ち続ける累。

(何のつもりだ???いやこの匂いは上か???)

糸は天から落ちてきた、が炭治郎は斬撃を放ちながら上手く躲すが頬と腕に切傷が入る。

が炭治郎はお構いなしに墨へと接近する。

「つち、君には白い糸じや無理の様だななら赤い糸で相手をしてやる」

(赤い糸???そうかやつとその気になったか)

「行くよ???, 血鬼術、伯耆聯」

糸が束になり、糸の塊が墨を取り囲む前触れとなく次々と炭治郎に狙いをさだめて放たれる。

炭治郎は此れは躲す事はできないと、冷静に判断する。

「迎え撃つ!!!龍の呼吸!!!陸ノ型!!!土龍閃!!!」

衝撃波と伯耆聯が衝突し辺りに土煙が、広がる。

(ち、面倒くさい技を使う奴だなこの状況だと奴が何処にいるかわからないな)

辺りに注意しながら墨は、あえてその位置から動かない選択をとる。

だが炭治郎は上空に翔んでいた。

(恐らく奴はオレの姿が見えない筈だ、だがオレには奴の居場所がわかる！)

「龍の呼吸、壺ノ型!!! 龍槌閃!!!」

(何だ??、この音は??、まさか!?)

墨は頸に入る斬撃を、黒い糸でずらして防いだのだった。

「な、まだ上があるのか……………」

「残念だったね、ばいばい、血鬼術、五芒星羅刹」

星の形をした糸が炭治郎を貫くかにみえたが炭治郎の前に人影が。

!!!!!!
禰豆子が身を呈して炭治郎を庇ったのだった。

「禰豆子!!!」

炭治郎の悲痛の叫びが山に響くのだった。

!!!!!!

家族の在り方

累は激しく動揺していた、何故動揺したか??それは今日の前で起きている事に対してだ。

「何だそいつは???」

「くそ!!!何で.....、妹だ!!オレの」

「妹???!妹は鬼になってるのに兄を???そうかあれが本当の家族なんだ!!?!」

(何だ???急に雰囲気か)

「ねえ??坊や僕は一ついい事を思いついたよ??」

「何だ???」

「妹を僕の家族に迎え入れるのさ、そして本当の家族になろう!!」

「なっ、お前は一体何を言っているんだ、本当に家族になれると思っ
ているのか?」

「なれるさ、だって家族なら僕が危ないときは妹が庇ってくれるだろ??」

この時、炭治郎の頭の何かがキレた音がした。

「ふぎけるのも大概にしろ!!!そんな物を家族とは言わない!!!!人も鬼も

関係ない!!!怪我を負ったら痛いんだ、守る側も守られる側も両方痛いんだ、お前はその痛みをわからないだろ??」

激昂する、炭治郎に対して累は頸を傾げる。

「???わかるわけないじゃん、気が変わった君は殺して妹を貰う事にするよ」

「お前に、禰豆子は渡さない!!!、家族はな誰かが傷つけば他の皆が悲しくなるんだ、だから次は起きない様にする、嫌絶対に起こさせない其処から皆の思いは一つになって始めて本当の家族になるんだ、絶対に
お前の考えは認めない!!!絶対に!!!」

累は先ずは炭治郎を仕留めるべく再び血鬼術を放つ。

「さつきから煩いよ、此れでおしまい血鬼術、五芒星羅刹!!!!」

五芒星が炭治郎に迫る。その時炭治郎は在りし日の家族の事を思い出していた。

「ごめんよ、兄ちゃんオレがぼーとして火鉢を倒してしまうから」
弟は泣きながら炭治郎に謝る。

「本当よ!!、アンタはもう少し周りをよく見なさい!!!」

と禰豆子は叱る、だが炭治郎は。

「こら禰豆子あんまり茂を叱らないでくれ、茂も反省してるんだから、な?茂?」

「もう、お兄ちゃんは甘いんだから、後火鉢は動かない様に固定しておくねお兄ちゃん」

とニコリと笑いながら部屋を出た禰豆子、茂は下を向いたままだったが漸く顔をあげ。

「今からは周りをちゃんと見る!そしていつかオレがお兄ちゃんを守るから!!」

と茂の言葉を聞き炭治郎は目に涙を浮かべながら。

「ああ約束だぞ!!!!!!」

(そうだオレ達家族は、今までそうしてきたじゃないか禰豆子はオレを守ってくれたなら今度はオレが禰豆子を守る番だ!!!!!!)

「ヒノカミ神楽!!!!!!」

炎舞!!!!!!

!!!!!!

半円を高速で二度描き、その剣技を駆使して累の血鬼術を斬り刻

む。

「な????????????????
馬鹿な最高度の糸が……………ありえない!!!」

と累が考え事をしてる間に炭治郎も一気に距離を詰めていく、追ってくる糸を炎舞で斬り刻みながら前進する。

「あんまり調子に乗らない方がいいよ!!!!お前!!!」
と累が血鬼術を使おうとした時だった。!!!

(体が震えて動かない???何で???糞動け動け動け動け動け)

炭治郎は累を射程圏内に入れる。

「見えた!!!隙の糸!!!ヒノカミ神楽!!!火車!!!」

ギリギリで体の硬直がとけ、腕を斬られながらも距離をとる累。

「何なの???君???ムカつくな本当にいいよ此れで終わりだよ!!!」

「行くぞ!!!」

「血鬼術!!!刻糸輪転!!!」

(はい……………しまった)

全てを飲み込まんとする累の糸がかなりの速度で炭治郎に迫った。

その時、どうにかしなくてはと焦る禰豆子、すると何処からともなく声が。

「禰豆子、大丈夫今の禰豆子ならちゃんとやれる自分を信じてお兄ちゃんを守ってあげて」

と亡き母の声が禰豆子の背中を押す。

「……………血鬼術……………爆血!!!」

禰豆子の血を炎にかえ累の放った術を焼き尽くす。

(馬鹿な……………僕の糸が)

(ありがとう……………禰豆子)

一気に距離を詰める。

「此れがオレ達の家族の絆だ!!!ヒノカミ神楽!!!烈日紅鏡!!!」

無限を描きながら累の頸と腕を斬り落とす。

家族はそれぞれに役割りがあると僕は思う、けど本当はわかっては気がする。

僕は体が弱く満足に外で遊ぶ事もできなかつたそんな時、無惨様が僕を鬼にしてくれたでも両親は喜んでくれなかつたあろう事か僕を殺そうとした。

其処からは覚えてないただその時本当の、絆をなくしてしまったのだと後悔した。

仲間を増やし家族ごっこをしたけど何もわからなかつた、でもこいつらと戦っていたら何となくだけどわかつた気がする此れが絆。

今度はやり直せるかなあ、僕もあの兄妹みたいになれるかなあ。

静かに炭治郎が累の頸を撫でながら答える。

「大丈夫だよ……………きつとなれるから……………」

温かい何十年も浴びなかつたお日様の温もりを感じる、ありがとうありがとう。

静かに累の体と頸は消えていった。

剣心がその場に着いた時には、既に戦いは終わっていた。

「炭治郎!!!大丈夫か???'」

倒れてゐる彌豆か?に寄り添っている、炭治郎。

「あ!!!、緋村さん!!!」

「勝つたのか???'!十鬼月に???'」

「はい……………彌豆子のおかげで何とか……………」

「そうか、良くやったな、炭治郎、禰豆子」

と二人の、頭を撫でる剣心。

「ムーーーーー」

すると音も無く二人が禰豆子に向かって刀を振ってくる。

静かに剣心は抜刀術の構えに入り、其れを迎撃する。

「龍の呼吸、抜刀術、龍渦一閃」

二人の、刀をたやすく斬って捨てる。

(え???今緋村さん何をした???斬ったのか?速すぎて見えなかった)

「ちよつと剣心、何で邪魔をするのかしら???鬼を庇うとは何のかしら??」

「龍柱様、今の本気でしたよね?全く反応できなかつたんですがってあれ?炭治郎??」

「え???誰???」

カナヲは、失神した。

其れを黙って見ていたしのぶはこちらに体を戻し。

「カナヲは置いといて、剣心、と其処の坊や???何で鬼を庇うの???剣心も剣心よそんなだから私は貴方がきら……………い何です」

「坊やではないこいつはこの山にいる十二鬼月を、倒しているそれは良かったオレもお前がきら……………いだ」

しのぶは、失神した、そして剣心もショックを受けた。

「あのお緋村さん……………何なんですかこの状況は」

「すまん、炭治郎その話しは後だ、しかしまずいなお前が十二鬼月を倒した事によりお前と禰豆子の存在が公になったな」

「緋村さん……………」

柱合会議

「一体これはどういう事だ緋村!!!説明しろ!!!」

「嗚呼……………!!!緋村貴様は何を考えている」

「全く緋村君は……………てあれ??しのぶは???'」

緋村の隣に正座を姿勢をする炭治郎拘束は、もちろんしていない。

「流石は緋村だ!!!やる事が派手でいいなあ!!!」

「そもそも何でこいつは拘束してないんだ???!何故だ何故だ??」

「……………」

と、各々剣心に問い詰めてくる、義勇は傍観の姿勢をとっている。

「こいつらはオレが保護した、それだけです」

他の柱達は驚きを隠せないでいる、すると其処に。

「おいおい、鬼を庇う馬鹿隊員つてのはあそいつかい???'」

と彌豆子の入った箱を持っている実弥、それに対し剣心も傍観している。

「彌豆子の箱を離せ!!!彌豆子は皆と一緒に戦えるんだ!!!」

「はあ!!!そんな事はないんだよお!!!馬鹿があ!!!」

と彌豆子の入った箱を刺そうとした実弥だったががある事に気づく
刀の刀身が無いことに。

そして目の前には折れた刀身を持っている剣心だった。

「実弥さん……………その鬼はカナエさんの夢でもあるんだわかっていますか?」

「剣心……………っち、そらよ」

実弥は剣心に箱を渡す、剣心は彌豆子の入った箱を炭治郎に渡した。

(緋村さんって本当に、強いんだ凄い……………)

「ぬう!!!流石緋村だ!!!全く動きが見えん!!!」

「っけ!!!お前が言うならオレ達は派手に従うしかないのかね?」

「嗚呼……………此処は先ずはお館様の采配にゆだねよう」

「緋村君」

「お館様の御成です」

「炭治郎お前も頭を下げる」

「はい」

と炭治郎が、周りを見ると皆も剣心と同じく頭を下げている。

「おはよう、皆今日は空は青いのかなこうして顔ぶれが変わることなくあれ？しのぶは？」

と剣心が答える。

「オレがしのぶに、対してお前が嫌いだと言ったら失神したので恐らくは今蝶屋敷かと」

とその言葉を聞き思わず吹き出す柱達。

「剣心??後でちゃんとしのぶと話してあげなさい??さて今日皆に集まってもらったのはもうわかるとは思うけど、炭治郎と禰豆子の件だ」

「そうです!!!お館様!!!其れを聞きたい!!!」

「この兄妹の事はね私が黙認していた、剣心の師でもある比古清十郎の願いでもあったからね」

その名前を聞き驚く柱達。

「手紙を頼む」

とお館様が付き人の幼子に手紙を読むように促す。

「どうか炭治郎と禰豆子が共にいる事をお許しください、もし禰豆子が人を食った時は比古清十郎、緋村剣心が腹を斬ってお詫びします」

その手紙を聞き涙を流す炭治郎、だが其処で義勇も。

「お館様、其処に一名追加して頂きたいこの水柱、富岡義勇も腹を斬ります」

(富岡さん迄も、オレ達は皆に守られてばかりだな)

「義勇……………わかった、と言うことだこの禰豆子には三名の命がかけられている」

「剣心てめえ……………其処までして……………それにい富岡て

めえもか」

「オレは、信じる緋村をそしてこの兄妹を」

「緋村……………」

皆は一瞬押し黙るが、不死川は立ち上がり自身の血を目の前に出し其れに耐えることができたらオレは認めると謂う、皆は知っている不死川の血は稀血である事を。

「いいなあ??? 剣心???」

「わかりました」

と言うと不死川は日陰に移動し箱を開け禰豆子を外へ出す、そして自分の腕を斬りつけ血を垂らし始める。

「禰豆子!!」

と炭治郎が身を乗り出そうとすると、伊黒が炭治郎を肘で押さえつけるが即座に剣心は背後に回り込み刀を抜き切っ先を伊黒の頸筋に当てる。

「伊黒さん、これ以上何かするならお館様の前だろうと容赦せん……………」

「貴様ー!!! っち勝手にしろ!!!」

静かに炭治郎から離れる伊黒。

「炭治郎もだそう騒ぐな、禰豆子を信じろ」

「はい」

すると禰豆子は血を見て不死川を襲うどころか手当てをし箱の中に帰って行った、その瞬間啞然とする不死川と柱達。

「どうしたのかい?」

お館様が、隣の幼子に問う。

「妹の鬼は不死川様の血を見ても襲わず逆に手当てをしてました」

「此れで禰豆子が人を襲わない証明ができたと思う」

「更に炭治郎は既に先的那田蜘蛛山にて癸でありながら十二鬼月の下

弦の忒を倒している皆も炭治郎の言葉の重みは、わかるよね???

「何と!!! 癸の隊士が???'」

「つけ!!!! 派手派手じゃねーか!!!!」

「嗚呼.....其れは凄い」

「炭治郎???'」

とお館様に、声をかけられ姿勢を正す。

「はい!!!」

「今後の君の活躍で更に禰豆子の事を認める人を増えるだろう頑張りなさい」

「はい!!!」

「でも柱にはしつかり敬意を持たないと駄目だよ?? 特に君の師でもある剣心はね君が倒した下弦の鬼よりも、更に凶悪な上弦の鬼と互角以上に渡り合い討伐もしているからね」

「え???? 上弦???? 緋村さん凄い!!!」

と弟子に褒められ顔を赤くする、剣心。

「なら炭治郎はもう下がっていいよ」

すると緋村が、隠に

「蝶屋敷に運んでくれ、炭治郎も怪我が酷いから頼む」

「了解しました!!!」

と、炭治郎と禰豆子は隠に運ばれて言った。

「さて、では会議を始めよう」

お館様が言うには、炭治郎は無惨と遭遇していると言うこと、更に炭治郎に対して追っ手を放っていると言うこと此処でお館様はある仮説をたてた。

禰豆子もまた何か特別な鬼かも知れない、そして炭治郎の使う呼吸にも秘密がある事。

「恐らくは今後は、上弦の鬼たちも更に動きを強めるかもしれないね」

「嗚呼.....ここから先は血の雨が降る」

「つけ!!! ド派手に行こうぜなあ!!! 皆!!!」

「そうだな!!! 宇髓の言うとおりだ其れにあの少年の、あの熱い目気に

「いったぞ!!」

「所詮は下弦意味がない意味がない」

「つけえ」

「ここからは皆で協力していこう!!!」

「……………真菰の言うとおりだな」

「ですね」

「ああ真菰の言うとおりだね、今後は隊士の質を高めたいとも考えている杏寿郎の継子と無一郎と言う隊士は一度剣心と手合わせしてもらうその結果しだいで柱を増やそう勿論炭治郎も候補には入れておくよ?其れでいいかい?剣心」

「はい」

「これからは先は上弦の鬼達との死闘になるだが君達なら負けない、私はそう信じている子供達今後は気を引き締めて任務にあたってくれ」

全員が返事をし解散となる。

「剣心後もう一つ頼まれてくれないかい???」

「はい、何でしょうか???」

「今蝶屋敷には、炭治郎の同期の隊士が二人いるその二人にも稽古をつけてほしい」

「わかりました、ではオレは暫くは蝶屋敷を拠点にします」

「カナエには、僕が言っておくから頼むね剣心」

会釈をして屋敷を後にし蝶屋敷を目指して動き始めようとした時。

「剣心、お前もこれから蝶屋敷に行くんだらう??一緒に帰るぞ」

「わかりました、行きましよう実弥さん」

此処鬼の始祖無惨の根城無限城、今此処には十二鬼月の下弦と上弦の壺が集められていた。

「貴様ら下弦は、もう必要ない下弦は此処で解体するこれからは貴様らは各々人を喰らい、鬼がりを狩れいいな?」

「「仰せのままに」」

「後は、おい下弦の壺貴様の能力は使える、これからお前には血を与えるいいな?」

「はい、わかりました……………ぎゃあああああア」

ベン、と音と共に下弦の壺は姿を、消した。そして城に残るのは上弦の壺のみ。

「黒死牟よ確かに貴様と私であるあの男の使う呼吸はこの世から消したそうだな?」

「……………はい……………確かに……………その筈ですが」

「ならば気のせいかな、すまん、わざわざ呼び寄せてしまって」

「……………いえ……………では私は此れで」

「あの耳飾り……………どうしたものか」

その後、元下弦の壺を除き他の元下弦は柱に殺られました。

二人は走りながら話しをしていた。

「でもよお、まさか本当に人を食わない鬼がカナエの言う鬼がいたとはなあ」

「オレも驚きました、鬼が人を守る何て始めて見たので」

「なら後であの坊主……………炭治郎だっけかあ??お前の弟子」

「はい、一応オレの弟子になりますかね」

「あいつには謝つとかねえとな、何となくだけどよおお前が気に入るのもわかる気がする」

「炭治郎は家族思いの奴なのでそうしてくれると助かります、……………」

「まあそうだな、おっ屋敷が見えてきたぜえさて今日は一杯やるかあ
剣心」

「そうですね、付き合いますよ実弥さん」

蝶屋敷が騒がしくなると実弥は思ったが口に出すのはやめた。

騒がしきかな蝶屋敷

剣心と実弥は縁側に座っていた、二人で酒を飲む為だ剣心は先にカナエに挨拶をしこの時しのぶと話してあげてねとお館様と同じ事を言われたが等のしのぶは気を失ったままだったので先に炭治郎の、見舞う事にした診断結果は全身筋肉痛や肉離れなどだ全集中常中を使えるから回復ははやいとこの事そして用事は、とりあえず終わり酒を飲むことにした。

すると何故か炎柱の煉獄杏寿郎も飲みに入ってきた。

「何と!!!あの少年は緋村の弟子か!!!それは残念だ!!!」

「オレの服を掠める事のできるな実力があつたしあの、人間性に惹かれたのが大きいかな」

「まじかよ、剣心お前に掠める事のできる奴も柱でもオレか煉獄か悲鳴嶼さん位だろう」

「いえ、義勇さんや伊黒さんも中々ですかね」

と喋りながら、酒を口に入れる。

「おらよ、注いでやるよお剣心」

「フツ、ではお言葉に甘えて」

と皆で楽しんでいると、青い髪、青い蝶の髪飾りをした少女がやってきた。

「お疲れ様です、お帰りさい！実弥さん、炎柱様もお疲れ様です………剣心さん!!!お久しぶりです!!!」

「ああ、アオイ久しぶりだね？あれから変な事を言ってくる隊士は、いるか?」

「大丈夫です！私の戦場はこの蝶屋敷なので!!!後これカナエ様が摘む物を差し入れてあげてと言われたので」

「おおアオイ、サンキューなカナエにも礼を言つといてくれえ」

「むむこの摘みはまた美味しいな!!!流石はあの風柱の女房だな!!!」

「実弥さん、顔が赤いですよ？照れてるんですか???」

と皆徐々に酒が入ってきたとき更に訪問者が。

「やつほ—————楽しそうじゃん!!私も混ぜてよ!!ほら義勇も!!」

「……………邪魔をする」

真菰と義勇がやってきたのだ。

「おお!!鱗滝!!!其れに富岡もいぞ飲もう!!!」

なお彼らの警らは甲の隊士が行っている今日だけ、特別に。

「つけえ、何だあ???富岡もきたのかあ?????」

「別にオレは……………」

「まあまあ、実弥さん此処は酒の席何だからほら義勇さんも呑んで呑んで」

「あれれれ???何か緋村君はいつも口数が多いねー???」

「何だよ真菰酔ってるからかな?それにお前」

「え???何???」

と剣心は真菰の肩を両手で掴み見つめている、何かが起こるなとわくわくしている実弥達。

其れを遠くからみてしのぶは、何してるのよと怒るカナエ。

「いい加減にお前もオレの事は、剣心と呼べ……………わかつたか」

「へ?……………わかつたわかつたから、ちよつと離れようか

剣心!!!」

と離れると剣心は淡く微笑み。

「ふふやつと真菰が名前で呼んでくれた」

とのたまうから真菰は体全身が熱くなるのを感じ酒を呑みまくる。

「へ……………だ!!!別に照れて呼べなかつた訳じゃないからね!!」

「おい!!!鱗滝それは殆ど照れていますと言ってる様なもんだぞ!!!」

「ああオレもそう思うぜ、なあ???富岡?????」

「真菰いい加減に覚悟を決めたらどうだ?????」

「義勇さん覚悟とは何なんですか?????」

「剣心!!!余計な事は聞かないでいいから!!!!!!」

と皆で楽しく呑んでいた、ある病室では。

「そんなあ何で炭治郎は覚えていないの??しかも何??何か前よりもカツコよくなってるしえ?もう十二鬼月を倒したの??はやくない??」

そんなに柱になりたいの??龍柱様に鬼殺隊の柱になれるな事を言われたのかしら?てか炭治郎も継子だったのねしかも龍柱様の、と言え
ばしのぶ姉さんはどうなったのかしら??」

とカナヲは一人の世界から現実に帰り、しのぶの部屋へと急ぐそし
てカナヲが目にした物は。

部屋の真ん中に体操座りをした、しのぶだった顔は死んでいる。

「しのぶ姉さん!!!しのぶ姉さん!!!しっかりして!!!」

「剣心本当に嫌いな訳がないじゃないそれなのに!何よ少年には私に向
けている微笑みよりも更に微笑ましくしちやってさいジワルだつて
したくなるわよ、それなのにそれなのに」

と言いながら、しのぶはカナヲに、抱きつく恐らくは今迄溜まって
いたのが飛び出たのだろう。

「剣心に、嫌いと言われてから何もする気が起きなくなったの!!!」

「私もです!!!しのぶ姉さん!!!炭治郎に忘れられてしまい後は鬼を殲滅
する事しかありません!!!」

と二人で抱き合っていたら、炭治郎が入ってきた。

「あのお何か悲しい匂いがしてきたのでどうしたんですか??」

と二人は固まる特にカナヲは悟りを開いた様だった。

「ん??あれ??君は??ああ!!!カナヲ!!!ごめんよ綺麗になつてたから気が
つかなかったんだ!!!」

「え??炭治郎??私がわかるの??其れにごめんもう一回今何て言った
??」

「わかぬさ!!!え??カナヲは、綺麗だ!!!」
「はう!!!」

とカナヲはよろめき倒れそうになるが炭治郎が素早く支える。

「どうしたんだ!!!カナヲ??大丈夫か??」

「私今とっても幸せ、ああ私の太陽……………」

再びカナヲは失神した。

「あのしのぶさん、カナヲはどうしたらいいですか??」

「あ、そうねとりあえず私の布団に寝かせてあげて」

「はい!わかりました!あの?一つ気になる事があるんですけど」

「え??何かしら??竈門くん??」

「蟲柱様は緋村さんの事本当に嫌い何ですか??」

と炭治郎はしのぶに、聞く。

「嫌いよ……………あんな奴……………でもどうして貴方がそんな事を聞くの?」

「いえ、蟲柱様は緋村さんと話しているときはとても楽しそうな匂いがするので……………後緋村さんもほんの少しですが似たような匂いがあるんですよ」

「え???」

「あつーいけない!今禰豆子とカナエさんが遊んでるんだつた!すいません蟲柱様オレは此れで」

「待ちなさい」

「はい?何ですか???」

「私の事は、しのぶと呼んで蟲柱様何て堅苦しいのはやめてちょうだい
いわかった?」

「はい!!!しのぶさん!!!」

とお日様の様な笑顔でしのぶの部屋を後にした炭治郎だった。

(真つ直ぐな子、何となくだけど剣心が気に入るのもわかる気がする
其れに匂い何て嘘よね)

「ふうう、そろそろお開きにするかあーおい!剣心お前泊まるんだ
ろう?」

「はい、カナエさんが既に部屋を用意したと言うので…」

「そうかならオレは部屋に、行くからよお」

と言つて部屋に戻る実弥そして真菰と義勇もそれぞれの屋敷へと
帰つて行つた。

「緋村!!!オレもそろそろ屋敷に戻る!!!」

「そうかわかった、杏寿郎も気お付けてな」

「わかっている!!!近々オレの継子と時透をそちらに向かわせる宜しく

頼むー！」

そしてそのまま杏寿郎は言葉を続ける。

「緋村!!!お前はオレよりも先に死ぬなよ!!!」

「其れはごっちの、台詞だ」

と言いながら煉獄も自分の屋敷へと戻って行った。

剣心は皆が帰った後も一人静かに縁側で月を見ながら酒を呑んでいた。

(月か……………そう言えばあの上弦の壱は月の呼吸を使っていたな、果たして相まみえた時どうなるか)

と一人考え事をしてっていると、横からしのぶの声が聞こえてきた。

「一人で考え事???しかも酒を呑みながら何て」

「しのぶ……………か?」

「ごめんなさい!!あの時嫌いって言ったのは嘘だから」

としのぶが謝っても剣心は目を見開きしのぶの顔を凝視している、尚今のしのぶは髪を下ろしている。

「ちよつとどうしたのよ???剣心???」

「いや……………オレも冗談だよ……………すまない」

「もう私も気にしてないわ!!!隣いい?」

「ああ」

と剣心が微笑むもんだからしのぶの顔は赤くなるが上手く誤魔化しながら隣に、座り静かな夜を過ごした。

善逸と伊之助の恐怖体験

オレは弱いけど弱いけどさ何なの??今の状況。

昨日も昨日で炭治郎はどっかに行くし隣の伊之助は落ち込んだままだし何か縁側が騒がしいし全く眠れなかった。そして今日の前には炭治郎を鍛えた人がいるこの人の音は何か炭治郎に似てるけど雰囲気はやばいオレどうなっちゃうの???横の伊之助は怯えてるし。

「オレはお前達の機能回復訓練を監督しろと頼まれた、よろしく頼む」
するとオレの隣にいる炭治郎は満面の笑みで。

「よろしくお願いします!!!緋村さん!!!」

ねえちよつと待って???何でそんなに嬉しそうなの炭治郎は??。

「よろしくお願いします、我妻善逸と言います」

「伊之助デス」

「よしでは、炭治郎お前はカナヲと反射訓練に入れ、善逸と伊之助はアオイと反射訓練だ」

三人がそれぞれ訓練に入るのを静かに見守る剣心、アオイ相手に湯呑みを掛け合っている二人善逸と伊之助の反応はまずまずか思いつきリアオイにお茶をぶちまける伊之助は後で説教だな。

でカナヲと炭治郎は。

(.....)

一瞬その様子を見た緋村の思考は停止した、その様子を見た善逸も物凄い形相をしている。

互いに湯呑みをかけさせないように相手の行動を読みながら手を動かす。

(つく、流石カナヲだ!!!殆ど互角だ!しかも必死なカナヲもまた可愛い.....)

(此処まで私についてくる、流石は私の.....しかも真剣な顔の炭治郎.....キユン)

その二人の音を聞きキレル善逸そして、その二人の考えを読み固まる剣心。

道場の入口から見ているカナエも微笑ましく見ている、だが決着は

「コワイヨ……………コワイ」

「ほら、どんどん逃げろ呼吸は意識しておけ何なら攻撃してきてもいいぞっ。」

と剣心が、言った瞬間伊之助は木刀を手に取り斬りかかる。

「言いやがったな!!!あの時の借りは今返す!!!ウリイイイイイ!!!」

突然元気になった伊之助が二本の木刀を持ちながら呼吸を整える。

「獣の呼吸、参ノ牙!!!喰い裂き!!!」

交差させながら剣心に攻撃するが掠りもしない、伊之助は更に別の技を放つ。

「獣の呼吸、肆ノ牙!!!切細裂き!!!」

素早く六連撃を放つがその途中で木刀二本とも剣心に白刃取りをされる、そのままいつの間にか持っている木刀をもって、超高速の六連撃を放つ。

「此れが本当の連続斬撃だ、安心しろ痛みは無い筈だ」

と地面に着地しその言葉を聞き、驚く伊之助。

(やべえよオレこんな奴と剣を交えるのかよ!!!スゲえスゲえよ!!!)

「さて、次は善逸お前はどうする???来るか??」

「行きます!!!雷の呼吸!!!壺ノ型!!!霹靂一閃!!!六連!!!」

あらゆる方向に移動し剣心を攪乱しようとするが善逸は気づく、背後にぴたりと剣心が着いてきているのだ。

「雷かいいい動きだが、まだ動きに無駄があるな」

と木刀をそつと背中当てて動きを止める剣心、二人共物凄く酷い

顔になっている。

「だが悪くないな、炭治郎!お前の同期は面白いな」

「はい!!!自慢の同期です!!!そろそろオレもいいですか??」

「そうだな、久しぶりだなお前との稽古も……………二人共良く見
ておけ」

と剣心に言われたので二人で正座して剣心と炭治郎の打ち合いを見ることにしたが気づくとカナヲも戻ってきていた。

「カナヲお前も来るといい、お前の成長見せてくれないか?」

「え?????炭治郎との共同作じやなかった共同戦線???やります!!!」

「よしカナヲ!!!やるぞ!!!緋村さんに一撃入れるぞ!!!」

二人の猛攻を持ってしても剣心に当たる気配はない炭治郎だつて下弦とは言え十二鬼月を倒しているのに其れにカナヲちゃんだつてかなりの強さがあるのにと善逸は思った、此れが龍柱。

「つく!!!ならば!!!ヒノカミ神楽!!!烈日紅鏡!!!」

無限を描きながら剣心に向かつて放つが紙一重でかわされるが連続して斬撃を放つが木刀で防がれるがカナヲも割つて入る。

(ほんの一瞬!龍柱様の体のバランスが崩れた此処だ!!!)

「花の呼吸!!!陸ノ型!!!渦桃・回」

回転に身体重を乗せて剣を振り抜く、剣心も一瞬目を見開き微笑みながら攻撃に入る。

「龍の呼吸、伍ノ型、龍巢閃・連翹」

高速の斬撃は更に辺りに散らばり炭治郎とカナヲの服にほんの少し破れていた。

「つく……………流石です……………緋村さん!!!」

「参りました……………龍柱様」

「いや、二人共良い動きだった……………カナヲ良くオレの指摘した所を磨いてきたな日々精進していけ」

「はい!!!」

「さて今日は此処までそれと、伊之助お前は残れカナヲ……………アオイを呼んできてくれ」

その後、伊之助は二度とアオイに湯呑みをぶっかける事はなくなつた。

その夜の事だつた。

「彌豆子ちゃん……………」

と善逸は彌豆子の入った子箱に近付こうとすると背後から殺気が。

甘露寺に蛇、無一郎に日輪

あれから一週間が経ち善逸と伊之助も常中が出来るようになり今日は個人鍛錬となっている。

今道場には剣心と炭治郎そして目の前には柱に候補の

甘露寺と時透の二人がいる。

「あのお!!!今日はよろしくお願ひします!!!龍柱様!!!」

(きやああ!!あの龍柱様が目の前に直接見ると本当に背が小さいのね
キウンキウンしちやうしかもその横に座つてる炭治郎君も龍柱様と
同じ髪型をしてかわいいわ!!!)

「あのーえっとーよろしくお願ひします」

「ああよろしく後甘露寺さんオレは年上の方には様とかいりませんど
うぞ好きな様にお呼びください」

「え???そうなんですか?うーんわかりました!では緋村さんと
!」

「では、早速ですが今日は甘露寺さんと時透の力を見たいと思ってい
ます、先ず時透は炭治郎と戦う事いいな??」

「え?あ.....!!わかりました」

「よろしく!!!時透君!!!」

「そして甘露寺さんはオレと.....甘露寺さんは日輪刀を使われ
て下さい時透と炭治郎は木刀でいいいな??」

「え??わかりました!!!緋村さん!!!」

「オレも其れでいいです!!!剣心さん!!!」

と炭治郎が剣心と呼ぶが一瞬剣心は嬉しそうな顔をしすぐさま
各々の戦いが始まる。

剣心と甘露寺は蝶屋敷近くの林で、炭治郎と時透は蝶屋敷の近くの
河川敷で。

「甘露寺さん遠慮はいりませんのでと言いたいのですが、出てきたら
どうですか?伊黒さん?」

「つち気付いていたか、緋村貴様甘露寺に怪我をさせたら許さんぞ」

「へ???伊黒さん???何で???確かに待ち合わせは夕方だったのに」

「なるほど伊黒さんは……………ふふ」

「何だ??文句があるのか??緋村??あの時の事を根に持つてるからな、後オレは今から用事があるが絶対に甘露寺に怪我をさせるなよわかったな??」

「根に持ちすぎですわかりました、伊黒さんもお気おつけて」

そして伊黒が居なくなつたのを確認し改めて向かい合う二人。日輪刀を手に持つ甘露寺と木刀を手に持つ剣心。

「行きます!!!恋の呼吸!!!壱ノ型!!!初恋のわななき!!!」

長い刀が剣心に向かつてくる、剣心も始めて見る刀の形状に思わず驚くが冷静に剣の軌道を読む。

(なるほど、あの長い刀……………あれを使いこなすにはかなりの力があるな)

(すごっ!!!全く攻撃が当たる気配がない!!!キュンと来るわ!!!)

「やあああああああああ!!!」

壱ノ型を繰り返し放ち続ける甘露寺、其れを木刀で峰の部分に斬撃を入れ上手く躲していく。

(そろそろこちらから攻めるとするか……………と云うか恋か面白いな)

「龍の呼吸、式ノ型、龍牙閃」

一瞬に、して甘露寺の近くまで行きそのまま突きが当たると思ったが体を物凄い方向に曲げて突きを躲すその時の隙を見逃さず甘露寺は刀を振るうが透き通る世界に入り何なく躲す。

「やるな甘露寺さん、その柔軟な体確かに杏寿郎が自慢するのかわかる気がする」

「そんなあ!!!照れちやいます!!!よしどんどん行きますよ!!!」

と甘露寺が斬りかかろうとするが剣心は。

「いやこれ以上は辞めておきましょう、オレも本気になってしまいうそれでは伊黒さんが」

「ええ!!大丈夫です!!!後もう少しだけ!!お願いします!!!」

「……………わかりました、では少し本気で」

その瞬間甘露寺は鳥肌が経つ、剣心の雰囲気は先程迄とは違うからだ。

「龍の呼吸、式ノ型、龍牙閃・低」

地面すれすれに突きを放つ剣心、先程とは遙かに速度が違うが辛うじて甘露寺は躲すが其れはあくまで躲させるのが剣心の狙い。

「其処は剣で防御するべきでしたね、甘露寺さん龍の呼吸、参ノ型、龍翔閃」

剣を頸に寸止めをする剣心、すると甘露寺が

「参りました」

その言葉を聞き静かに微笑みこう告げる。

「一緒に柱として戦える日を待っています」

「はい!!!ありがとうございます!!!」

(緋村さんの笑顔凄いかわいいさつきとのギャップが凄いわ)

「さて、ではもう一つの戦いの様子を見に行きましょうか甘露寺さん」

「はい!!!」

ガツキと木刀と木刀の重なる音が周囲に響く、時透と炭治郎の打ち合いの音だ。

(凄い時透君、オレよりも年下なのに……………此処は負けられないな!)

(何だろうこの人誰かに似てるけど思い出せない……………)

「霞の呼吸、肆ノ型、移流斬り」

「龍の呼吸、参ノ型、龍翔閃!!!」

素早く時透が斬り込み其れを炭治郎は剣を突き上げて上手く防ぐ、そのまま時透は後方に弾かれて炭治郎は追撃をかける。

(よし!!!木刀を折れる!!!)

「ねえ?一つ聞いてもいいかな?」

「何???!!!」

互いに打ち合いしながらおもむろに時透は炭治郎に問いかける。

「今回の手合わせには君は関係ないと僕は思うんだけど?何で君もいる

の?」

「それは! オレが剣心さんを手伝いたいと思ったからさ!」

とそのまま炭治郎は言葉が続ける。

「其れに人の為にする事は巡り巡って自分の為になるからね!!」

「え??? 今何て言ったの?? もう一回言ってくれない??」

「人の為にする事は巡り巡って自分の為になる!!」

炭治郎は喋りながらも鋭い一太刀を時透に向けて振るうが木刀で防がれる。

(何処かで聞いたことがある……………僕は大事な事を忘れている)

(時透君から不思議な匂いがする……………どうする? このまま続けるか?)

時透は、思い出していた。

(そうだオレは双子だったんだ、有一郎兄さん……………其れに父さん……………母さん……………父さんは炭治郎と同じ赤い目をしているだから思い出せたんだ……………)

木刀を握りしめ時透は炭治郎に距離を詰める、炭治郎も一瞬躊躇するが構える。

(人の為に……………誰かの為に力を出せる、そうだよね……………皆!!!)

「炭治郎!!! 君のおかげだ!!!」

「え???」

その瞬間、炭治郎は上空へと弾き飛ばされていたが体制を整えへ迎撃の構えをとる。

(何だ?? 時透君の雰囲気が変わった?? 其れにさつきよりも強い!!!)

「霞の呼吸!!! 伍ノ型!!! 霞雲ゆ海!!!」

「ヒノカミ神楽!!! 灼骨炎陽!!!」

互いの連続斬撃で互いの木刀がへし折れる、すると。

「其処まで!!!」

と横から、剣心と甘露寺が立っていた。

「え? もう終わりなの?? せっかく炭治郎と楽しくなってきたのに」

「ふつ、なら次はオレと打ち合おうか？時透????」
「君と???」

「こら!!!時透君!!!剣心さんにそんな態度は駄目だよ!!」
（何かしら無一郎君さつき迄と雰囲気が違うわまるで炭治郎君に付いてまわる弟みたいかわいい）

「わかったよ、炭治郎後オレの事は無一郎でいいよ！」

その後、剣心と打ち合い態度は180度ひっくり返った。

「ねえねえ剣心!!!夜は炭治郎と三人で食べようよ!!!」

「こら!!!無一郎!!!剣心さんにそんな言葉使いは駄目だぞ!!!」

「炭治郎オレは構わん!、甘露寺さん貴方は伊黒さんとですよね??」

「え??はい!!!そうです!!!」

（きやああああああ何かしら今度は緋村さんをきやあああああああああ）

「では今日は此れで終了です、今後もお互い頑張りましょう」

「はい!!!」

甘露寺は今日の事をはやく伊黒に話したくてウキウキしながら屋敷を後にする、その話しを聞き剣心と炭治郎は伊黒に目をつけられるが誰も知る由もない。

その夜

「何よ貴方、私の炭治郎にあんまりくつつかないでよ」

「そうね、カナヲいい事言うわね貴方柱である剣心に、慣れ慣れしいんじゃないの?」

「……………」

剣心と炭治郎は傍観の姿勢をとっている。

「ん??、何??オレと剣心と炭治郎の仲を引き裂こうとしてるの??」

「しのぶ姉さん、こいつ殺つてもいいですか??」

「そうね、蟲柱の名前の由来をとくとその身に刻んでやるとしましよ

うか」

更に蝶屋敷は騒がしくなるのであった。

「あの師弟はとんでもねえな」

「フガ!!!」

!!!!!!!!!!!!!!

そして炭治郎達も新たななる任務へと旅立つ時が来た。

無限列車編

列車の中の攻防

炭治郎、伊之助、善逸は列車にいる煉獄と合流する様に指示を受け
今現在列車の中にいる、

蟲柱のしのぶがお館様に炭治郎を推薦した事で三人全員派遣される事となった。

剣心は既に遠方の任務へ行っていた。

屋敷を出る時は、大変だったと善逸は思う何が大変だったか??今思
い出だけでも嫉妬の炎に包まれそうになるがオレには彌豆子ちゃん
がいるからね我慢できるからね??。

「離して、アオイ、なほ、きよ、すみ私は炭治郎と一緒に行くの
……………離せ!!!」

とカナヲが四人に必死に押さえられている、何故??理由は一つカナ
ヲが炭治郎に付いて行こうとしているからだ、その様子を見てカナエ
は微笑んでいるしのぶは任務の為留守だ。

「アンタね!!カナヲ!!!自分の任務があるでしょうが!!!冷静になりなさい!!」

「カナヲ様ー!!!」

「任務何それ??!」の使命は炭治郎に近付く者を駆逐する事!!私は心の
ままに生きるー」

アオイは埒があかないと考え今丁度あの人がある事を思い出す。

「実弥さー……………ん!!!カナヲをどうにかして
!!!」

!!と声をあげると即座に実弥がやってきてこの状況に言葉を失う、門
の方を見ると恐らく任務に行くのだろうか竈門炭治郎がいるそれを
実弥は察してカナヲを四人と協力して押さえ込む。

「なっ!!!実弥義兄さん???ちよつとやめてくださいよカナエ姉さんにチ
???

くりまますよ?????
「」

「てめえも冷静になりやがれえ、まったく本当にてめえら姉妹はそつくりだなあおい!! 竈門!! さつさと行っちゃまえ!!!」

その言葉を聞き炭治郎は頷き、伊之助と善逸と共に走り去って行った。
た。

「ああ!!! 炭治郎!!! …… 私の邪魔をするとは風柱とて許さぬ」

「こら!! カナヲ……………」

「ひっ、しのぶ姉さん…………… ごめんなさい、任務に行つてきます」

とそんなやり取りがあり炭治郎もちよつと疲れていた。

「なあ??? 炭治郎??? その炎柱つてどんな人なんだ???」

善逸が気になる事を炭治郎に聞いてみる。

「凄く熱い人だったぞ!!! それに優しい匂いもしたかな?」

「見ろよ!!! 炭五郎コイツスゲえ!!! 速え!!! オレこいつと競争してえ!!!」

「馬鹿なの??? ねえ馬鹿なの??? 炭治郎も何か言つて!!!」

「はは!!! 怪我しないようにな!!! 伊之助!!!」

善逸はツツコミを放棄する事にした。

「美味しい!!! 美味しい!!! 美味しい!!! 美味しい!!!」

列車内に響き渡る声がする……………!!! …… 三人が声のする方を見ると、煉獄が弁当を一人で食べまくっていたそして三人が近付き炭治郎が声をかけても美味しい!! と返され流石の炭治郎も困惑した。

「なるほど!!! 胡蝶が隊士を推薦したと聞いたが君の事だったか! 竈門少年!!!」

「はい!!! よろしくお願いします!! 煉獄さん!!!、隣にいるのはオレの同期です!」

「我妻です」

「伊之助様だ!!!」

炭治郎が伊之助に注意していると、煉獄は「黄色い少年と猪頭少年!!!」

だな!!」と言うが誰も突っ込む事はなかった。

「煉獄さん、あのこの列車には出るんですか???鬼が?」

「出る!!!だからこぞ柱であるオレが来た!!!」

「いやあああああ!!!何で何で鬼がいるの????」

「ウリイイイイイイ!!!腹が減るぜ!!!」

「二.....!!!」

「切符を拝見いたします.....」

四人が話しこんでいたら車掌さんが切符を拝見すると言ってるが炭治郎は何かあると思ひ声をあげる。

「あの?ちよつと待ってもらってもいいですか??」

「何か??」

炭治郎が突然声をあげた事に三人だけでなく車掌さん迄も動揺する。

「貴方からは何か悲しい匂いがします、貴方はそちらの道に落ちてはいけない...」

この炭治郎の言葉を聞き車掌の様子が可笑しくなる、その事に気づいた三人は一気に辺りに注意を向ける。

「黙れ!!!お前に何がわかる??家族を失ったオレの」

車掌が声をあげて炭治郎に掴みかかる、三人が炭治郎を助けようとするが手で静止させ炭治郎は車掌さんの手をもう片方の手で握る。

「車掌さんの悲しみはオレにはわかりませんが、失っても失っても生きていくしかないんです、例えばどんなに打ちのめされても」

静かに車掌さんは床に崩れ落ち全てを語り始める。

「鬼がオレに鬼殺隊を切符で眠らせる事が出来たら家族に会わせてやると言ってきた今迄私は.....」

車掌さんが全てを話した時、列車中に声が聞こえてくる。

「はは!!!やっぱり裏切ると思ったよ!!!でもまあ時間は稼いでくれたみたいだしよしとするがね!!!」

四人はそれぞれ刀を抜き臨戦態勢に入る。

「でも残念だね、せつかくいい夢を見せてやろうとしたのに」

「黙れ!!!人の心を思いをもて遊んで何が楽しい???何が面白い???」
炭治郎は列車中から聞こえてくる声に対してこう呼びかける。
「ふふ、楽しいねえ!!!ねえ君達気付いてる???オレはこの列車と一つになっただよ?」

列車の壁が突然手に変わり寝ている乗客に向かって手が襲いかかる。

「炎の呼吸!!!壱ノ型!!!不知火!!!」
「ヒノカミ神楽!!!円舞!!!」

二人の放つ斬撃により無数の手を斬り落とす、と同時に煉獄が指示を出す!!

「竈門少年!!!猪頭少年は鬼の頸を探して斬ってくれ!!!黄色い少年は竈門妹と共に列車を三両守れ!!!」

善逸が思わず疑問の声をあげる。

「まさか………残り煉獄さんが??????」

「もちろんだ!!!いいか!!!ここにいる全員を守り抜く行くぞ!!!!」

「二はい!!!」

各自がそれぞれの役割を果たすべく動き始める。

「ムー……!!!」

禰豆子は爪をつきたて人に襲いかかる手を斬り裂くが手は何処からも生えてくるその一つが禰豆子の脇腹を斬り裂く血が辺りに飛び散りその血を爆血で吹き飛ばし手を飛ばす、が巨大な手が禰豆子に近づいてくる瞬間、雷鳴が轟く。

「雷の呼吸、壱ノ型、霹靂一閃、十連!!!」

剣心との修行により善逸の技はさらなる高みへと上り詰めていた。

「気色悪い手で禰豆子ちゃんに触るんじやねえぞ糞鬼が」

何時もと様子が違う善逸に思わず禰豆子は見惚れていた。

炭治郎と伊之助は先頭車両を指し列車の上を走っていた、その瞬間奥の車両から雷が落ちた音がした。

「急ぐぞ!!!伊之助!!!皆頑張ってる!!!」

「わかってるぜえ!!!」

二人は先頭車両に、突入すると同時に無数手が迫る。

「何だ???これ???!! 気持ち悪!!! 獣の呼吸!! 肆ノ牙!!! 切細裂き!!!」

「ヒノカミ神楽!!! 烈日紅鏡!!!」

無限を描く斬撃で手を吹き飛ばし伊之助の斬撃で床ごと斬り刻むと、そこには鬼の頸がだが運転手がこちらに向かってくるが伊之助が運転手を取り押さえる。

「炭五郎!!! 決めろ!!!」

!!!

!!!

!!!

(これで終わらせる!!! 父さん、皆そして剣心さんオレに力を!!!)

「ヒノカミ神楽!!! 火車!!!」

!!!

!!!

炭治郎の回転させた斬撃により頸を一刀両断する。

重なる面影

頸を切断された鬼が暴走して列車を横転しようとするが、炭治郎が前方から煉獄が後方からそれぞれ技を放ち衝撃を緩和させる、静かに列車が倒れた所で炭治郎と伊之助は列車の外に出る。

「伊之助!! さっきの運転手は無事か??」

「おう!!! 俺様がしつかり守ってやったぜ!!!」

「そうか!!! ありがとう!!! 伊之助!!!」

ほわほわしている伊之助の様子を微笑ましく炭治郎が見ていると、遠くから声が聞こえてくる善逸の声だ。

「おおーい!!! 炭治郎!!! 伊之助!!! 大丈夫か??」

「善逸!!! 無事だったか!!!」

「フガ!!!」

「禰豆子!!! なに何?? そうか善逸がありがとうな! 善逸」

「いや義……炭治郎当たり前の事をしただけさ」

「てめえら!!! オレをほわほわさせんじゃね!!!」

炭治郎は、煉獄さんはどこだろうと辺りを探していたら煉獄さんがいきなり現れた。

「やや!!! 無事だったか!!! 流石は緋村の弟子だ! 関心関心!!! 猪頭少年! 黄色い少年! 竈門少女も良くやった!!! 君達の頑張りのおかげで全員無事だ!! 何より何より!!!」

その時目の前に誰かが降り立った。

「……………」

明らかに強い鬼だとこの場にいる者全員が思った、その鬼の目に掘られている文字は上弦の参。

全員が警戒している中鬼はいきなり炭治郎に襲いかかる。

静かに炭治郎は抜刀し体勢を低くする。

「龍の呼吸、参ノ型、龍翔閃!」

鬼は目を見開き明らか驚いている表情をし斬り上げにより斬られ

た腕を眺めながら一旦距離をとろうとするがすぐさま煉獄が距離をつめる。

「炎の呼吸、壺ノ型、不知火」

素早い斬撃は鬼の額を斬り裂くが、鬼は鋭い蹴りを放つも煉獄は刀を盾にして衝撃を緩和させ後ろに後退する。

「ほう、中々やるなてつきりそっちの小僧はすぐに殺せると思っていたのだが」

炭治郎は黙ったまま刀を構える、伊之助と善逸は目の前にいる鬼の放つ威圧感に動けずにいた。

「人を見かけで判断するのは愚かな行為だ、この少年は強い！侮辱する事は許さない！」

「すまない、ではそのお詫びにどうだ??お前達鬼にならないか??」

この言葉に驚く炭治郎と煉獄、鬼は言葉を続ける。

「鬼になれば老いることもなく永遠にその強さを維持することができる即ち至高の領域を目指す事ができるのだ人は虚しい、弱く歳老いていく悲しすぎる」

「ぶさけるな、そんな誘いにのるわけがないだろ!!!今ここで！お前に人の力を教えてやる！」

「竈門少年の言うとおりだ、人は老いるからこそ死ぬからこそ堪らなく愛おしく尊いのだオレは鬼に等ならない」

二人は臨戦態勢に入る。

「そうか……………それは残念だ、鬼にならないなら殺す!!オレの名は猗窩座お前達の名は?」

「煉獄杏寿郎」

「竈門炭治郎」

「杏寿郎、炭治郎行くぞ、術式展開破壊殺・羅針」

三人が一気に距離をつめる。

「ヒノカミ神楽、烈日紅鏡!!!」

「ほう中々にいい斬撃だ!炭治郎!!!破壊殺平割羅針撃」

無限を描く斬撃と鋭い突きが幾重にも重なり合う、炭治郎が僅かに押されその隙きをつかんと猗窩座は距離を詰めようとするが煉獄の一太刀によって阻まれる。

「杏寿郎今の斬撃も、よかった!!!さあどんどんくるがいい!!!」

(なるほどこれが上弦………下弦とでは比べ物にならない………)

「炎の呼吸、陸少型!!!炎流撃!!!!」

「破壊殺、乱式!!!」

激しい打ち合いを、する杏寿郎と猗窩座だが杏寿郎の腹、腕に傷がつく。

「実に惜しい、何故鬼にならない??オレには理解ができない!!!」

「ぐっ!!!」

「ヒノカミ神楽!!!碧羅の天!!!」

二人の打ち合いの上空から炭治郎は日輪を描くが如く回転斬りを放ち猗窩座の腕を斬り落とす、

即座に腕を回復させ炭治郎につめよる。

「もつたいない!!!炭治郎!!!オレと至高の領域へといこう!!!」

「ならないと言っているだろ!!!お前のやっている事は悪人と同じだ!」

斬撃と拳打を交互に放つが炭治郎の腹に拳がめり込む。

(重い………くそ!!!呼吸で緩和させろ!!!)

「悪人??オレが違う悪人は悪人は………破壊殺!!!空式!!!」

上空から拳から放たれる空気弾が炭治郎を襲う。

「炎の呼吸!!!式ノ型!昇り炎天!!!」

燃え上がる斬撃により空気弾を弾きとばす。

「大丈夫か??竈門少年!!!」

「はい!何とか………」

「炭治郎お前は目障りだ重なるんだ誰かと」

「つく、ヒノカミ神楽!!! 火車!!!!」

「破壊殺! 乱式!!」

大きく振りかぶった事が仇になり炭治郎の脇に拳がめり込む。

(不味い……………脇腹が……………)

後退しながらも何とか体を起こす、額からも血が流れ始める。

「竈門少年!!! 炎の呼吸!!! 壱ノ型!! 不知火!!!」

「その技は見切った!!! 残念だったな杏寿郎!!!」

斬撃を躲し回し蹴りが煉獄の顔に当たる瞬間、炭治郎は痛みをこら

え脚を斬り裂く。

「煉獄さー……ん!!! ヒノカミ神楽!!! 炎舞!!!」

(竈門少年!!! 不味いこの距離では……………!!! ……)

「終わりだ、炭治郎、破壊殺・脚式流閃群光!!!」

連続蹴りを炭治郎に放ち列車の方に吹き飛ばす直撃するかにみえたが伊之助が炭治郎を庇い勢いを殺して列車に当たるが炭治郎は気を失ってしまう。

「竈門少年!!!」

「人の事よりも自分の心配をする事だ!!! 杏寿郎!!!!」

「絶対に負けん!!! 炎の呼吸!!! 伍ノ型!!! 炎虎!!!」

「破壊殺!!! 碎式!!! 万葉閃柳!!!」

二人の放つ衝撃波で辺りに土煙が立ち込める。

ただそれを黙って見ている善逸。

(くそ!!! 動け動け動け!!! オレにもできるはずだ!!! 炭治郎だけじゃない!!!)

煙が晴れていく、善逸が目凝らして見ると煉獄の左眼が潰れ至る所から出血をしている。

「みろ杏寿郎お前の放った素晴らしい斬撃もこの通り直ぐに回復してしまうそれに引き換えお前はどうか?? 潰れた眼は治る事はない実に悲しいよオレは」

「いかなる事があってもオレは鬼になどならん!! そしてここにいる者

「いいか炭吉、今から私が日の呼吸と言う剣技を見せる」

この時、炭治郎の意識は先祖炭吉の中にいた。

(日の呼吸?????
?????ヒノカミ神楽の事か
?????)

そこで炭治郎が見たものは。

帰るべき場所

炭治郎は、ただその剣技を眼に焼き付けていた日の呼吸は美しくそれを扱う剣士継国縁壺はまるで精霊の様に見えた。

(まるでヒノカミ神楽は縁壺さんに捧げる為の舞に思える……それにこの人誰かと似てる?)

「炭吉、これで全ての型はお前に見せた……私の思いをそしていつの日か無惨を」

縁壺が無惨を取り逃がした事そして自分の妻を子供を殺され兄は鬼となった、その壮絶な人生の為か自分自身を守るべきものを守れず果たすべき使命を果たせなかったと炭治郎は話しを聞き思った。

(でも縁壺さんがいなければオレは産まれていないだから自分をそんな風に言わないでほしい)

最後に竈門家を去るとき耳飾りを、炭吉に託すその時炭治郎は例え縁壺に声は届かなくとも叫んだ。

「オレが貴方の思いを繋ぎます!!必ず無惨を倒します!だから貴方は自分自身を攻めないでください!!!」

縁壺はこちらを振り返り満面の笑みを浮かべながらこう告げた。

「ありがとう、私もこれから頑張っていくから!!!」

そして炭治郎の、意識は戻ろうとしていたその時女性の声が聞こえてくる。

「お願い………あの人を開放してあげて………」

煉獄、善逸、に加え伊之助も参戦するが三人共限界を迎え地面に倒

れていた。

「くそ!!! まだだ!!! 黄色い少年!!! 猪頭少年!!! 心を燃やせ!!!」

「はい!!!」

「わかつてら!!!」

「中々楽しかった!! 今楽にしてやる!!! 破壊殺・滅式!!!」

物凄い勢いで地面を刮りながら三人に対して突進する、三人共最早これまでと思つた時だった。

「日の呼吸、烈日紅鏡」

無限を描く斬撃は、以前のものとは比べ物にならない程美しい剣技となつていたその場にいた三人は思わず見惚れてしまった。

「すいません、遅くなりました後はオレが」

静かにだが炭治郎の瞳は燃え盛っていた、何か覚悟を得たような。

(竈門少年は今、日の呼吸と言わなかつたか? まさかあれが.....)

(え?? 嘘?? 炭治郎だよね?? いつもよりも更に穏やかなの音がする)

(剣八郎の動きスゲえ何かほわほわするぜ)

「炭治郎か??? 何だ??? お前?? 先程迄とは強さが違う.....」

「日の呼吸、円舞、炎舞」

即座に距離を詰め流れる様な無駄のない連続斬撃を放つ、円を描くと同時に高速の連続斬り技の繋が滑らなすぎて技は一つの形になっているような不思議な感覚に襲われる。

「っ.....面白い!!! 破壊殺・脚式飛遊星千輪!!!」

「日の呼吸、灼骨炎陽」

脚蹴りを大きく剣を振るう事で防ぎ、そのまま脚を斬りつける。

「猗窩座お前は何故強さを求める誰もが最初は赤子で産まれその時は誰かが守ってくれるだろう人は最初から強くなかない何故お前は強さを求める??」

「な.....」

と炭治郎の話しを聞き、ある幻聴が猗窩座の耳に入る。

「最初は皆誰かに守ってもらおう、それは当たり前前の事だお前もいずれは誰かを守れよ」

後ろを見ても誰もいない再び炭治郎の方へと視線をやるその表情は怒りに溢れていた。

「炭治郎お前は何だ???目障りだ!!!破壊殺・終式青銀乱残光!!!」

全方位から拳圧が炭治郎へと襲いかかる、炭治郎も限界だったでも諦めない縁壺の思いを繋ぐためそしてあの女性の為にも刀を握りなおし迎え撃つ。

「猗窩座!!お前の帰りを待っている人がいる!!お前はもう楽になっていいんだ!!!」

「日の呼吸、日暈の龍・頭舞い」

龍の動きを再現するが如く超高速で鋭い舞を放ち拳圧を全て叩き落としながら炭治郎は猗窩座へと近付く猗窩座も更に技を放とうとするが、誰かが猗窩座の腕に抱きつく。

「なっ……………お前は……………」

「もういいの狛治さん、貴方はもう休んでいいの」

猗窩座は思い出す、この人に言った言葉を「オレは誰よりも強くなつて一生貴方を守ります」とオレは何も守れなかった、親父との約束、師範との約束を。

猗窩座の、動きが止まった瞬間を炭治郎は見逃さず迷わず技を放つ。

「日の呼吸、斜陽轉身」

体を大きく反転させながら頸を斬り裂く、静かに体が崩れ始める。

「恋雪さん、オレを許してくれ何一つ約束を守れなかったオレを……………オレを」

「もういいの、やっと帰ってきてくれた、お帰りなさい貴方」

こうして一つの魂は帰るべき場所へと帰って行った。

「終わった……………ぐっ」

その場にしゃがみ込む炭治郎、すぐさま煉獄が炭治郎に駆け寄る。

「ぐっ………体が動かん!!!!!!」
「まだだ!!!まだ戦える!!!ここで負けるか!!!!」
篁紅素は炭治郎の方へと静かに歩みよけ斧を振りかぶる。
「最後に言い残す事はアルカ????」
「オレは負けない!!!オレが挫けることは絶対にならない!!!!!!」
「そうか………ならば死ね」

「お館様、やはり上弦の参を倒した後更に鬼が現れたましたその鬼も上弦の力を有しております、ここは緋村様を」
「いや、既に手は打ってある」

(オレは愛する人を鬼に殺された、その鬼はこの手で始末したがオレの気が晴れることはなかっただからオレは剣を置いた流石に近場で鬼が出たら剣をとるが上弦の鬼やそれに近い力を持つ鬼とはもうやり合う事はないと思っていたがまさか弟子とそいつの弟子二人共上弦を倒すとは、それに剣心が見込んだ奴をここで死なせる訳にはいかんこの瞬間だけ最前線に戻る)

!!!!!!
斧を振り下ろすと同時に辺りに土煙が充満する。

「竈門少年」

!!!!!!

(クソ!!!!!! すまん!!! 緋村!!!!!!)

と目を冷ました、善逸と伊之助が煉獄に声をかける。

「煉獄さん、あれを見てください……………」

「ぬ?????
?????」

煉獄が眼にしたのは。

炭治郎の、前に踊り出て斧を軽々と剣で受け止める筋肉隆々の男がいた。

「嘘……………貴方は」

「いいぜ炭治郎よく吠えた!!最後の最後迄戦う意思を切らせなかったお前の一人勝ちだ後はオレに任せな」

炭治郎の前にいたのは、比古清十郎だった。

紡がれる思い

耳飾りの鬼狩りにトドメを刺そうとした瞬間その男は音もたてずにその場に現れたその雰囲気はまさに武神、堂々としたそのあり方に思わず見惚れてしまった。

「おい、その隠とつとつとこいつらを安全な所迄運べ」

斧を支えながら清十郎は隠に声をかけ、煉獄、炭治郎、善逸、伊之助の保護へ向かおうとする。と篋紅素が隠に攻撃を加えようとするが。「お前は眼の前に敵がいるのによそ見をするのか???随分とナメられるな」

と清十郎は軽く睨むだけで篋紅素は思わず身震いがおき攻撃出来なかつた、隠が運ぼうとするも炭治郎はこの戦いが見たいと駄々をこねたから清十郎はもうちよい下がってろと指示をだし改めて敵と向き合う、尚まだ清十郎は斧を支えたままだ。

「どうした??いい加減斧を退けてくれるとありがたいのだが」

動く事が出来なかつた、どう動こうが頸を斬られてしまうと脳が体全体に信号を送っているから。

「そうか……………ならば……………ふん!!!!!!」

空いている片方の腕に力を入れ刀を殴りつける、その衝撃で斧と篋紅素は飛ばされる。

「……………何なんだ!!!!お前は!!!!!!」

と斧を振りかざしてくるが、刀を構える事なく目を閉じて避ける。

「がアアアアアアアア!!血鬼術!!!大地烈残!!!!」

「龍の呼吸、零ノ型、龍水星空閃・無圏」

その場から動く事もなく何もする事もなくだが振りかぶった斧と体は清十郎のいる所より五メートル程前の地点で斬り刻まれ頸を飛ばされていった。

「やれやれ、全くこんな奴を斬る為にわざわざオレが出張るとはな」

と言いながら清十郎は炭治郎に近付き優しく頭を撫でる。

「無事で何より、上弦の参を倒すとは流石はオレ達の弟子だな」

「清十郎さん、……………つ」

清十郎に頭を撫でられ安心した炭治郎は氣を失ってしまった、その同時に日が刺してきた長かった夜が終わりを告げるのであった。

「お前達もよく頑張ってくれた、炭治郎を助け共に戦ってくれてありがとう師として礼を言う」

「いえ！オレはこの有り様だが、竈門少年のおかげで命は助かった！礼を言いたいのはオレの方です!!!」

「……………オレは、最初は恐怖で動けなかったんですオレ……………オレ」

「ゴメンネヨワクテ……………」

と二人は落ち込む、比古は静かに二人に歩みより。

「なら、強くなるしかねーな！人を守るためにも自分を守るためにもな、剣心に頼めお前達も炭治郎の様になれるその思いがあればな」

と言いながら比古は音もなくその場から姿を消す。

その後は隠達が処理をするとの事だったので四人は蝶屋敷に運ばれて行った。

「やはり、龍の呼吸……………日の呼吸か面白い」

無惨は一人部屋の中で笑みを浮かべていた。

その日、上弦の参並びに無惨の直属の鬼を討ち取ったと鬼殺隊全体に報告があった、上弦の参は竈門炭治郎が、直属の鬼は比古清十郎がそれぞれ討ち取った。

「龍の呼吸一門えぐ」

と周りの隊士、隠は呟いたらしいその一週間後、他の三人よりはやく眼を覚ました煉獄は柱を引退する事をお館様に告げたらしい、尚まだ三人は眠っている。

更に何故か各々個室で眠っている。

伊之助の部屋にて。

「よかった……………無事で帰ってきてくれて全く大人しければこん

なに奇麗なのに」

とアオイは、伊之助の寝顔を見つめる髪を触ると手入れもしてないのにサラサラしていていつまでも撫でていたくなる。

「う……………」

思わずアオイは、ベットから離れ身構えるが眼を覚ました訳ではなかったらしいそれに何やら寝言を言っているようだった。

「……………ゴメンネ、ヨワクテツヨクナリタイ」

静かにアオイは、伊之助の頭を撫でていた。

善逸の部屋。

「……………禰豆子ちゃんえへへへへへへへへへへ」

「……………」

……………。

炭治郎の部屋と言うより部屋の前。

カナヲは部屋に、入らず一人自分の世界に入っていた。

(炭治郎ったら一体何処まで強くなれば気が済むの??禰豆子ちゃんの為???)
私……………え??ひよつとして私の為??駄目よ!!カナヲ!!!

いつまでも炭治郎に戦わせてはいけないわ!!!私も強くなるしかない!!!そして生まれ変わった私を炭治郎に見てもらうんだから!!!)

と考えるとカナヲはしのぶに置き手紙「炭治郎に相応しい女になるまで修行してきます」を机に置いて一人コソコソと蝶屋敷を出ていった。

比古清十郎の元に直談判し無理矢理修行をさせてもらうのは別の話し。

しのぶは頭を抱えるのだった、カナエと実弥は妹の成長??に喜んでいた。

炭治郎はハッと眼を開けると、蝶屋敷の天井が見えた体を何とか起こすとちようどしのぶが部屋に入ってきていた。

「おはよう、炭治郎君随分無茶したみたいね全く言いたいことはあるけど今はゆつくり休みなさい」

「はい、あの他の皆は煉獄さんは????」

「善逸君と伊之助君なら今頃剣心ど任務に行ってるわよ、だってあれから二ヶ月たったんだから」

「後ね、煉獄さんは柱を引退したわ、その引き継ぎには甘露寺さんが選ばれていたけど」

「甘露寺さんが……………そうですか……………」

「とりあえずは後何日かは安静だからね！、後煉獄さんが君が眼を覚ましたら連絡をくれと頼まれていたから多分明日辺りに見舞いにくると思うから」

「わかりました」

辺りは薄暗くなってきたのでもう時期夜かと考えていたら箱から彌豆子が出てきて頭を撫でてきた。

「ごめんな、彌豆子心配かけたな」

「ム……………ム……………!!」

「ごめんってば、なあ彌豆子お兄ちゃんはもう少し眠るから傍にいてくれないか?」

「フガ!!!」

気付いたらまた眠りつき人の気配がして目が覚めると煉獄が椅子に座っていた。

「煉獄さん……………よかった……………よかった」

「竈門少年君に一つ言いたいことがあってなこうして出向いてきたのだ!」

「そんな……………オレがそちらに出向くの」

「竈門少年!!!オレは君の妹を認める!!鬼殺隊の一員として認める!」

「煉獄さん……………」

「オレは列車の中で黄色い少年と共に血を流しながら人を守る姿を見た、人の為に命をかける誰が何と言おうと鬼殺隊の一員だ!剣心が君の妹を信じた用にオレも信じる!」

炭治郎は眼に涙を浮かべながら煉獄の話しを聞く。

「これから先も辛く苦しい事も数多くあるだろう、心を燃やせ歯を食いしばって前を向け!!君と剣心なら必ず無惨を倒すと信じてる! ……後は頼んだぞ剣心」

と煉獄はいつの間にか入り口近くの壁に立っていた剣心に声をかける。

「わかっている、後はオレ達に任せろ必ず成し遂げてみせる杏寿郎お前はこれからどうするんだ?」

「育手になろうと思う!父上を納得しているようだったしな」

「そうか……………、父上殿はお元気か???’」

「ああ!!、また遊びにこいと行っていたぞ!!、それと竈門少年にこれを託す!」

煉獄は自身の刀の鍔を炭治郎に渡す。

「煉獄さん、いいんですか???’」

「ああ!!君に持っていて欲しい!!それと君の使った日の呼吸見事だった!今度家にきて是非父に見せてやってほしい!!」

「わかりました!必ずお伺いします!!」

「ではオレは行くとするか!剣心オレの弟子ができたら相手を頼む!」

「はい、その時はお願ひします」

二人暫く微笑みそして煉獄は屋敷へ帰って行った。

熱き思いは二人の剣士に紡がれていく。

遊郭死闘編

剣心争奪戦??

炭治郎、善逸、伊之助の修行をつけながら剣心は日々を過ごしていた。

夜の街で鬼の頸が飛ばされる。

「龍の呼吸、漆ノ型、龍巻閃・凧」

「馬鹿な……………何故柱が……………」

地面に着地し刀をしまう、担当区域を警備していたら鴉から鬼が出たとの報告を受け即座にその場に赴き鬼を退治した。

（近頃は鬼の出る数が減ったか?? まあ確かに炭治郎を始めとして最近の隊士は力があるからな）

「物陰に潜まないで出てきたらどうですか?? 宇髄さん??」

暗闇から派手な格好をした男が姿を現した、音柱、宇髄天元だ。

「つち、背後から派手に奇襲をかけてやろうとしたのに残念だぜ！」

「……………わざわざそんな事をしにきた訳ではないでしょ? 何か用があるんですか?」

「ま————な、つても此処じゃあ話がしづらい、オレの屋敷にこいよ！」

所変わって宇髄宅。

「実はよ、今オレの嫁たちがとある場所に潜入してるんだがよ」

「とある場所??」

「そこは後で教える!、ここ最近連絡がとれねえんだオレはそこに鬼がいると睨んでいる」

「なるほど、宇髄さんは心配なんですなふふあなたらしい」

宇髄は思った、こいつってこんな風に笑えるんだなど、そしてそのまま宇髄は本題を切り出す。

「緋村!!! てめえ女装似合いそうだからよいつちよ潜入してくんねえか

??

「わかりました、ではさっさと準備に入りましょう」

「おう!!ここは派手に行きたいが!地味に綺麗にするぜ!!!お前の担当区域はオレが見てやるからよ!!」

こうして宇髓は普段嫁にしてやるように化粧を施す顔の傷は上手く隠し髪をおろし赤い口紅をして着物を着せ女物の髪飾りをつけ宇髓は思った。

(こいつ派手に綺麗だな、てかこれ……………まあいいか!!)

「終わったか??オレは一旦蝶屋敷に戻る、明日の昼合流しましょう」

「おう!わかったぜ!!」

(え?その格好で戻るのか?まあ面白そうだから黙っておくか!!)

剣心もまた、抜けてる所は抜けている。

しのぶは任務を終えて蝶屋敷に着いた、履物をぬぎ屋敷に入ろうとしたら門に人影が見えたてつきり怪我人かと考えたが違った用だよ見ると女性だったその女性の放つ不思議な雰囲気思わず魅入っているところから近づいてきて話しかけてくる。

「しのぶ、炭治郎達は帰っているか??」

「」

聞き覚えのある声、一瞬思考が停止するも直ぐに活動を再開するそしてまじまじと見てみると剣心だった私好……………美少女になってた。

「何であんたそんな格好してるのよ」

「任務だ……………宇髓さんに頼まれた」

「ちよつと意地悪してもいいかしら??いわゆる悪代官ごっことか」

「何だ??それは??」

と変なスイツチが入ったしのぶは剣心(女装)を自室に連れ込もうとするがそこに。

「おいしのぶこんな朝早くに何やってんだあ??……………誰だ?その女?」

実弥が現れた勿論剣心だと気付いていない様子、実弥も一瞬見惚れてしまうがカナエの方が綺麗だなど思い直ぐに我にかえる。

「義兄さんこの人はね私の友達なの!!今から私の部屋で遊ぼうと思つて」

「そうかい、まだ朝方だからなあ周りに迷惑かけんじゃねえぞ」

「実弥さんも任務お疲れ様です」

ぱつと聞いたことのある声の方へと先程の女性がいた実弥は眼を凝らすと。

「何やってんだあ!!!、剣心てめえ!!!」

「女装です」

と暫く三人で揉めていたら義勇が屋敷にやって来た。

「胡蝶……………怪我をした頼む……………!!!」

義勇は眼だけでなく心までも奪われてしまった義勇は眼の前にいる女性を言葉にするならこう例えるだろう「一輪の花」と義勇は二人を押し退けその女性の手を握り。

「一目惚れした、オレの物になれ」

「あの富岡さん???'」

「おい富岡あ」

「それ剣心だぞ」ですよ」

義勇はその場に固まったまま気を失ってしまった、すると善逸が任務を終え帰ってくるなり剣心(女装)を見つけ眼を丸くする。

「え???'この音は剣心さん???'え???'何で???'」

「善逸かこれはな……………:???'」

「何で剣心さんが女になってるんですか???'」

剣心は弁解をしようとしたら炭治郎も帰ってきてこの輪に入ってくる、説明するのが面倒だと思ひ始めた剣心はその場から逃げようとするが。

「とりあえず剣心私の部屋に行きましょう!!!」

「いや……………お前は、オレとだ」

「駄目です!!!剣心さんはオレ達と鍛錬するんです!!!」

「どうしたの???'皆屋敷の前で全くもう他にも患者がいるのにぶん殴る

わよ???

不死川カナエが笑顔で拳をゴキゴキと音をたてながら屋敷から出てきた事でようやく全員大人しくなった剣心を見たカナエは思わず○○○○○○○○しようと思っただが我慢した。そして結局しのぶの部屋に連れて行かれた。

実弥はオレは何もしてねえと言い訳したが殴られていた、あれ？花柱現役行けるんじゃないかね？と善逸は思った。

「とりあえずその帯を引っ張つてもいいかしら??」

「え??いやましてしのぶ眼がやばい」

「……………ゴホン、で？何でそんな格好してるの???」

「宇髄さんがオレに遊郭に潜入してくれと言ってきたらから引き受けたそれだけだ」

「任務ってあんた…「しのぶ………!!!いる?????」

真菰は思ったこの女性何処かで見ることがあると、しのぶに近付き耳に手を当てながら小声で問う。

「ねえねえしのぶこの人何処かであったことあるかな?????」

「あるに決まってるじゃないあれ剣心よ」

「え???あの子がじー………あつ！本当だ!!!」

剣心は何故気づかないのだろうかとうと頸を傾げているとしのぶが話しの続きをするように促してきたので剣心はこクリと頷き話を続ける。

「遊郭に先に潜入している宇髄さんの奥さんと連絡がとれないらしい」

「なるほど……………ね、それでいつ出発するのかしら??」

としのぶが剣心に尋ねると、真菰も便乗してくる。

「そうだよ、時間があるなら今のうちに男をメロメロにする仕草とか教えるよ??」

「確か……………宇髄さんには昼にここに来てくれと頼んでいるから」

真菰としのぶは互いに顔を合わせ頷く、かくして剣心改めて劍姫の調教（笑）が始まったのであった。

そして昼過ぎ宇髓は蝶屋敷を訪ねていた。

「おい、胡蝶姉!!! 緋村は何処にいるか知らねえか???」

「あら!!! 宇髓くん!!! 緋村ちゃん?? 緋村ちゃんならしのぶの部屋よ!!!」

「そうか!! 悪いな! 仕事中に!!!」

「いえいえ〜! 緋村ちゃんがわいっかつたわよ〜」

最後のは聞こえないフリをして宇髓はしのぶの部屋に向かった、そして部屋の前に立ちノックをしようとしたら部屋から声が聞こえてくる。

「そうよ!!! ここで!!! こう!!! そして上目遣い!!! ああかわいい! 毒を盛りたくなつてきたわ!!!」

「凄いや!!! 剣心!!! 声あで女の子っぽいよ!!! 私が男だったらと言うか女でも襲いたくなるよ!!!」

「おらあ!!! てめえら何派手に面白そうな事してんだよ!!!」

宇髓はとんでもない光景が眼に飛び込んできたこの少女は誰だろうか?? 甘えるような仕草そして色っぽい声宇髓はこの少女が剣心である事を忘れていた。

「お前、オレの四人目の嫁になれ」

「雲の呼吸、参ノ型「蟲の呼吸、蝶ノ舞」

「おい、冗談だぜ?? 派手に落ち着け!! オレもお前らもあああああああああああ!」

その後、宇髓は劍姫（剣心）を連れ遊郭へと向かい無事潜入する事ができた。

一週間後剣心との連絡が途絶えてしまう。

そして彼らは知らない既に宇髓の嫁たちは殺されていることに。

遊郭へ

「きゃあああああああああああ」

宇髓は蝶屋敷の少女等を連れ去ろうとしていた、その表情は深刻そうだっただがその場に不死川カナエが現れる。

「宇髓さん???何を勝手にその子達を連れて行こうとしてるのよかしら??」

笑顔なのに妙に威圧感のある笑みを浮かべながらカナエは宇髓に近付く。

「別にてめえの許可はいらないだろうが、っちでもこの青い髪の女は連れてくぜ」

「なっ……………」

宇髓の言葉を聞き青ざめるアオイ。

「その子は蝶屋敷の看護師です連れて行くことは許しません」

不死川もをビビさせる威圧感を放つカナエだが宇髓も引く気はない。

「悪いが今回はそれどころではない先に潜入した緋村共連絡がとれないだからこいつにも」

と宇髓が話すとき後ろに人の気配が。

「今の話しは本当にですか??宇髓さん!!!」

「ほう、オレの背後をとるか……………!!竈門か……………」

と横にも任務帰りの伊之助と善逸もいた。

「てめえ!!!オレ様のアカイに何しやがる!!!」

「アオイです!!!って今はそれどころじゃなくて!!!!」

宇髓はアオイを伊之助に渡しこう告げる。

「ならお前ら三人オレに着いてこい、竈門話しは後でしてやる!!」

(竈門炭治郎が始まりの呼吸の使い手更に煉獄とこいつ等と協力し上弦の参を倒している緋村が行方不明な以上戦力は多い方がいいな)

「アカイ!!!オレが帰ったら!!!天ぷらだぞ!!!」

「わかりましたからおろしてください!!!伊之助さん!!!!」

「竈門君!!!」

「はい！カナエさん!!!」

「あの緋村君が連絡を途絶えさせるその意味はわかるわよね???あなたも強いけど無理は禁物よそして約束して皆で帰ってくるって.....」

カナエはわかってているそんな約束をしても難しいのはでも祈るしかない今の自分にはそれしか出来ないのだから。

「わかりました!!!行つてきます!!!」

「うーん!!やっぱりいい子ねカナヲが好きになるのもわかるわあ!!!さてここは念の為に」

カナエは鴉を飛ばした後にこれが炭治郎を.....。

「よし、いいかお前ら!!!出発する前にこれだけは肝に命じておけ!オレは神だ!!そしてお前らは塵だ???いいか神の命令は絶対だからな!!!」

善逸は思ったやばい奴だとすると隣の炭治郎と伊之助は。

「オレはヒノカミ様です!!!よろしくお願ひします神様!」

「オレは山の王だ!!!よろしくな神様!!!」

善逸は思った伊之助はともかくまさかの炭治郎迄.....三
人が此方を見つめてくる善逸は考えた何?オレがおかしいの??え??
.....わかつたよオレも言えばいいんだろ!。

「オレは雷の神だ!!!」

「良いじゃねー!!か!!!派手派手だなあ!!おい!!!」

「流石!!!善逸だ!!!だが禰豆子はやらないからな!!!」

「オレ様の子分なだけはあるぜ!!!」

善逸は思った帰りたいと後炭治郎なんか言った???気のせいか、そんなやり取りをしながら藤の家に着いたそこで詳しい話を聞く事となる。

「お前達には遊郭に潜入してもらおうそこでオレの嫁と緋村を見つけて

ほしい」

「え？嫁？アンタそんなふざけた格好して嫁がいんのかあ？なめてんのかあ？」

「何でお前そんなにキレてんだよ三人いるぜオレの嫁」

「雷の呼吸、捌ノ」

炭治郎が手刀を繰り出し善逸を寝かせる、その後伊之助が失礼な事を言うもんだから今度は宇髄が腹に拳をめり込ませ気絶させる炭治郎はオレの同期がすいませんと頭を下げるのだった。

「竈門お前は潜入しなくていいオレが潜入する、お前は緋村を見つかる事を最優先に動いてくれないか??」

「……………わかりました、宇髄さん、善逸と伊之助をお願いします」

「おう、派手に任せとけ」

「墮姫様……………やはりこの遊郭にまだネズミがいるようで」

「まだ？いるの？この前三人殺したってのに全く懲りないわね、でもあんたの事だからもうネズミの場所はわかってるんじゃないの？魔姫？」

「まあ一応は今回は一人の用ですが恐らく私に気付いておりますね」

「なるほど……………ね、まあいいわもう少し様子を見ましょ待ってれば獲物はまだまだ増えそうだしね」

と墮姫と呼ばれる鬼の瞳には上弦の肆と刻んである、そして魔姫と呼ばれる鬼。

剣心は宇髄に連絡出来ずにいた、その理由は一つ店の花魁として以

外な事に売れてしまったからもう一つが何者かに見られていると感じた為だ視線を感じた時に透き通る世界で見ると玉の様な物が見えたそこで剣心は、確信するここに鬼がいるとだが今下手に動けば鬼は逃げるならば向こうが動きを見せる迄待つしかないと考えた。

即ち、上弦の肆と剣心は今完全な膠着状態にあると言う事だ。

宇髓、善逸、伊之助はそれぞれ別々の店に潜入していった炭治郎の放つ異様な色気に店の支配人達は喜んで三人を雇ってくれた、そして炭治郎は剣心の匂いを辿って。

宇髓のいる店はときと屋須磨が潜入している店だ他の遊女達に聞いてみてもわからないとか足抜けだろうと言うのが現状の結果だった。

伊之助が潜入した店は荻本屋、まきをが潜入した店だが噂話を聞限り宇髓のいる店と同じ内容だった。

善逸のいる京極屋にて。

「やはり、盗み聞きしてみても足抜けとかしかわからないな
……………ん??」

善逸はある音に反応する表情がキリツとなり一人呟く。

「女の子が泣いている?こっちか!!!」

炭治郎は一人ある店に入っていた、……………そして今眼の前にいる一人の遊女。

「ここも中々不憫でしてね透き通る心で辺りを見渡せばわかるものもあるのですが」

劍姫（劍心）の話聞き炭治郎は透き通る世界で辺りを見渡す、見えたものは劍心を監視するように何かか浮かんでいたこれは間違いなく血鬼術だと思ったそして炭治郎は劍心に目線を送り。

「中々に不憫であるとおれも思います、……………また来ますね」
（禰豆子もしもの時は、劍心さんを頼むぞ）

わざと箱を置いて劍心のいる店を後にする、そしてどこから鬼が術を使っているかを探る為に遊郭を駆け回るのであった。

「ごめんなさい、次はちゃんとしますから許してください」

一人は機嫌を悪そうにしながら椅子に座りもう一人の女性は禿の髪を引っ張っている。

「蕨姫様がちゃんと指示を出していただけますでしょうか？ 貴方は何回言えば気が済むの？」

「もういいだろ？ その子も謝ってるんだもう辞めてあげなよ」

善逸は髪を引っ張っている女の手を掴み、睨みつける。

「何？ あなたは私に文句があるのかしら？」

「辞めなさい波溜、ごめんなさいね私から波溜にはきつく言っておくから」

椅子に座っていた女性蕨姫が威圧感を放ちながら善逸と禿の少女に詫びをいれる、が善逸も威圧感を逆に放ち互いに一触即発の状態となっていく。

（こいつ私の圧力に全く動じない……………どうやら鬼狩りねしかもかなり
の使い手柱かしら？）

波溜は蕨姫の脳に直接話をする。

（墮姫様、ここはこの小僧を殺すとしてみましょうその騒ぎを聞けば他の仲間も気づくでしょう）

（そうね、魔姫あんたの言うとおりにかしら？ ここも潮時と思ってたし……………派手に行きましようか）

(こいつ等の音間違いなく上弦の鬼……………)

今遊郭で壮絶な死闘が始まろうとしていた。

戦場を駆ける剣士達

二人の女性は並ぶようにして善逸の前に立ち塞がる善逸を刀を取り出しいつでも戦える状態に入る。

「堕姫様ここは私がこの子にはきついお仕置きが必要みたいなので」

堕姫は少し後ろに下がり魔姫が前に出る、片手を上げた瞬間三つの魔法陣が現れたと同時に赤い光線が善逸を飲み込み店の二階を全て吹き飛ばす。尚他の人達と禿は予め隠がおり避難させている。

「流石は魔姫ね、さて私は今から」

後ろから殺気を感じ堕姫は後ろに翔ぶ、突如現れた男はそのまま攻撃をしようとするが魔姫が傀儡を召喚し堕姫を守るように囲む。

「つち、流石は上弦の鬼か……………派手に斬り落としてやろうとしたのによ」

「その刀に掘ってある文字、柱ね」

「堕姫様、ここは」

「音の呼吸、壱ノ型、轟！」

床を叩き付け爆発を起こし傀儡を吹き飛ばす、そのまま二本の刀を交差させるようにしながら魔姫の頸を狙う。

「音の呼吸、参ノ型、音叉共鳴！」

が堕姫の鎖が宇髓の刀を弾く、そのまま堕姫は着ている帯を二本攻撃に使うが宇髓はそれを防ぐ。

「ふふ、流石は柱ですがあなたの敗北は絶対です血鬼術、鬼光砲、三門開放」

先程善逸に使った技を放つ宇髓を巻き込む用に爆発が起こり店は崩れ落ちていく。

「魔姫、あなたも私に仕えなくて上弦に入ればいいのに」

「いえ、私は堕姫様に仕えることで心の傷が癒えるので」

「ではここからは」

瓦礫の中から宇髓は片腕が無い状態で立ち上がる。

「音柱、宇髓天元を、舐めるな」

その名前を、聞き笑い始める墮姫。

「そうかああなたが天元様ねふふこの前喰った女共が泣きながら天元様天元様って言ってたから覚えてたわふふ」

宇髓のこめかみに青筋が浮かぶ。

「てめえが……………ぶち殺す!!!」

「血鬼術、呪縛陣」

「なっ……………体が動かねえ……………」

魔姫は術を、使い宇髓の動きを完全に封じる。

「墮姫様にそんな言葉は、許しませんどう？この陣は？発動には手間がかかるけど人は絶対に動けなくなる後もう一つ陣を発動させたわあの剣姫の所のね」

「てめえ……………」

「ふふ安心しな、直ぐに嫁達の所へ送ってあげる!!!」

墮姫の帯が宇髓の体を斬り刻むそして帯が心臓を貫かんと迫るが。

「日の呼吸、灼骨炎陽」

瞬く間に帯を全て斬り刻まれる、そこに現れた剣士は。

「宇髓さん、……………すみません」

耳飾りの剣士、竈門炭治郎だった涙を浮かべながら鬼達の前に踊り出る。

「竈門……………謝るのはオレの方だ……………後は」

動かなくなる宇髓、炭治郎は一瞬で宇髓を安全な所に運びその場に戻る。

「耳飾りの剣士……………そうかあなたね上弦の参を討ったのはふふ楽しくなってきたじゃない」

墮姫は炭治郎を見ながら誰かと重ねるそして体が震えだすその症状は魔姫にも現れたようで二人共謎の症状に、苦しむが無理やり体を動かし炭治郎を睨みつける。

「魔姫あんたはその剣姫って奴を殺しなさい、こいつは私の獲物いい??」

「ふふわかりました、ではまた後ほど」

そう言うと、魔姫は剣心がいる店へ向かって移動を開始する、そして墮姫と炭治郎は向かいあったまま動かない。

「二つ聞く、お前はお前達は命を何だと思ってる??何故踏みにする、失われた命は帰ってこないお前達だつて元々はオレと同じ人間だった筈だ何故忘れる」

「つく、また誰かと……………いちいち煩いわねアンタ私はね?美しいの美しい私はね何をしても許されるよの!!!」

鎖を炭治郎に向かって放つ、それを匂いで嗅ぐとこの鎖は只の鎖だと判断する躲しながら龍の呼吸、龍翔閃を放ち鎖を問題なく破壊するそのまま墮姫は斬り裂かんと間合いを詰める。

(つつこいつ速い!!だが!!まだ反応出来る!!!)

「血鬼術!帯波状連撃!!!」

「日の呼吸、幻日虹・烈日紅鏡」

陽炎を産み出し、上空から帯を無限の描き切り裂くそのまま腕と足を即座に斬り裂くバランスを崩しながらも墮姫は帯を上手く使って炭治郎と距離をとる。

「逃さない、日の呼吸、円舞」

「つく、血鬼術!!帯上下梁塵」

帯が上下から迫るが円を描く事で難なく斬り裂き、頸を斬ろうとするが頸はが伸びきってしまい斬ることができない。

「舐めるな!!!血鬼術!!!八重帯斬り!!!」

(頸を限界迄伸ばし戻る瞬間を狙って斬った方がはやいな……………)

「行くぞ、日の呼吸、日暈の龍・頭舞い」

帯を龍が如き動きで躲しながら間合いへ容易く入り頸をもう一度斬る限界迄伸びるかを透き通る世界で把握して刀を一旦戻しながら頸を斬り落とした。

伊之助は墮姫達が後から食べようとしていた生き残りの遊女達を見つけ出すがそこには宇髓の嫁達はいなかった、その場を隠に任せる。

「あつちか!!! 待ってやがれ今行くぜこのオレ!! 山の王が!!!」

だが伊之助の行く手を阻む用に魔姫の傀儡達が現れるが二本の刀を駆使し蹴散らしながら炭治郎の元へと急ぐ。

「がはははは!!! 猪突猛進!! 猪突猛進!!! ウリイイイイ!!!」

「つち、この術は厄介だなさてどうするか……………来たか」

「その様子だと、私の仕業だとわかつているようねふふかわいいこ」

部屋の窓から動けないでいる剣心を見ている、魔姫。

「おい、この術は全ての者に有効なのか?」

「残念ながら人にしか効かないわ人にしかね……………それにこの陣は特別よさつき他の場所で使った陣は私の集中を阻害できれば消えるけどこの陣は別、あなたはゆつくりかわいいがってあげるわ」

と一歩、また一歩と剣心に近付くが剣心は誰かに声を掛ける。

「そうか……………ならここは助けてもらおうとするか頼むぞ禰豆子!!!」
「ム……………フガ!!!」

箱から禰豆子が飛び出し魔姫に強烈な蹴りを喰らわす、隣の建物に頭から突つ込んで行くのを確認しながら禰豆子は剣心を助けようとするが、光の玉が禰豆子に向かって飛んでいく。

「不意打ちとは、それにあなたのその着物……………なるほどね」

光の玉が禰豆子に当たり、剣心の前に倒れ込むがそれはわざとだつ

た。

「血鬼術!!爆血!!!」

剣心を捉えて、いる陣を爆血を使い灼き尽くそうと考えたのだ。そしてその判断は正しく陣は少しずつだが消えていく。

「つちこの小娘が!!!血鬼術!!骨傀儡兵!!!」

傀儡が禰豆子を襲う。剣心はまだ動けるようにはならない。

数が多く禰豆子ではこの場は持たない。その時、雷鳴が轟いた。

「雷の呼吸、壱ノ型、霹靂一閃・捌連!!!」

その場にいた傀儡は全て斬り捨てられていた、そして禰豆子と剣心を守るように善逸が二人前に入る。

「遅くなりました、剣心さん、禰豆子ちゃん」

「ムー……………」

「まさかお前に助けられるとは、禰豆子とお前のおかげでオレも動けるようになった」

と殺気を魔姫に飛ばすと魔姫はその場に倒れ込み動けなくなる。すかさず剣心が剣を抜こうとするが善逸が。

「すいません、剣心さんあの鬼だけはオレが……………オレが倒さなきゃ駄目なんです」

「善逸……………いい眼だわかったオレと禰豆子は炭治郎の元へ向かう」

禰豆子は善逸の袖を握っている、表情は若干暗い。善逸は笑顔で禰豆子の頭を撫でる。

「禰豆子ちゃん帰ったらまた、夜散歩に行こうね!!」

「フガ!!!」

禰豆子と剣心は炭治郎の元へ急ぐ、そして善逸は魔姫との決戦に臨む。

笑顔

「まさかあなた一人残るとはお馬鹿さんでも私は嫌いじゃないわふふ」

「ここは殺りあうには狭い上に行こう」

魔姫と善逸は店の屋根に移動し互いに距離を取り向き合う体制にある、善逸はいつでも刀を抜ける状態になり魔姫も後ろに三つ魔法陣を浮かべる。

「オレはあなたに言いたい事がある」

「……………何かしら？遺言なら聞かないわよ」

「君が髪を引つ張り怪我をさせた禿の少女に謝ってくれないか？」

このまま善逸は言葉を続ける。

「禿の少女は君達が稼いだ金で衣食住を与えられているだからと言って、少女は君達の所有物ではない何をしても許される訳ではないんだましては泣かせる何でもつての他だ。」

「何？あなたは私や堕姫様に説教するつもりなの？何？所有物じゃないって？ふふ笑わせないでこの街では女は商品なのそれなのに私や堕姫様が稼いだ金でのうのうと暮らすガキ共が居るっただけで腹がたつの、私達があのガキをどう扱おうが関係ないでしょ？」

「そうか……………今でオレは完全に頭にきた、オレは今から君を怒る今迄が許されたのであってこれから許される訳ではない」

「そう……………耳障りないいわさっさと死んでしまいなさい!!!」

三つの光線が善逸を襲うそれを体を捻りながら躲していく、そのまま刀を振るが魔姫は杖を使い刀を防ぐ。

「……………っち」

「どうしたの？その程度？、血鬼術、魔鬼線香弾」

光の玉が善逸を追尾する形で迫るが。

「雷の呼吸、壱ノ型、霹靂一閃・三連」

連続攻撃で光の玉を斬り裂くそのまま霹靂一閃を魔鬼に向かって放つが杖を使って防がれるそのまま魔姫は魔法陣を四つに増やす。

「さあ避けなければ死んでしまうわよ？血鬼術、鬼光砲・四門開放！」

「つつ、雷の呼吸、漆ノ型、雷光一閃・四連！！！！」

光の反射を、思わず四連撃で光線が発射される前に陣を破壊するが休む間もなく光の玉が善逸を飲み込み爆発が起こる。

「ぐっ……………ああああああ」

そのまま善逸は別の建物の屋根に倒れ込む魔姫はそれを鼻で笑いながら隣の屋根に降り立つ。

「ふふ移動速度は既に把握してるの残念だけどね、あんなに威勢が良かったのにこのざまなんてあなたは一体何の為に戦うのかしら？」

「うえーんお兄ちゃんこいつ酷いの私の頸を斬ったのよ！！！！」

炭治郎は動揺を隠せないでいたが確信はあった。

「この娘の言うとおりで出てこい隠れていても匂いでわかるんだ君の匂いは隠せている様で隠せてないよ」

墮鬼の背中から別の鬼が姿を現したその雰囲気はこの女の鬼とでは、比べ物にならない程の威圧感を放っていた。

「へえお前よくオレに気づいてたな？いいなお前才能に恵まれて殺したくなるよ」

「才能そんな物はオレにはない！殺す何てそんな言葉を簡単に使うの

は許さない！」

「お兄ちゃんそいつ酷いの二人でさっさと殺そ！でもそいつの眼玉は残してね赫くて綺麗だから」

「おういいぞー兄ちゃんに任せとけ」

鎌と刀がぶつかり鏢迫り合いになる、押し合いの最中に帯が四本炭治郎を襲うが炭治郎は眼の前にいる鬼妓夫太郎は強いここで帯に気を取られれば。

(ここは帯の攻撃は喰らうしかない!!!長男だから我慢できる!!!)

帯は炭治郎に触れる事なくバラバラに斬り刻まれる、そのまま謎の衝撃波で墮鬼は吹き飛ばされる炭治郎と妓夫太郎は人の気配がする方へと視線を向けると。

蝶の髪飾りを着けたサイドテールの髪型をした女性剣士、栗花落カナヲが立っていた。

「私は、怒ってるのそれはもう怒ってるの何で怒ってるって？私の炭治郎をあまつさえ誘惑している年増がいるから」

「カナヲ……………」

「何だあ？」

炭治郎と妓夫太郎は思わず鏢迫り合いの力を緩めてしまう。

「何ですってこのブスがぶち殺すわよ？」

「残念でした私は炭治郎に綺麗って言われてるの他の有象無象が何と言おうが聞く気はない」

今、女の戦いが始まる。

「っち、そうかあてめえか上弦の参を殺ったのはよ」

「それがどうした？」

鎌を振りながら炭治郎は刀を横から縦にと上手く鎌を防ぐ様子見

は終いと言わんばかりに妓夫太郎は攻撃の速度を上げる。

「上弦の参を倒したのはすげえがオレもよあの方に血を貰った事で更に力をつけてんだよな」

「血鬼術、飛び血鎌・全法衣列斬!!!」

血の刃が全方位へと飛んで行き炭治郎は刀を細かく振って防ぐがその内の三つの刃が体の腕と両足に当たる。

「……………日の呼吸、陽華突」

落下の勢いを利用し突きを放ち右腕を斬り落とすそのまま炭治郎は別の型を放つ。

「日の呼吸、灼骨炎陽!!!」

「面白え!!!血鬼術!!!飛び血鎌・両断!」

巨大な刃と全方位を斬り裂く型がぶつかり合う、打ち勝った炭治郎は頸を斬ろうとするがその場に倒れ込む。

(何で……………体の動きが鈍い……………)

「オレの血鎌はなあ猛毒があるんだよ!はは安心しろ?頸だけは綺麗に残してやるからなあ!」

(動けえ!!!動けえ!!!動けえ!!!)
!!!

「龍の呼吸、漆ノ型、龍巻閃・嵐」

回転斬りで妓夫太郎の両腕と両足をたやすく斬り伏せその場に倒れ込まされる。

「このブスがああ!!!血鬼術!!!帯波状連撃!!!」

「ふん……………花の呼吸、伍ノ型、徒の芍薬!!」

帯と花の連撃は辺りを巻き込みながら空中へと移動するが連撃を高速から超高速へと上げて帯と墮姫の体は斬り刻まれるが墮姫も負けじと帯を回転させカナヲを前方へと弾き飛ばす。

「ブスの癖にやるじゃない!でもそれじゃ私には勝てないわよ!!!」

「年増の言うことは、いちいち耳障りね黙らせる」

女の戦いも死闘の様相を見せ始める。

「オレは今迄色んな女性に騙されてきた……………オレは知って
たんだ自分が騙されている事くらいでもオレは女性には笑っていて
ほしい」

体をゆっくり起こしながら善逸は魔姫を見つめる。

「笑顔？そんな物で何かわかる？」

「変わるさ、オレは思うんだ女性を綺麗に見せるのは化粧なんかじゃ
ないよ女性を一番綺麗に見せるのは笑顔だよオレは世の女性全ての
人に笑っていてほしんだ、それは鬼であるあなたにもだ」

「……………何？」

「あなたからは悲しい音がする……………泣いているようなとても悲し
い音がオレはその悲しみからあなたを開放するその為に戦う」

「黙れ……………黙れ!!!血鬼術!!!鬼光砲・五門開放!」

「雷の呼吸、捌ノ型、雷光一閃突撃!」

善逸は雷光一閃の速度から突きを放ち光線を巻き込みながら魔姫
の右腕を斬り落とし、魔姫は即座に光の玉を十個放つが。

「雷の呼吸、壱ノ型、霹靂一閃・十連」

(何だ動きが速くなっている!?!そんな馬鹿な何だその頬にある痣は
??)

善逸の頬に稲妻を思わす様な痣が出ていた。

「終わりにしよう、これ以上はあなたの泣いてる音は聞けないから」

「それはこっちの台詞だあ!!!血鬼術!!!鬼光砲・全門開放!!!」

術を放とうとした時鬼姫は過去を思い出していた、その瞬間理解した自分は死ぬのだと。

人だった頃は、結婚した男は私に毎日暴力を振るった毎日毎日、毎日私は隠れて泣いていた私はただ誰かに優しくしてほしかっただけなのにある日堕姫様に出会った、私は望んでこの人に着いて行ったこの人なら私を。

ああ君の様な人と結婚出来ていたならどんなに幸せだったのでしよう君に愛される女性が羨ましい、来世があれば何てふふ。

「雷の呼吸、玖ノ型、火雷神」

雷鳴は遊郭全土に轟いた。

二人で一人

雷鳴が遊郭全土へと轟いた、善逸はそのまま地面に落下しながら魔姫が消えて行くのを確認すると善逸は静かに眼を閉じた。

誰かが自分を抱える感覚に襲われる善逸は眼を開けると、禰豆子に横抱きされていたのだった。

「禰豆子ちゃん……ごめんよ心配かけたね……でもまだ皆戦ってるんだオレも連れっけてくれない？」

「フガー！」

「雷鳴………か善逸は勝ったようだな……おいそろそろ再生させたらどうだ？」

「つち、ばれてたか残念残念残念」

剣心と妓夫太郎は二人距離を空けた状態で対峙している、剣心の横には炭治郎が膝をついて地面に座っている。

「炭治郎……呼吸で毒の巡りを遅らせる禰豆子なら何とかできる筈、後お前はカナヲの応援に行け」

「剣心さん、わかりましたこいつはお願いします!!!」

「わざわざ逃がすかよ！血鬼術!!!飛び血鎌・両断!!!」

炭治郎に向かって巨大な血の刃が迫るが、即座に剣心は刃の前に立つ。

「龍の呼吸、参ノ型、龍翔閃」

血の刃を神速の斬り上げにより弾き飛ばしそのまま剣心と妓夫太郎は互いに間合いを詰めていく、打ち合いになる妓夫太郎は鎌を両方同時に挟む様にして攻撃をする。

「龍の呼吸、捌ノ型、双龍閃」

剣心は鞘を使い二つの鎌を受け止め、剣で腹を真っ二つに斬る。

「ぐっ……………やべえなくそ！血鬼術!!!飛び血鎌・全方位列斬！」

「……………龍の呼吸、伍ノ型、龍巢閃・連翹！」

飛び散る刃を散乱する斬撃で全て叩き落とす、そのまま剣心は妓夫太郎の頸を容易く斬り落とす。

「ふふふふ、魔姫は死んだようねでもこれで私は力が全開になるわ!!」
段々と墮姫の髪の色と帯の色が変わり始める。

「……………ふう、ならこっちも遠慮はいらないよね？花の呼吸…」
型に入ろうとする前に墮姫の攻撃が邪魔をしてくる、カナヲは内心驚いた攻撃速度が今迄の比ではない事に帯がカナヲに当たる寸前斬撃が入る。

「猪突猛進!!!伊之助様のお通りだぜ!!!」

「つち、目障りね次々と……………つ」

「日の呼吸、烈日紅鏡」

背後から炭治郎の斬撃が入り帯と腕を斬られるが直ぐに再生させ墮姫は帯を炭治郎、伊之助、カナヲの三人に向かって放つ。

「伊之助!!!カナヲの型を打たせる！俺達でアイツを引きつけるぞ！」

「ああ？わかったぜ!!親分に任せとけ!!獣の呼吸！獣化！一ノ牙、強食い噛み!!」

獣の如き低い体制になりそのまま、二つの剣を上下から振り墮姫の帯と足を斬りつける、そのまま炭治郎は伊之助に、合わせる様に攻撃に移る。

「日の呼吸、火車!!」

回転斬りで伊之助が斬った逆の腕と足を斬り落とし、そのまま炭治郎は連続で攻撃する。

「日の呼吸、円舞!!」

腹を斬り裂き堪らず距離を取ろうとするが伊之助が追撃する。

「獣化！肆ノ牙、空波双牙翔!!!」

二つの真空波が墮姫を飲み込むが帯を使って真空波を弾き飛ばす。

「ふふどうしたの？特に耳障りの坊や？さっきまでの動きのキレがな
いわよ？」

（まずいな……………さしてどうしたのか……………ん？人の匂いがそれも女
か）

妓夫太郎は剣心に推され距離をとっていた、が直ぐに剣心は距離を
詰めてくる。

（ここはとる道は一つしかねーみたいだな）

「頸を斬って死なないのであれば斬り続ける！」

妓夫太郎は、鎌を地面に叩きつけ土煙を上げ剣心の視界を遮る剣心
は土煙を剣を振って吹き飛ばすと妓夫太郎はその場にいなかった。

「油断したなはははははははははは、おら剣を捨てやがれ」

「貴様……………」

逃げ遅れた遊女を人質にとる妓夫太郎、剣心に動いたらこの女を殺
すと言い何もできない剣心に妓夫太郎は鎌を使って斬り付ける。

「ぐっ……………貴様……………」

「どうした？剣八郎!!大丈夫か？」

「……………何とか」

炭治郎も毒の影響があり動きが鈍くなってきている、それを伊之助
は把握し炭治郎を助けながら動く。

（ハナヲまだか？）

(天元様……………天元様……………最後まであなたの勇姿を見してください)

「てめえら……………そうだな……………最後まで美しく派手に……………」

「どうしたよ？ああ？さつきまでの勢いはよお？但し女の命はねえがな」

「……………ちっ」

「私の事はいいからこんな奴はやく!!!!!!!」

!!!!!!!

妓夫太郎はニヤニヤしながら遊女を人質にしている為背後から近付く気配に気が付かなかった。

「派手に行くぜ……………音の呼吸、奥義、爆音苑劇殺」

片手で放つ為威力は半減させるが高速回転斬りにより腕を飛ばされ宇髓は遊女を助けたす、そして宇髓は剣心を見て笑いながらこう告げる。

「派手にやってやれ……………剣……………心……………」

遊女を救い剣心を助け後の事を思いを剣心に託し宇髓は力尽きた。

「おおおおお!!!!!!龍の呼吸、拾壺ノ型!!!!!!戦乱龍撃閃!!」

暴風が如く斬撃を妓夫太郎に浴びせ炭治郎達が戦っている方向へと吹き飛ばす、剣心は毒を呼吸で遅らせ宇髓の方へと視線をやり一礼して妓夫太郎を追う。

(必ず決着をつける……………天元さん……………)

「ありがと、炭治郎流石私のだ、ん、な、様ふふ行くよ花の呼吸、捌ノ型、千本桜！」

カナヲの背後から桜の花びらが現れその刃は墮姫へと向かう。

千本桜、特殊な技術を用いて刃を花びらの様に作り変えそれをカナヲは剣の風圧更には自身の優れた視力を持って風の動きを予知する事で刃を操り敵を斬殺する。

「……………邪魔何だよ!!!血鬼術!!八重帯斬り！」

「カナヲ…………その話は後日ゆっくりしような…………日の呼吸、炎舞!!!」

「ほわほわさせんな!!!獣化!!!陸ノ牙、猪原爆!!!!」

二人の攻撃とカナヲの千本桜で墮姫の体は斬り刻まれその場に倒れ込む。

「クソ……………お兄ちゃんはお兄ちゃんはどこ？」

「やっぱり頸を斬っても何でかしら？」

「……………何かある筈……………ぐっ」

「大丈夫か？墨五郎！」

カナヲと炭治郎と伊之助は警戒を続ける、すると墮姫の近くに何か落ちてくる。

「……………つちお前の方も苦戦してるみたいだな」

「お兄ちゃん！」

そこに剣心も到着する、いよいよ戦いも佳境に入る。

「剣心さん！」

「龍柱様!!!」

「剣心!!!」

「よかった無事だったか………だが話は後だ先にやらねばならぬ事がある、だろ？」

三人は気を引き締め直す、炭治郎と剣心は妓夫太郎の毒の影響で体力が減ってきている。

「ここはもうやるしかねーな堕姫よ」

「それしかないみたいだなね」

「俺達は「私達は」

「二人で一人だ!!!」

妓夫太郎と堕姫が一つになっていく、炭治郎はそれを見て堕姫の中にいた時の状態を思い出す、匂いが全く変わっていた、それだけでさっきまでと違う事が明らかにわかる。

「炭治郎、カナヲ、伊之助下がっている………」

三人はそれを無視し、剣心の隣に並ぶ、今の剣心は毒の影響を受けている、それは炭治郎も同じだが、それでもここで宇髄に、続いて剣心迄死なせてはならない、三人はそう考えた。

「ふう、さあ塵共!!!お仕置きの間だ!!!」

帯の先端に鎌が付いており、帯を振ることで血の刃が辺りへと不規則に飛んでいく。

「合体か………くだらん！ケリをつけるぞ！龍の呼吸、漆ノ型、龍巻閃・凧!!」

「思い知れ！「俺達」私達」の力を!!!血鬼術、血鎌帯蓮華!!!!」

瞳を閉じて

帯と鎌の同時攻撃を特殊な回転を加えた斬撃で斬り付けるが妓夫姫はそのまま剣心との距離を詰め手に持った鎌でも斬りつけてくる。(つち再生速度だけではないな……………全ての能力がはね上がっている)

辛うじて攻撃に反応して、刀で受け止めるが攻撃は尚も激しさを増していく。

「はははははははははは!!どうした?」の? 血鬼術! 血鎌帯八斬り!

「龍の呼吸、拾式ノ型、九頭龍閃!!!!!!」

八連続の攻撃に九つ同時斬撃を放ち相殺する、その内の一撃が妓夫姫の頸を掠めるが斬り落とすにはあと一歩足りなかった。

「流石だな!!!でも、毒の方もやばいんじゃないか?」の?」

「……………黙れ」

剣心が斬撃を放とうとするが、鎌で防がれる追い打ちをかけるように帯が迫るがカナヲの千本桜がそれを阻む。

「龍柱様!しっかり!しのぶ姉さんに怒られますよ!!」

カナヲの言葉を聞き、刀を握り直す剣心。

「あいつの説教は長いからな……………つく」

「つち!!!邪魔をするなど言っているだろうが!!!血鬼術!!血鎌全方位帯陣!!」

全方位に帯と血鎌が飛び散り建物を吹き飛ばしながら剣心とカナヲに迫るが更に伊之助と炭治郎も参戦する。

「剣心さん!日の呼吸、碧羅の天!」

「てめえらだけ目立つんじやねえ!! 獣化!! 壱ノ牙強食い噛み!!!」

二人の斬撃により辛うじて威力は弱まるが攻撃はまだ迫ってくる。

「糞……………毒の影響か……………」

「やべえなこれ!!」

「炭治郎!!! 伊之助!!! 龍の呼吸、伍ノ型、龍巢閃!」

!!!!

斬撃を、炭治郎と伊之助を守る様に放ち二人を守るが脇腹を帯が斬り裂かれるが、剣心はそのまま妓夫姫との距離を詰めていく。

「中々粘るな!!! いいぜお前!!! 血鬼術!!! 飛び血鎌・帯柄め!!!」

帯と血鎌が交互に迫るが剣心は斬撃で弾きながら距離を詰めようとする。

(このままではオレと炭治郎が……………彌豆子が来るまでに)

懐に入り込み、再び互いに連続攻撃が始まる。

「つち…毒の影響を、受けてるつてのによ!!! うぜえな! 血鬼術!! 帯血鎌連撃!」

帯に血鎌の血を纏わせ威力を上げて攻撃をする、それに剣心も更に速度を上げようとするが毒の影響で速度が上がらない。

(……………つち、このままでは炭治郎や伊之助、カナヲを……………)

離れた所で、炭治郎、伊之助、カナヲが此方に走ってきている。

「剣心さ!!! ん!!!」

「龍柱様!!!」

「剣心!!!」

!!!!

三人が間に合わないと思った瞬間だった。

剣心は瞳を閉じた状態で斬撃を、放ち妓夫姫の足と腕を斬り裂いていた。

「いいか剣心、戦いは常に万全の状態で挑める訳ではないだがなそれは逆に幸運でもあるかもしれん」

「幸運って師匠そんな状態でどう、すればよいのですか？」

「体の感覚を閉じるのさ眼を瞑り全ての感覚を捨てる」

と比古は当たり前前の様に口にする、剣心は流石に驚き開いた口が塞がらないそのまま比古は話しを続ける。

「全てを捨てるからと行ってもそう簡単にできる事では、ないオレ自身もその極意に至った事はないからなと言うよりもそこ迄追い詰められた事もないしな」

笑いながら言う比古、剣心はそれを黙って聞いている。

「でも、師匠そんな状態で他の仲間と意思疎通はできるのですか？」

「できる筈だ、その極意はな体が勝手に反応してくれるんだ恐らく仲間と連携になっても何とかなるだろう」

「筈って師匠は何故その極意に詳しいのですか？」

「この極意、更には痣に至った龍の呼吸の剣士は初代だけだからだ、後は諸説として残ってきた今迄の剣士達も極意、痣の発動を目指したが……」

「……………今迄、連面と続いてきた龍の呼吸の剣士達の思い」

「だがな全て捨てると言ってもな命を捨てる何て考えは決して持つな、生きると言う思いそれだけは忘れるなその上でこれからの戦いの中で追い詰められた時、捨ててみる」

比古は酒を呑みながら最後に星を見ながら剣心に告げる。

「お前なら必ず辿り着ける、オレはそう確信している」

妓夫姫は動揺していた、眼の前にいる鬼狩りは確かに毒の影響もあり動きは鈍くなっていた更にこちらは合体した事により能力を何倍

も高めた現に単体では歯が立たなかつたが圧倒して戦える様になつた、だが今こちらを斬り裂いた確かな一太刀悪寒がした気がした。

「っち!!!舐めるな!!!血鬼術!!!帯血鎌連撃!!!」
「.....!!!」

帯と血鎌の波状攻撃を紙一重に躲していく、そして躲してその帯を斬り裂きながら剣心は距離を詰めて行くが行く手を阻む様に血鎌が剣心を襲う。

が血鎌すらも流れるような動きで軽らかに躲して妓夫姫の腕と足を瞬時に斬り裂きそのまま頸を斬ろうとするが再生させた帯から大量の血鎌を飛ばしそれを阻止する。

大量血鎌さえも剣心は躲す、そのまま息も乱す事もなく一旦距離をとる。

それを見ていた、炭治郎、伊之助、カナヲは純粹にこう感じた凄いと。

「剣心さん.....伊之助!カナヲ!オレ達も行こう!!!」

「わかった!行こう!炭治郎!!」

「おう!行くぜ!!!」

三人も剣心と妓夫姫の戦いに再び乱入すべく駆け出す。

「糞が!!!攻撃が当たらねえ!!!」

どんな血鬼術も躲せれるのに苛立ちを、見せ始めるが剣心は途端に膝を地面に付く。

「つく.....不味いな.....極意が.....」

体力が、減り始めた事で無心無間の極意が解けてしまったのださかさず三人が加勢に入りこむ。

「日の呼吸、日暈の龍・頭舞い!!!」

不規則に斬撃を放ち帯を数本斬り裂く、そのまま流れる様に伊之助とカナヲを斬撃を入れ妓夫姫を後退させる事に成功する。

剣心は呼吸を更に強め毒の影響を何とかごまかし三人に声を掛ける。

「炭治郎！カナヲ！伊之助！オレが道を開く！、後伊之助！刀をオレに一本貸せ！」

「わかりました！剣心さん!!!」

「はい！龍柱様!!」

「おら!!!受け取りやがれえ!!!」

剣心は伊之助から刀を受け取り二本の刀を持って妓夫姫に向かって距離を詰める、その後を追うように三人も剣心に続く。

「お兄ちゃんあいつら!!!ムカつくよ!!!!!!」

「わかってるよ!!!、皆殺しにしてやる!!!!!!オレ達が負ける筈がねえんだ!!!」

「来やがれ!!これで全員終わりだあ！血鬼術！奥義、無限帯血連山！」

剣心は走りながら呟く。

「悪いがこれで終わりだ………龍の呼吸、拾参ノ型、星光連龍閃!!」
二本の刀が。

何度でも

光の如く超神速の十六連撃で迫りくる全ての攻撃を斬り裂くそのまま剣心は追撃をしようとするが、限界を迎えその場に倒れ込む。

と同時に三人が懐に入り込む、が妓夫姫はすかさず帯と鎌を再生させ三人に襲うが。

「炭治郎!!伊之助!!!攻撃は私に任せて!!花の呼吸!捌ノ型、千本桜!!」
千本桜の刃の花吹雪が帯を斬り裂いていき、炭治郎と伊之助が頸を断ち切らんと刀を振るう。

「つち、分裂するぞ!!!堕姫!!!!!!」

「わかったわ!!!お兄ちゃん!!!!!!それでもってくらえ!!」

分裂して尚かつ堕姫が伊之助めがけて帯を放つが。

「雷の呼吸、捌ノ型、雷光一閃突き!!!」

痣を発動させた善逸の一突きにより帯はその場から消えてなくなった。

「決める!!!炭治郎!!!伊之助!!!!!!」

そして炭治郎が妓夫太郎の頸に刀を振るうが中々刃が通らないがここで炭治郎の額にと変化が現れる、善逸と似たような炎の様な痣が浮かび上がっていた。

（斬る!!必ず!!!心を燃やせ!!がああああああああ!!!!!!）

伊之助の方も一本の刀で斬ろうとするが頸がしなつて中々斬れないが善逸が反対側からも刀を振るう。

「斬るぞ!!!伊之助!!!雷の呼吸!!壱ノ型、霹靂一閃・神速!!!!!!」
「おうよ!!!門☒!!!おらおらおらおら!!!」

（何だあの痣は???それに黄色い奴にも似たような痣が?）

（嫌よ!!!頸が斬られちゃうお兄ちゃん!!!!!!）

「「斬れろおおおおおおお!!!」」

二つの鬼の頸が宙を舞った。

(どうやら、派手に終わった様だな……………さてオレも)

宇髓が一人旅立とうとした時、誰かが服の袖を掴む振り返ると三人の妻達がいた。

「天元様、そつちではないですよ……………こつちです!!」

「そうですよ!何で一人そちらに行こうとしてるんですか!」

「天元様!!!」

雛鶴、須磨、まきをの三人は宇髓を行かせない様にするが宇髓はこちらを見ようとしめない。

「オレはお前等を死なせてしまった……………オレはこつちに行くお前らはあつちに行け」

「なら私達も一緒に行きますよ!!!」

「何で自分一人で背負おうとしてるんですか!私達が死んだのは私達自身のせいですから!」

「天元様……………私達はいつまでも何度でもあなたの傍にいます」

「お前等わかったよ……………行くよそつちに……………皆で」

宇髓、雛鶴、須磨、まきを、の四人寄り添いながら花吹雪舞う花畑を歩いて行った。

剣心は眼を覚ますと泣きながら寄り添うカナヲと善逸がいた。

「そうか……………終わったか……………んオレの毒は？」

善逸が答える。

「禰豆子ちゃんが血鬼術で炭治郎も治してもらってますよ」

そこに隠達が到着し、剣心が指示を出し炭治郎はどこにいるかを善逸に問うと。

「炭治郎なら鬼が死んだかを確認すると言って禰豆子ちゃんにおんぶされてどつかに」

「つち、あいつ下手に動くと思ぬつてのに……………カナヲ、蝶屋敷に鴉を飛ばしてくれ」

カナヲはこくりと頷き、善逸は剣心につっこみを入れる。

「いやいや剣心さん、あなたも動くと思ぬつてますからね？そしてオレも」
「言うないなや善逸は、気を失ったから隠に先に蝶屋敷に運ぶ様に頼み炭治郎と禰豆子はどこかと探していたら炭治郎の声が聞こえてきた。」

「あつちか」

「嘘だよ……………そんなのは嘘だよ、これから君達は大勢の人達に恨まれ罵られるだろう誰も君達の味方をしてくれる人はいない……………だから喧嘩は辞めよう……………たった二人の兄妹何だから仲良くしよう」

「うるさい!!!うるさい!!!お兄ちゃん!!!こいつを黙らせてよ!」

堕姫は顔が消滅しながらも兄に助けを求めようとするが堕姫は消えてしまう。

「梅!!!」

（そりだ!そりだよ!!!あいつは梅だ!!!堕姫何て酷い名前なんかじゃなかった……………）

「なあ、お前はよ……………何で鬼になった妹をそんなに大事にするんだよ」

「簡単な事だよ兄は下の子達のささやかな幸せを願っているから、それはお前も同じな筈だ」

「そうか……………そうだよなあ」

「きちんと妹と仲直りをしてくれ、それがオレの願いだ」

「つけ、言われなくてもわかってるよ」

(ここは……………そうかあオレは死んだのか……………)

「お兄ちゃん!!!」

「梅……………すまなかった……………オレなんかの妹に産まれたが為に」

「そんな事ない！私はお兄ちゃんの妹になれてよかった！私はこれから先何度でもお兄ちゃんの妹になりたい！……………だから……………さつきはごめんね」

「ああ、オレも謝りたかったんだ、ごめんな梅…」

二人は手を繋ぎながら豪火の中を歩いて行った。

炭治郎は天に、消えていく鬼を見ながら呟く。

「仲直りできたかな」

「フガ！」

「できたさ、きつとな……………」

禰豆子が炭治郎に寄り添い、剣心は優しく炭治郎と禰豆子の頭を撫でながら空を見ていた。

その後、剣心、炭治郎二人も気を失った。

「そうか余程無惨も焦っているのだろうね、上弦の鬼の力が増しているのもそのせいなのかも

天元ゆつくり休んでくれ……時期私もそちらに行くよ……柱の件考えなくてはね」

「これで上弦の鬼も残り四人だ全くお前らは鬼だろう人間に負けるなどあつてはならん、黒死牟よ貴様も彼岸花の搜索は他の鬼に任せ鬼狩りを殺せ、そして半天狗、玉壺よ貴様等にも頼みがある」

「……………御意」

「ひい……………!!かしこまりました」

「ははあ……………!!」

こうして遊郭での死闘は幕を閉じた音柱の殉職、更に上弦の力を持つ鬼三体との戦いこの事は全鬼殺隊に伝えられるそしてある噂が回る。

今度の柱は、時透無一郎か竈門炭治郎か我妻善逸かと。

「炭吉よ、道を極めた者が行き着く先はいつの時代も同じだ必ず同じ場所に行き着く」

（縁壺さん……………オレはもつと強くなります!!必ず!!）

（誰の記憶だろうか……………何故この人はこんなにも悲しい事が続くのだろうか、それにこの人の剣技オレはどこかで見た事がある気がする……………）

夢の中である鬼を見た眼が六つある鬼。

（こいつは上弦の壺か？）

兄上を、救う為なら私は生まれ変わり再びこの世に戻る事を……………。

そこで剣心は眼を覚めますが何なら両サイドから人の温もりを感じ視線をやると。

真菰としのぶが寝ていたのでこれも夢と決め付け、剣心は再び眠りについた。

炭治郎は眼を覚めますが困惑していた、カナヲが横で眠っているからだ。

（オレにどうしろと言うんだ!!!剣心さん!!縁壺さん!!、教えてくれ!!）

「アオイ!!!一緒に、寝るぞ!!!!!!」

「ちよつと布団に入ってこないで!!!!!!」

遊郭編、完！

地獄の休暇編

休暇とは

「剣心、炭治郎、善逸、伊之助、君達には暫く休養を与える」

蝶屋敷にて休養をしている四人の元にお館様の鴉が手紙を持ってきたその内容が上記に記してある通りだ、伊之助はその意味を知るとアオイの静止も聞かずに山に遊びに行つた。

「……………これは、うーうーん」

炭治郎は一人考えていた、禰豆子もずっと箱の中で眠っているから何も心配はないのだが問題はカナヲだ。

（最近のカナヲは更に積極的に攻めてくるそれは嬉しいのだが、オレも男だそろそろ我慢が恐らくオレが次男だったら我慢できなかつたと思う）

今はカナヲはアオイが言うには用事があるみたいで一緒に買い物に行きアオイだけ先に帰つて来ていた。

剣心も悩んでいたカナエに恋愛とは何かを骨の髄まで叩き込まれた事により理解する事もできたが今の自分には誰かを愛する資格はないと思つている、だが真菰としのぶの怒涛のもうアタックにより心が疲れてきていた。

（休養か……………宇髄さんの為にもはやく回復させたいのだがここにいと）

剣心と炭治郎はそれぞれ女性の攻撃によりある意味疲れていたのだがここで剣心はある考えが頭によぎつた。

（炭治郎と善逸を連れ温泉にでも行くか……………伊之助は山から出てこないだろうし）

剣心が考え事をしてるとそこに。

元炎柱の煉獄杏寿郎が剣心の見舞いにやって来た。

「剣心!! 大変だったな!! 見舞いに来たぞ!!」

煉獄の視界に入った光景は炭治郎と剣心が服を普通の着物に着替え何やら荷造りをしていた、剣心と炭治郎は一瞬驚いた表情をしていたが煉獄だとわかった瞬間ホッと息をついていた。

「杏寿郎か……………すまんな折角来てくれたのに……………」

「杏寿郎さん!! ごめんなさい!! オレと剣心さんと善逸は温泉に行つてきますー!」

すると善逸もニヤニヤした顔で剣心の病室に入ってきた勿論背に荷物を背負っている。

「なんと!! お前達は温泉に行くのか! なるほど! よし! ならば煉獄家の行きつけの温泉に連れて行こうではないか!!」

「あの? 煉獄さん! そこには混浴はありますか?」

「我妻少年!! 勿論だ!!」

その言葉を聞いた善逸はふつとこちらに視線を送ると。

「剣心さん、炭治郎はやく行こう」

「……………」

四人が屋敷を出ようとしたらちよがこちらに気が付いた、何か叫んでた気がしたが四人は急いで蝶屋敷を後にした。

「剣心さーさーん! 炭治郎さーさーん!! 勝手に外に出たらあ……………
!!!!!! あ……………
行っちゃった」

ちよの声を聞きアオイがちよの元へと駆け寄り事情を聞きアオイも困った顔をしていた。

「これはあの三人が荒ぶるかも……………ちよ? 剣心さん達がどこ行つたかわかる?」

「う……………んちよつとわからないです……………ん? そう言えば炭治郎さん彌豆子さん置き去りにしてた様……………」

「よしなら、彌豆子さんに何としても聞きだすわよ! ちよ!!」

二人は炭治郎の病室へと、急いだのであった。だがしつかり禰豆子も炭治郎は連れて来ていた。

四人は列車に乗っていた、善逸は当初前みたいに鬼が出てきたらどうするの？とびびってはいたが今のオレなら何とかかなるなど冷静に考え椅子に座っていた他の炭治郎、杏寿郎もあの時の戦いの事を思い出していた。

「だが剣心!!お前の師匠は凄いな!剣をいつ抜いたのかもわからなかったぞ!」

「そうですね!剣心さん!聞こうと思っていたの忘れてましたよ!何であの時比古さんが来てくれたんですか?」

剣心は窓の風景に思いを馳せながら炭治郎の問に答える。

「何でもお館様が師匠にお願いしてたらしい、念の為オレが応援に行きますとお館様に行ったのだが……………」

「なるほど!!流石はお館様だ!!!」

炭治郎も何か納得した様子だったので再び剣心は窓の景色に意識を向ける、善逸もこの前の遊郭の戦いをそして自分の決意をそして宇髓の生き様を思い出していたついでにこの後の事も考えていた。

(やはりオレの決意の為に覗きは絶対にしない!、もし覗いたら女の人は悲しむだが今回は混浴だ合法的に女の体が見れるニヤニヤを隠すのが大変だ!)

だが二人には善逸が何を考えているのかわかるので二人は何とも言えない表情をし煉獄は弁当を食いまくっていた。

「美味しい!!美味しい!!!美味い!!!剣心!お前もどうだ?」

「いやオレは……………わかったいだこう」

無事列車は目的地最寄りの駅に着きそこから車なる乗り物に乗り剣心達は温泉街へと向かう。

しのぶは任務を終え今日こそは夜這いをかけんと意気込んで蝶屋敷に帰って来た、丁度同じタイミングで風柱不死川実弥も帰って来ていた手にはおはぎを持っていた。

「丁度帰りかあ？しのぶ」

「あら？実弥義兄さん！お疲れ様！私は今から用事があるのでふふ」

そこに実弥の妻でしのぶの姉であるカナエが屋敷の奥から出てきた。

「お帰りなさい！実弥君!!!お風呂にする？ご飯にする？それとも私かしら？」

「おう、カナエで」

実弥は真顔でそう答えると何故か言った本人であるカナエが顔を赤くし始めた、実弥はカナエを横抱きにし自分達の寝室に行こうとするがしのぶがそれをくい止める。

「ちよつと!!私がいるの忘れてないかしら？二人共？」

「しのぶもお帰り！後ね一つ残念なお知らせがあるんだけどね？緋村君ったら脱走したらしいわよふふ後、炭治郎君と我妻君も一緒にどこかへ行ったらしいわよ」

としのぶに伝えると実弥とカナエは屋敷の奥に消えていった、しのぶはその場に立ち尽くしていたそして丁度アオイとの買い物の後、炭治郎の好物を探しに行っていたカナヲが帰って来てしのぶと同じく立ち尽くしていた。

「しのぶ姉さん、カナエ姉さんが言ってた事って本当なの？」

「そうらしいわね、ふふ剣心ったら照れちゃってかわいいわとりあえず剣心達がどこに行ったかを調べないと行けないわねふふ」

「そうね、しのぶ姉さん手伝います、炭治郎ったら駄目なんだからまだ怪我も完全には治っていないのにふふ」

「あのうここに煉獄杏寿郎………僕の兄は来ませんでしたか？」

しのぶとカナヲが何やら考え事をしていると煉獄そっくりな男の

子が現れた更にそこに。

「何でしのぶとカナヲちゃんは屋敷の前で二人してニヤニヤしてるの？」

剣心のお世話をしに来た雲柱、鱗滝真菰もやって来た。

「あら真菰、残念な事があったんだけどね剣心ったら照れちやって脱走してみたいなのでねそこにいる煉獄さんの弟君千寿郎君が言うには温泉に行つたみたいなの」

「へえーそうなんだふーんよし、仕事は義勇に押し付けて私は今からそこに向かうわ、剣心に色目使う女を狩らなくちゃ」

「何一人で盛り上がりつつあるのかしら？ 私も行くわよ丁度ここに新しい毒があるからふふ」

「師範、私もお供します」

更にその和にアオイも加わろうとしていたその理由を真菰が、聞くと伊之助もあの後剣心達を追って列車に、駆け込んでいたらしい。

「伊之助さん……………ユルセナイ……………私よりも温泉何て」

「私とカナヲの仕事は、全部実弥義兄さんに押し付けておきますかふふ」

「ですね、師範ふふ」

剣心達に途轍もない危機が迫ろうとしていた。

「あの？雲柱様兄上達は何か危険な事に巻き込まれたのですか？」

「そうだよ！このままだと煉獄君もある意味骨抜きにされるかも」

「兄上に近付いていいのはこのオレだ！雲柱様!!オレも行きますよ！」

千寿郎は兄大好きです。

温泉街での

剣心達は迫る驚異など知る由もなく温泉街に、到着していた後から追い付いて来た伊之助も加わりとりあえず宿に荷物を預ける事にした。

「この宿だ!!皆!昔なオレの父がここの支配人を鬼から助けてなそれ以来鬼殺隊には無償でもてなしてくれるんだ!!勿論今現在の鬼殺隊の情報を知っているぞ!」

煉獄が剣心達に説明をしていると、中から女将と支配人らしき男性が出てきた。

「これはこれは煉獄様!!連絡を鴉殿から受けていましたので待ちわびておりしました!」

と女将が、玄関の奥からは若い娘がこちらを見てニヤニヤしている。

「女将殿!久しいな!今回は剣心達の休養を目的に来たのだ!世話になる!」

「女将さん、よろしくお願いします」

剣心が女将さんに近付き頭を下げる、それに続く様に炭治郎、善逸、伊之助も頭を下げる。

「そんな鬼狩り様、頭を上げてください!それに柱の方が頭を下げるだなんて!」

挨拶を終えた剣心達は部屋に荷物を置き、温泉街を散策する事にした炭治郎は彌豆子を一人置いては行けないと言うからなら代わりにオレが残ると善逸が部屋に残る事となった。

「炭治郎!オレが彌豆子ちゃんを守るだから楽しんでこい!!」

と真面目な顔で言うから炭治郎も強くは言えなかった。

剣心、炭治郎、杏寿郎、伊之助は温泉街へと足を運んでいた、伊之

善逸は一人混浴風呂へとニヤニヤする顔をどうにか隠しながら向かっていた、すると大柄な男が仲居さんにしつこく絡んでいた。

「お嬢さん、私は貴方に会うためにここへ来たと今悟りました」

「はああ、あのう私仕事なので……………ちよつと辞めてくださいー！」

嫌がる仲居に無理矢理迫ろうとしている男の腕を善逸は握りしめる。

「この人はやるべき事をしてるんだ邪魔はいけない」

「いて！しかも熱！何だお前？今オレはこの人と話してるんだ……………」

最近と言うか遊郭での戦い以降、体の体温がやけに高い炭治郎も同じ症状がある様だその状態で全身に力を入れると頬に痣が発現する。

「何だお前……………悪かったオレが悪かったから許してくれ!!!」

（この痣の事はお館様から説明は受けている……………よしはやく混浴に……………）

一人立ち尽くしている仲居に善逸は痣を消して優しく微笑みかける。

「ごめんよ……………怖い思いをさせて、お仕事頑張つてね!!!」

キュン!!!。

仲居の心臓が確から確かにそんな音が聞こえたが善逸は気のせいだと考え一人混浴をするべく先を急ぐ。

温泉街でも似たような事が起きていた、七十人ぐらいの男が全員失神しているそしてそれを見下ろしている四人の剣士。

そしてその四人にときめきまくっている女子がまた四人さて何があつたかと言うと。

四人が甘味屋を探して歩いていると、炭治郎が何か悲しい匂いがすると言いき出しそれはいかんと煉獄がその匂いを辿る様に炭治郎に指示をしその場に行く。

二人の女学生が泣いていた、しかもその内の一人の娘は煉獄と剣心が合同で任務に当たった時に助けた朱里だった。

「おお!!朱里ではないか!元気だったか?」

「ぐすん……………煉獄様……………それにあの時の緋色の剣士様……………」

緋色剣士?と剣心は炭治郎の方へと視線をやると、炭治郎の眼がそれは貴方ですと教えてくれたので剣心も朱里に話しかける。

「朱里よ、何があった?話せるか?」

朱里が言うには四人で旅行に来ておりこの温泉街が遊んでいた所、この街を裏で取り仕切る連中の頭が友達の内二人を気に入り無理矢理屋敷に連れ込んだらしい。

「煉獄さん!剣心さん!女性に乱暴するなんて許せませんよ!行きましょう!」

「そうだな!竈門少年!!よし!その土産屋に売ってある木刀を買おう!」

「……………そうだな……………それに裏で取り仕切る奴らならどうなっても構わないだろう」

「何だあ?祭りかあ?楽しくなって来たぜ!!!!!!」

「皆さん私達も後ろから着いて行きます!!!!!!」

朱里とその友達有紀も後ろから剣心達についていく事になった。

屋敷では、今にも友達二人が襲われそうになっていた。

「ここか……………皆下がってろ」

と剣心が煉獄達を少し後ろに下がる様に指示を出す、その様子を見

て頸を傾げる朱里と有紀だが次の瞬間。

「龍の呼吸、伍ノ型、土龍閃」

衝撃波を放ち門と玄関を破壊する、二人は唾然としているがその騒ぎに屋敷から男達が七十人程飛び出してくるが。

「あの、剣心さん？呼吸は？」

「ここで懲らしめておくのも大事だ、手加減しつつ使え」

「はい！」

「うぬ！心得た!!!」

「よっしゃ!!!行くぜ!!!」

!!!

そこからは蹂躪だったと二人は語る。

「龍の呼吸、拾壹ノ型、戦乱龍撃閃」

「日の呼吸、日暈の龍・頭舞い!!!」

「獣の呼吸、参ノ牙、喰い裂き!!!」

「よもや!!オレは元からも呼吸は使えんのだった!!!!!!」

そして現在に至る、剣心達は警官が来る前にその場なら離れたので問題なしと考え四人に別れを告げ辺りが暗くなってきたので宿に戻ろうとしたら。

朱里が。

「あの！皆様!!!今晚助けてもらったお礼をしたいのですが」

「「「え？」」」」

剣心、杏寿郎、炭治郎、伊之助、四人の心は一つになった。

そしてここ混浴会場でも。

「ちよつと待ってくれ!!オレは眺めるのが好きであつてそんなああ
!!!!!!」

善逸にも危機が迫ろうとしていた。

その女誰？

あれ？何でオレは今この人に迫られているんだ？ちよつと何この音まさかオレに向けて？ヤバイヤバイヤバイ、誰かってあれ？オレとこの人だけだ。

「何でそんなに怖がってるんですか？さっき見た勇ましい姿を私に見せてくださいましあつ申し遅れました私は、仲居の紗千と申します」

「紗千さんね!?オレは我妻善逸!よろしくね!」

「そんな呼び捨てで構いませんよ善逸さん?」

紗千の手が善逸の胸に触れようとする時だった、入り口を何者かが蹴破った。

そして煙が晴れると禰豆子が遊郭で戦った時と同じ姿になっていた。

「ごうごうごうごうごうごう!!!!!!」

「何ですか?貴方?私と善逸さんが折角楽しんでるのに」

「禰豆子ちゃん……………オレの事を心配してくれたんだね」

善逸は素早く浴衣に着替え用とするが隙がない、どうしたものかと考えていると禰豆子は物凄い勢いでこちらに向かって迫ってくる。

「紗千さんちよつと離れてて!」

紗千を突き放し善逸は素早く浴衣を着て禰豆子の元へと。

「禰豆子ちゃー!!!!!!」

「血鬼術、爆拳!!!!!!」

「え?」

禰豆子の渾身の右拳が善逸の頬にめり込み遙か遠くへ飛ばす。

「うがああああああ!!!!!!」

!!!!!!

そのまま彌豆子は善逸の後を追う、その様子を見ていた紗千は唾然としていた。

そんな事が起きてる中、ある五人組が温泉街へと足を踏み入れていた。

「どうやらここのようね、千寿郎君宿を案内してください？」

「畏まりました！ 蟲柱様!!!」

「感じる感じるわ炭治郎の気配がこつちよ皆!!!」

「もうカナヲちゃんったら張り切っちゃてアオイちゃんも早く行く?」

「あ? すいません! 真菰さん! 何か今一瞬間聞いた事がある汚い高音が聞こえたので」

「美味しい! 美味しい!! 美味しい! 美味しい! 朱里君も食べると良いぞ!!!!」

「はい! 杏寿郎様!!!!」

二人の距離が近い気がするが気のせいとして一人黙々と飯を食べていると朱里の友達の一人有紀が剣心に声をかける。

「あの本当今日はありがとうございます……あのう女の子の好みとかありますか?」

「いや礼には及ばん……好みか………活発な子とかかな?」

他の二人も炭治郎と伊之助それぞれに絡んでいた。

「君って長男何だね!! 私も炭治郎君みたいな兄が欲しかった

「これは？カナヲ？日の呼吸!!!灼骨炎陽!!!!」

桜を全て吹き飛ばし炭治郎は窓際から外を覗くと憤怒に燃えるカナヲが居た。

「カナヲ！危ないじゃないか！」

「許さない許さない許さない許さない許さない許さない、千本桜」

「くっ、カナヲどうしたんだ!!」

(とりあえずここから離れるしかない!!!!!!)

!!!!!!

炭治郎は窓を飛び出しカナヲに、こちらに付いて来る様に促すと千本桜の攻撃は炭治郎に向かって襲いかかる。

「カナヲ？何でここに……………ちら」

剣心は何故カナヲが？と内心考えたが背後から禍々しい気配を二つ感じたので振り返ると先程のカナヲと似た表情をしたしのぶと真菰がいた。

「あらあらやっと思つたら何なら随分楽しい事してるのねえ」

「こつちがどんだけ心配したか、剣心はもう、とりあえずそこ動かないでね？」

二人は刀を抜き剣心に迫るが直ぐに剣心は攻撃を避け部屋を飛び出す、しのぶと真菰も手早く剣心を追う。

「逃げるな!!!剣心!!!」

!!!!!!

「イノスケさん、何で黙って何処かへ行こうとするんですか？そんなに怯えないで大丈夫です私は他の方達と違って怒ってはいないから安心してくださいさあ私達は別の部屋に行きましょ？」

「ハイ、ゴメンネゴメンネゴメンネ」

二人は別の部屋へと姿を消して行った。

「よもや追い掛けてくるとは……………おお!!千寿郎!!お前も一緒に食べよう!」

「はい!!!兄上!!!」

暫く落ち込んでいた有紀達も、杏寿郎達と仲良くご飯を食べる事にした。

「やはり、しのぶと真菰は……………」

「カナヲ!!!話しをしよう!!!話せば分かる!!!きっと分かり合えるから!!!カナヲ!!!」

「彌豆子ちゃん!!!お願いだからや!元の姿に戻ってよお!!!もお君以外の女性とは口聞かないからさあ!!!!!!」

「ゴメンネゴメンネゴメンネゴメンネゴメンネゴメンネゴメンネ」

各々修羅場になっていたが杏寿郎はそんな事、気付く事はなく朱里に櫛を渡し何故かその場で告白をしていたらしい。

後日、剣心、炭治郎は機転を働かせ持っていた櫛を渡し何とかその場は収まったが二人は女性に櫛を渡す意味を知らなかった、後日実弥に教えてもらう事になる。

伊之助は……………。

休
暇
編
完
!!!!!!!

刀鍛冶の里編

刀と持ち主

剣心と炭治郎は刀鍛冶の里に来ていた、理由はこの間の休暇の際激昂したカナヲ、しのぶ、真菰の手により刀を壊された為二人の担当刀鍛冶に事情を話し刀を打ってもらおうとしたのだが。

「ああ？リア充に打つ刀はねえよ、滅びろ」

と手紙が来たのでお館様に頼み二人は直接蛍を説得するべく里に来ているのであった。

「よくこんな所に迄来たねワシ鉄地河原、噂は聞いとるよ緋村君、竈門君」

「すいません、押しかけてきてしまつて」

「よろしくお願いします！竈門炭治郎です！」

二人は頭を床に着くぐらい迄下げる、すると鉄地は剣心と炭治郎の二人にお菓子をあげていた。

「あの鉄地さん、蛍さんは今何処に居られるのですか？」

「そうですよ！一刻も早く刀を打ってもらいたいです！」

「あの子は小さい時からすーぐ癩癩起こしてどっかに行くからなあ、困ったもんや、緋村君と竈門君は柱だからなあ、早く刀を打ってやりたいが……………」

お館様が決戦の時は近いと考え、無一郎、炭治郎、善逸の三名を柱にしている。

「いえ、刀を壊してしまうオレと炭治郎がいけないので」

「折れる様な鈍を作るあの子が悪いのや」

炭治郎は黙って鉄地の話しを、聞いている。

「緋村君や、君は刀と言うものをどう考えちよる？」

「……………そうですね……………刀は、自分の体の一部と平和な夜が訪れ

る為に必要な物と考えてます」

炭治郎も何か言おうと考えるが答えが纏まらなかった、更に剣心は言葉を続ける。

「ですが、一番大事なのは刀ではなく人だと思っています、これからの平和を作るには扱う人こそ大事だと」

「なるほど……………、気に入った！至急蛍を見つけた様に指示を出す！そんで蛍が嫌と言うならワシが刀を打つ！とりあえず見つかる迄は里でゆつくりしといで！」

剣心と炭治郎は鉄地に頭を下げ二人は里を見て回る事にした、尚二人は鉄地に何故刀が壊れたのかの事情は黙っておくことにした。

二人が歩いていると、前から背の大きい隊士がこちらに向かって歩いて来た不死川玄弥だ。

「こんちわ！緋村さん！……………つち炭治郎お前迄居るのかよ……………」

「久しぶりだな、玄弥お前も任務か何かか？」

「久しぶり！玄弥！」

「うるせえ！炭治郎！、はいちよつとオレの使ってる銃の調子が悪いので……………」

「なるほど……………、目的は似たようなものか炭治郎、玄弥とは同期だろ？二人でゆつくり風呂でも使つてくるといい」

「えっ!?ちよつと緋村さん」

「わかりました！剣心さん！行くぞ！玄弥！」

玄弥は何やら駄々を捏ねていたが流石は長男上手くあしらいながら二人「禰豆子」は風呂場へと向かって行った、剣心は里の様子を見て回る事にした。

剣心が一人で歩いていたら後ろから聞き覚えのある声があったので

振り返ると、時透無一郎が手を振りながらこちらに駆け寄って来る。

「剣心！どうしてここに居るの？久しぶり！オレも柱になったよ！」

「話しは聞いている、オレと炭治郎の刀が壊れてな刀を打ってもらいに来たんだ」

「そんなんだ！オレはね何かこの里の何処かにめちゃんこ強い人形があるって聞いたから任務の合間によつてみたんだよ！」

「人形？面白そうだな無一郎オレも一緒に行こうか」

「うん！行こ！剣心！多分あっちの方だと思うよ！」

蝶屋敷で診察をしていたしのぶは何故かイラツとしたがその原因は誰も知らない、同じく真菰も。

「玄弥！早く入ろ！ん？何で左手手袋したままなんだ？」

「ん？ああ気にすんな、これはこのままでいいから」

炭治郎は頸を傾げながら考えた、きつとこの手袋を剥がすと封印が解かれて大変な事になると。

二人が脱衣所で服を脱ぎ、外に出ると其処には何故か恋柱甘露寺がいた。（タオルで体は隠している）

「あつ、温泉混浴って言ってなかった、まあいつか★」

鉄地は一人呟いていた。

「ん？あ！炭治郎君！久しぶり！元気だった？それに隣の君は確か不死川さんの弟さんよね？」

「え？甘露寺さん？混浴なのか！此処は」

炭治郎は頭を伊黒がよぎった、この状態は不味いと直ぐに隣にいる玄弥に声を掛けようと隣に視線を向けると。玄弥は鼻血を出してぶつ倒れていた。

「きやああ！玄弥君！どうしたの？大丈夫？」

「玄弥！（オレは既にカナ……何でもない）甘露寺さんは取り敢えず服を来てください！そしてここであつた事はどうか他言無用でお願いします！」

「何でかは理由は聞かないけどわかつたわ！カナヲちゃんにはそれとなく伝えておくわ！」

「お願いします、今夜の松茸ご飯上げるんで」

了承したので、甘露寺と炭治郎は玄弥を担ぎ、泊まる屋敷迄運ぶ事にした。

剣心と無一郎は漸く人形がある場所を、見つけまじまじと人形を観察していた。

「何か凄いね、この人形ねえその君、君がこの人形作つたの？」

「この耳飾り、炭治郎のにそっくりだなそれにこの人形の中にあるのは刀か？」

「オレは小鉄です！、残念ですがこの人形を作つたのは僕ではないです、諸説によるとこの人形は戦国時代に作られたとか何とか、え？刀があるんですか？この人形？」

小鉄は考えた、この人形にある刀恐らくは戦国時代に使われていた代物だろうとどうしてもそのカタヲ見てみたいと。

「ふーん戦国時代ねえ、取り敢えずこの人形つて動くの？」

無一郎が小鉄に問い掛ける。

「動きますよ！動かして見ますか？その緋色の髪をした貴方！どうでしょうついでに出来るもんならこの人形に収められている刀を取り出してみてください！」

「ねえそれつて結局君も見たいつて事だよね？」

「何の事でしょう？」

「わかつた、それでいいのなら」

人形は、静かに動き始めるそしてゆっくり剣心に近づいて行くと思いきや急加速し間合いを詰められるそのまま剣を六本交差させなが

ら振り回す。

(なるほど………確かにこの人形並の剣士なら瞬殺されるな)

だが瞬時に剣の軌道を見抜き、かすり傷一つ貰う事なく剣心は人形の顔に斬撃を入れ人形は動きを止める。

(凄っ、何なのこと人ってまさかこの人が噂の龍柱か………)

「やっぱ凄いな剣心は、ん？ねえあれ刀じゃない？」

三人が一斉に人形の方へ視線を送ると顔の隙間から刀が姿を現していた、剣心は小鉄に謝り無一郎が刀を取り出し刀を抜いてみると。

「ねえ剣心これって何？」

「刀だな一応は………」

「錆びてんじゃねーか!!!畜生!!!」

剣心はこの刀を炭治郎に渡そうと考えていたが錆びていたすると其処には筋肉もりもりの蛭がいた。

「おう、剣心その刀を寄越しやがれオレが磨いてやる！何処その女に折られるような刀は二度と打たん！」

小鉄と無一郎はえつと言う視線を剣心に送るが剣心は気にしない。

「わかりました蛭さんに、でもそうなるとオレの刀は」

「緋村の刀は長が打つとき、つけオレがいるのにまあ長が自ら打つてならしようがねえ」

「取り敢えずオレは縁壺零式の修理と蛭さんのサポートをします！」

「よしでは、無一郎オレ達は屋敷に戻るとしよう」

「ねえ剣心、何で刀折られたの？折ったのってあのく………蟲柱？ねえ無視しないでよねえ」

この数日後、里は上弦の襲撃を受ける。

それぞれの戦場

剣心、炭治郎、禰豆子、無一郎の四人は一つの部屋でのんびり寛いでいた、炭治郎に新しい刀の説明をし今現在剣心と炭治郎は代わりの刀を持っている。

「剣心さん本当にいいんですか？その縁壺さんから出てきた刀をオレが使っても」

「やはりお前は、知っていたか……ならばこそだろうお前があの刀を使うべきだ」

無一郎は禰豆子の髪を整えている、すると剣心、炭治郎、無一郎が何者かの気配を察知し三人は入り口の方へと視線をやると其処には老人の姿をした鬼がいた。

「ひいーーーー怖い怖いあのお方の邪魔をしようと考えた怖い怖い」

即座に無一郎は刀を抜きその老人の頸を斬り落とす。

「何か見ているとイライラする、霞の呼吸、肆ノ型、移流斬り」

剣心も無一郎の隣に並び鬼が消えるのを確認しようとする、老人の体が二体の若い姿の鬼に変化する舌に楽と書いてある鬼が団扇を振り剣心と無一郎を遥か遠くへと飛ばす。

「剣心さーん！無一郎君！」

「日柱貴様の相手は我らだ」

もう一体の鬼は舌に怒の文字が書いてある、炭治郎と禰豆子は背を合わせる様にしてそれぞれ鬼と向かい合う。

（上弦の参………此処は自分の戦いに集中しよう！長男なら仲間を信じれる！）

「さあ行こうか、積怒！久方ぶりの楽しい戦場じゃ！」

「相変わらずお主は煩いな、可楽よまあよい」

可楽は団扇を振り先程と同じ突風を放つ、禰豆子が床に蹴りを入れ下の階に落ち突風を躲し炭治郎は透き通る世界に入り可楽と積怒を見る。

（この鬼達は心臓がない!?本体は別にいるのか？）

もう一体の積怒も持っている錫杖を振り雷を放ってくる。

「今度は雷か鬼それぞれで戦い方が違うのか……日の呼吸、灼骨炎陽！」

回転斬りで迫る雷を巻き込みそのまま積怒に跳ね返す。

「何とー！」

(迂闊に頸は斬らない方がいいな、だが敢えて斬る！)

炭治郎の一振りが積怒の頸を容易く斬り裂く、即座に可楽が炭治郎に迫るが。

「むー！！！」

禰豆子の飛び膝蹴りが可楽の腹に入り悶絶している隙に、炭治郎は可楽の頸も落とす。

「すまない！禰豆子！さあどうなる？」

「むー」

炭治郎が頸を落とした可楽と積怒の様子を見ると、それぞれが更に分裂した。

(やはりか、ん？この匂いは？)

「すまん！炭治郎！遅くなっちゃった!!」

不死川玄弥も上弦の参の戦闘に参戦する。

「さてこの村にいる人間を使ってどんな作品を作ろうかん？あの小屋に人の気配が」

上弦の伍玉壺は自らの血鬼術を使い、化物に里の破壊を任せ自分は逃げた人間を探していた小屋を覗くと蛍が一心不乱に刀を研いでいた。

「この刀は凄いで凄いで凄いで」

「おい貴様、おいー！」

玉壺が呼び掛けても蛍は気付く様子はない、蛍に攻撃を放つても気付く事はなく玉壺からすれば何故か負けた気がした頭に来て蛍を殺そうとするが目の前に小鉄と無一郎の担当刀鍛冶鉄穴森が守る様に

玉壺の前に躍り出る。

「邪魔はさせない！」

「その通りです！此処を通りたくば私達を倒して行け！」

「ひよひよそう言うのであれば、直ぐに殺してやる」

玉壺が二人に攻撃しようとする時、可楽によって飛ばされた剣心と無一郎が小屋の丁度真横に着地する。

「ねえ剣心今のああなるって分かってなかった？」

「無一郎修行が足りんぞ、ん？あそこにいるのは上弦か」

剣心が玉壺に気付き無一郎もそちらに視線をやる、瞬間無一郎は嫌な顔を始める。

「ねえねえ剣心見てよあそこに変な壺があるよ、うわあ気持ち悪何だか見てるだけでムカムカしてきたどうしよう」

「ひよひよこの気配、さては柱だな貴様らって」

（あの緋色の髪色、無惨様が言っていた鬼狩りかよし！此処はコイツも殺して無惨様に褒めてもらおうとするか）

「血鬼術、魚雷弾」

魚が勢いよく剣心と無一郎に迫ってくるが、二人は空中へと飛び回避するが魚は追尾してくる。

「ねえ剣心オレやっぱ無理だわアイツ何かイライラで体が熱くなってきた」

「無一郎冷静になれ、龍の呼吸、伍ノ型、龍巢閃」

魚を全て吹き飛ばし剣心は玉壺に迫ろうとするが、剣心は何故か一旦後ろに下がる。

「ひよひよどうした？、やっぱ私が怖いのか？ひよひよ」

無一郎は剣心に近付きコシヨコシヨ話をする。

「ねえ剣心ひよっとしてだけど」

「ああ無一郎の言う通りだ、何か近付くのも嫌になるな」

「でしょ？剣心！それにあの壺見るともう無理だよ、あつ何か体が段々軽くなってきた」

すると無一郎の顔に奇妙な痣が浮かび上がっていた。

「無一郎お前……」

「剣心取り敢えずオレ一人で充分っぽいから、蛍さんと鉄穴森さん小鉄を見といて」

オレだけ呼び捨てかよと小鉄がツツコむが無一郎は無視。

「……………わかった」

剣心は三人の近くに行き、無一郎は玉壺と向き合う。

「ひよひよ一人で戦うつもりか？この私も舐められた者よでは先ずは」

「ねえねえ御託はいいからささつきとかかつてこいよ」

「クソガキが」

玉壺は壺から壺からへと、移動しながら無一郎に近付くが無一郎はそこらかしこにある壺を次々壊していく。

「お前が移動する前に、先に壺斬っちゃったごめんね」

「私の壺を壊すな！血鬼術！魚陣海賊団！」

無数の魚と人がごっちゃになったような化物が出現するが、無一郎は意に介さずその群れに突っ込んで行く。

「何それ？キモ、霞の呼吸、捌ノ型、晚霞・春雷」

高速の突進で化物を斬り裂きながら、玉壺の間合いへと入る無一郎だが玉壺は地面に魚を隠していたが。

「読んでるし、バーカ、霞の呼吸、漆ノ型、臍」

緩急を付け、魚を躲し玉壺の頸を斬り裂く。

「さつきと死んじやって」

「嘘……………」

玉壺は、呆気なく消えて塵となっていた剣心は無一郎に近付こうとしたら何故か真菰の幻を見てしまう。

(真菰？どうして……………)

「どうしたの？剣心？取り敢えずこれからどうする？」

「そうだな……………取り敢えずは」

剣心がどうするか考える時だった、ある鴉が剣心の元へとやって来た。

(あれは……………真菰の鴉か？)

「カアカア！真菰、隊士を庇い上弦の壱と交戦至急応援を応援を」

「!!無一郎！後は頼む！」

「剣心！、わかった！こっちは任せといて！」

「真菰お!!」

剣心は間に合うのか。

炭治郎は積怒と可樂を二体同時に相手どっていた、玄弥と禰豆子は空喜の哀絶と戦っていたすると其処に甘露寺も到着する。

「甘露寺さん！こいつ等は本体ではありません！禰豆子と玄弥で本体をお願いします！」

「わかったわ！、禰豆子ちゃん！玄弥君！行くよ！」

四体は三人を行かせまいと、攻撃をしようとするが炭治郎は痣を発動させそれを阻止する。

「お前達の相手はオレだ！日の呼吸、日暈の龍・頭舞い！」

四体同時に頸を斬り落とすと、四体は一つになり幼い姿になった。

(…………なるほどあれが奴の本気の姿か、皆頼んだぞ！)

「悪人が此処で消し炭にしてくれる!!」

木の龍を炭治郎に向かって放つが日暈の龍・頭舞いで容易く斬り裂き、そのまま持久戦に突入する。

三人は本体を探しているが中々見つからない。

「くそ木々が邪魔で上手く見つけきれねえ、こうなったら甘露寺さん！禰豆子！ちよつと下がってくれ！」

玄弥の指示を聞き甘露寺と禰豆子は後ろに下がる。

「何かしら何かしら！玄弥君かっこいいわ！」

「行くぜ！我が左手に封じられし鬼よ！今こそその力を示せ！」

左手を地面に突き刺し辺りの木々を全て吹き飛ばすのであった。

悲しき夜明け

玄弥が左手を地面に翳した事により発生した衝撃波により木々を全て吹き飛ばす。

「甘露寺さん！ 禰豆子！ 今だ！ 本体を探せ！」

指示を受け甘露寺と禰豆子は本体を探す為に、辺りを見渡す其処で甘露寺はある事に気が付く。

（不味いわ！ 夜明けが近い！ 早く本体を見つけなきゃ禰豆子ちゃんが危ない！）

と視線をふと足元にやると、本体と思わしき小さい鬼が甘露寺のスカートを覗いていた。

「あつーいや！ 儂は目は見えておらぬ！ 蛇柄の模様など見てはいない！」

「……………見てんじやないの！ この変態！」

「ひいー！」

休む事なく迫ってくる木龍、雷を日の呼吸の剣技を持って受け続ける完全な硬直状態になっていた。

（つち、この小僧の力がこれ程とは本体の方が気がかりだな）

（つく、不味いな夜明けが近い……………禰豆子、玄弥、甘露寺さん頼む）

「しつこい小僧めが、血鬼術、木龍・天雷」

「本体の方へは行かせない！ 日の呼吸、円舞、烈日紅鏡、碧羅の天、陽華突」

見つかった事で半天狗の本体は再び逃げようとするが、玄弥と禰豆子が逃さんと言わんばかりに逃げ道を塞ぐと同時に朝日が昇り始める。

「つちー、この悪人共が！がああああああああ」

半天狗、本体の最後の悪あがきと言わんばかりに咆哮を上げ三人を吹き飛ばす。その隙に逃げようとする。

(やばい！この距離だと、それに彌豆子が)

と玄弥が彌豆子の方へと視線を向けると彌豆子は甘露寺を半天狗を方へとぶん投げていた。

「彌豆子ちゃん！」

「蜜璃ちゃん、ミンナをまも……………て」

甘露寺は落下の勢いを利用しながら半天狗の方へと近付く、その最中頭を過つたのは。

(自分事じゃなくて、他の誰かの為に戦える私も彌豆子ちゃんのように戦う！)

胸元に痣を発現させながら半天狗に技を放つ。

「これで終わりよ！恋の呼吸、参ノ型、恋猫しぐれ！」

「お前の様な悪人は、必ず裁かれる必ずだ！いいか悪人は罪を償う必要があるのだ」

(儂は儂は……………唯人の温もりが……………)

静かに半天狗の頸が落とされた。

甘露寺は直ぐ様、彌豆子の元へと向かう同じタイミングで炭治郎が到着する。

「彌豆子……………大丈夫なのか？」

「うん……………おはようお兄ちゃん……………」

炭治郎は泣きながら彌豆子と抱き合う、其処に甘露寺や玄弥そして無一郎もその輪に入り皆で無事を喜び合うだが此処で炭治郎がある事に気付く。

「あれ？ 剣心さんは？」

と炭治郎が無一郎に聞いてきたので無一郎が答えようとしたその時。

「カアカア！ 雲柱、鱗滝真菰、上弦の壺から隊士を守り死亡！」

その報告を受け、皆は涙を流すのであった。

剣心がその場に着いた時には、全てが終わっていた粉々に壊された家屋、斬り刻まれた隊士達の亡骸が散乱していた。

「これは」

辺りを見渡し生きている者がいないかを探していると、真菰がうつ伏せになって倒れていた。

「真菰！ 真菰！ 大丈夫か？ 真菰！」

「剣心？ ゴめんね私の力じゃ仲間を守れなかった……………よ」

「……………言うなもう何も言うな」

真菰を横抱きに剣心はもうどうする事も出来ない事を悟る。

「一人ね、雷の呼吸を使う剣士がね鬼から血を貰っていたの……………その子を止めたかった」

「雷の呼吸？、剣士が鬼に」

「最後に……………剣心に会えて良かった……………だったよ」

「真菰、真菰」

真菰の訃報は直ぐに柱達、そしてお館様の元に報告された彼女の兄弟子富岡義勇は彼女が最後迄勇敢に戦っていた事を聞き自分自身もこの命尽きる迄戦い抜く事を心に決めるのであった。

(真菰……………後はオレ達に任せろ……………)

任務中のしのぶも訃報を聞きカナヲと泣きながら抱き合った。

そして善逸は悲鳴嶼と共に合同任務を行っていた其処に剣心の鴉

が飛んできた。

「ん？あれは剣心さんの鴉？」

「嗚呼そう言えば、緋村と竈門は里の方に行っているのだったなどうしたのだ？我妻よ」

「真菰さんが亡くなられました、……………後一人の剣士が……………恐らくは」

「何と……………、君の兄弟子の名は何と言うのだ？」

「獺岳です」

その瞬間悲鳴嶼と善逸は二人避けられない因縁と向き合う事となる、その後善逸は自身の師をどうにか切腹を取り消すべく奮闘するが師の育手としての矜持がある為、それを止めることは出来なかった。

師の遺言は。

「善逸お前は儂の誇りじゃ」

とある屋敷にて、一人の少年が喜びに震えていた。

「おおーやつと見つけたぞ！太陽を克服した鬼を！あの娘を調べれば漸く私も太陽を克服出来る！」

いよいよ、最後の決戦が近付いて来ていた。

珠世の元にもお館様の使いの鴉が訪れ、共同戦線をはるようになる。

その一週間後、柱は緊急柱合会議がある為全員屋敷に集まっていた。

「甘露寺傷の方は大丈夫か？ついでに時透も」

「私は大丈夫よ！」

「何か伊黒さん、僕と甘露寺さんで扱い違う様な」

「よう竈門お、お前の妹が日を克服したつてのはあ本当にかあ？」

「実弥さん、本当です」

後の善逸、悲鳴嶼、富岡は沈黙を保っていた。

「剣心」

「どうした？しのぶ？」

「大丈夫？」

「ああ大丈夫だ、しのぶ真菰の為にも全てを、終わらせよう」

「剣心後で、話しがあるから」

「柱の皆様、此度は急の招集にお集まり頂きまして誠にありがとうございます、並びに当主である輝哉の病状悪化の為に公の場に姿を見せる事が出来ない事をお許しく下さい」

全員が一斉にあまね様に頭を下げるそして剣心が挨拶をする。

「お館様が一日でも命が長らえられる事を切に祈っています」

「ありがとうございます、緋村様、今回お集まり頂いた要件は二つです一つは痣の件です痣を発動させている状態であれば上弦の鬼とも対等に戦う事が出来ます」

そのあまねの話しを聞き、驚く実弥と伊黒としのぶ他の柱は無反応だった。

「痣は一人が発現すれば、その後は伝染し他の者にも痣が出ます今回は痣がどうすれば発現するかを日の呼吸の使い手である竈門様是非皆様にご教授してください」

あまねは炭治郎に頼む、だがそれは失策だった。

「わかりました！えつとですな何かこう体がぞわぞわってなつて

「ごおーんってなったら何か出てました！はい！」

甘露寺以外のその場にいた者達は思わず固まってしまった。尚甘露寺は。

（凄いわ！流石は炭治郎君ね！分かりやすいわ！）

二人は似たもの同士だった。

その後、善逸と無一郎が分かりやすく皆に説明し痣者の最後もあまねが皆に伝えた。

「そして二つ目がなりよりも重要です、輝哉の予知によると決戦が近いとどうか皆様の武運をお祈り致します」

そう言い残しあまねは退出して行った、その後皆で話し合い。

一般隊士を煉獄が一手に引き受け、柱達はそれぞれ巡回をしながら手合わせをし各々の技術を磨いて行く事となった。

「善逸！」

炭治郎は義勇と屋敷を出ようとしたら、善逸の姿を見かけたので声をかける会議中は話しかけられなかった為だ。

「炭治郎、禰豆子ちゃんは？」

「蝶屋敷に、いると思うぞ！善逸大丈夫か？皆心配してたぞ？」

「ああ大丈夫さ自分のやるべき事を、やるだけさ後さ炭治郎」

「どうした？善逸」

「お前に会えて良かったよ」

そう言い残し善逸は、悲鳴嶼と共に消えていった。

そして無惨は姿を現す。

無限城編

行こう

ある月の綺麗な夜だった、そんな日に一人の男が鬼殺隊本部に足を踏み入れていた。

「ずいぶんと醜い姿をしているな？産屋敷」

そう鬼の始祖、鬼舞辻無惨が姿を現したのである。

「ああそうか、やはり来たか無惨、あまね？無惨はどんな姿をしている？」

と輝哉は側で自身を支えている、妻あまねに問いかける。

「二十代前半男性の姿をしています、髪は黒く目は瞳孔が鋭いですそして輝哉外見は貴方にそっくりです」

「ありがとうございます、やはりそうか君は我が一族から生まれ出たのか」「それがどうした？そんな話しも千年以上も前の話しだ今更何も関係はない、それにそう気に病む事はないぞ？何せ貴様は此処で死ぬのだから」

「その前に無惨一つ君に確認したい事があるんだけど」

「遺言として聞いてやろう」

「君が死ねば全ての鬼は滅びるのかな？」

「……………」

「どうやら当たりの様だね、それだけ分かれば充分だ」

無惨は輝哉に殺す為に、近付いて行くがその時隣の部屋の襖が何者かの手により破られる。

「!!」

反応が一瞬遅れる無惨、其処に一人の剣士が距離を詰めて行く。

「お館様と話すのに気を取られすぎたな無惨、龍の呼吸、拾式ノ型、九頭龍閃！」

無惨を屋敷より遙か後方へと吹き飛ばす剣心、そして追撃をすべく屈んで反動を付ける。

「剣心、後は頼んだよ」

剣心は頷き、無惨を追う。

「つち、一人潜んでいたかだがまあいい直ぐに戻りあの鬼狩りも殺して」

その時無惨の腹を何者かが貫く、無惨は即座に自身の周りに衝撃波を放つと姿を消していた珠世が姿を見せる。

「貴様は珠世か？目障りな女だ！まだ私を恨んでいるのか？」

「当たり前だ！ただ私は子供の健やかな成長を見たかっただけだったんだ！それなのにそれなのに」

「逆恨みにも程がある、喜んで人を食べていたのは誰だ？貴様だろ？」

「そうだ！だから今日、お前を殺す！緋村さん！」

無惨が上空に視線をやると、追ってきた剣心が既に型を放つ態勢に入っていた。

「つち、貴様！」

「龍の呼吸、壱ノ型、龍槌閃！」

珠世を掴んでいた無惨の手を斬り裂き、珠世を安全場所迄逃し再び剣心と無惨は見つめ合う。

「珠世、どうやら私に何か薬を打ち込んだ様だな？」

珠世は黙っている。

その隙を付き、剣心は間合いを詰めて行く其処に他の柱達も到着する。

それに気付いた剣心が、声を上げる。

「こいつが無惨だ！こいつを倒せば全てが終わる！お館様は無事だ！」

柱全員頷き、皆無惨へと攻撃を仕掛ける。

「龍の呼吸、参ノ型」

「日の呼吸」

「蛇の呼吸、肆ノ型」

「風の呼吸、壱ノ型」

「岩の呼吸、伍ノ型」

「霞ノ呼吸、陸ノ型」

「恋ノ呼吸、参ノ型」

「蟲の呼吸、蝶ノ舞」

「水の呼吸、漆ノ型」

「雷の呼吸、捌ノ型」

全員が一斉に攻撃を仕掛ける瞬間、琵琶の音が辺りに鳴り響き全員突如現れた扉に無惨共々落とされる。

炭治郎は無惨に声を上げる。

「無惨！必ずお前の頸に刃を振るう！必ずだ！」

それに対し無惨も。

「やれるものならやってみせろ！今宵終わりののは貴様等だ！」

剣心は落ちる直前しのぶの方へと視線を送るしのぶはコクリと頷き皆鬼の根城無限城へと落ちて行くのであった。

「あまね、子供達は皆行ってしまったんだね」

「はい、今回の指揮は輝利哉がとっています、私達が出来る事は祈る事だけ」

「わかっているよ」

輝哉は涙を流しながら剣心とのやり取りを思い出す。

「お呼びですか？お館様」

「わざわざすまない、剣心あまねから既に聞いてると思うが無惨が必ず数日中に此処に姿を見せるだろう」

「はい」

「私を囮にし無惨を」

「お館様……それは他の柱達もそうだがオレは勿論承知しません、貴方には生きてほしいそれに後数日で全てが終わるそうすればお館様の呪いは解かれる筈です」

「剣心」

「それに見て欲しいんです、鬼のいない平和な世界を」

剣心は一人城の中を走っていた、所々から雑魚鬼が現れるが気にする事も無く斬り捨てながら進んで行く。

(この様子だと、オレだけはかなり遠くに飛ばされてるかもな)

別の屋敷にて、指揮を取る輝利哉、ひなき、にちか、くいな、かなたの五人。

「城の中に、鴉達も侵入した様だね、愈史郎さんの術も発動しているひなき状況は？」

「緋村様は城の恐らくは最奥に飛ばされてる様です、他の柱の皆さんもまだ上弦とは遭遇していません」

「やはり、剣心は無惨はかなり警戒しているか皆それぞれ無惨の元へ行く様に指示を頼むよ」

「なるほど珠世めこの薬は人間の戻る効果がある様だな、禰豆子にも使われている可能性が高いな急がねば……………」

無惨は一人城の中心部で回復に入る。

甘露寺は伊黒と行動を共にしていた、現れる雑魚鬼は殆ど伊黒が斬っている。

「醜い鬼共が、甘露寺の視界に入ることすら許さん！」

「きやああ普段も格好いいけど、今日は一段と格好いいわ！伊黒さん！」

「……………行くぞ」

「……………血の匂いそれにこの気配間違いない」

しのぶは一人廊下の突き当たりで辺りを見渡し、気配のする襖を開ける。

「ん？やっとな来たのかい？、おや？君は確か」

その部屋にいた鬼は上弦の式童磨だった。

「義勇さん！日の呼吸、烈日紅鏡」

「分かっている、水の呼吸、式ノ型、水車」

二人はそれぞれに型を放ち、迫ってくる鬼を斬り刻む。

「義勇さん、行きましょう！」

「ああ」

(これが炭治郎の使う始まりの呼吸か確かに、美しい剣技だな)

義勇と炭治郎は無惨の元へと移動を開始する。

(いるな、アイツがこの音間違いない)

一人城の中を走る善逸、ここで一つ違和感に気が付く雑魚鬼が一体足りとも姿を現さないからだこの城は鬼の本拠地おかしいと善逸は考える。

(それとも、オレを誘ってるのかその方が体力を温存出来るからありがたいがな)

「ここか」

襖を開けると其処には、善逸のかつての兄弟子そして悲鳴嶼の寺に
鬼が襲ってくるきっかけを作った上弦の参、獺岳がいた。

「来たかよ、カス」

雷は天を裂く

オレはその顔を知っている、その声を知っているずっと隣に並んで立ち共に戦う事を夢見た存在。

「オレは鬼になったお前の事をもう兄弟子とは思わない」

「つけ、オレは元からてめえみてえなカスを弟弟子とは思っちゃいねえよ、それなのに何でてめえが柱なんだあ？ならよおオレは鬼になり上弦になるそう考えただけだ」

「そんな理由で鬼になったのかよお前が鬼になったが為に爺ちゃんは腹を斬ったんだぞ」

「つけあんなジジイ死んで当然だオレを認めようとしなかったからな、心配するなよカスてめえも直ぐにジジイの後を追わせてやるよ」

「最後にもう一つだけ聞く、お前を守ろうとした柱をどうした？」

「は？あああの女かオレの鬼になる邪魔をしたボケが、後ろから不意打ちしてやったよ！」

その瞬間善逸は獺岳の腕を斬り裂く、その速さに驚くが直ぐに冷静になり刀を抜き獺岳も善逸に向かって斬りかかるが善逸は躲し両者は一旦距離を取る。

「へえやるじゃねえかそれでこそ殺しがいがあるつてもんだ！血鬼術、稲魂！」

（！これは雷の呼吸の型か、そうか血鬼術と融合させたのか）

「雷の呼吸、壱ノ型、霹靂一閃・六連」

五連撃の斬撃を霹靂一閃を用いて相殺し六連の最後の一閃が獺岳の足を斬り落とす。

「へえ、やるのだがよオレの血鬼術がこの程度とは思うなよ!!、血鬼術、稲魂・狂乱」

「雷の呼吸、壱ノ型、霹靂一閃・六連」

先程同様霹靂一閃で相殺を試みるが、斬撃が先程と違い辺りに狂う様に飛び散るその斬撃は善逸の肩と足を斬り裂いて行く。

（つつ、さっきの技とは違うのか……………）

「ほら、これで終いだ!!血鬼術、遠雷!」

黒い雷が善逸を、飲み込もうとする瞬間鉄球がその雷を粉碎する。

「行冥さん」

「善逸よ、遅くなつてすまない、……………嗚呼やはりお前だったのか獺岳よ」

「てめえは、ははそうか!生きてのかよ!やはりアンタだったか名前を見てひよつと思つたがよ」

「獺岳よ、お前は何故あの時、寺に鬼を招いた?何故だ答えろ」

「てめえ等がオレを特別扱いしないからだあ!!オレだけを大切にしろよ!オレだけを!それなのにてめえはよお、死んで当然なんだよ!オレを認めない奴もオレを大事にしない奴も!」

善逸と行冥はその言葉を聞き、額に青筋が浮かんでいる。

そして行冥が獺岳に語る。

「そうかお前のその歪んだ性根を最初からわかっていれば……………獺岳よお前には人として生きる矜持はないのだな、ならば私達がすべき事は一つ、貴様を斬る!むん!」

「獺岳せめてお前だけは、オレ達が殺す」

善逸と行冥は痣を発動し、獺岳に同時攻撃をする。

「岩の呼吸、肆ノ型、流紋岩・速征」

辺りに、鉄球と斧を振り回し攻撃するが獺岳はそれを避けていく、

善逸の霹靂一閃にも反応し二人の攻撃を防ぐ。

「こっからはオレも本気で行く!、熱界雷!」

雷を細かくしそれを二人に向かって放つ。

「善逸!私の後ろに!岩の呼吸、参ノ型、岩軀の膚!」

善逸を後ろに避難させ飛んでくる攻撃を全て行冥が、撃ち落とし、同時に善逸が獺岳に突進する。

「雷の呼吸、捌ノ型、雷光一閃突き!」

鋭い突きを腹に喰らわせ獺岳は、壁に突っ込んで行くそれを追おうとするが行冥がそれを止める。

「善逸!深追いするな!油断は禁物だ!」

「つつ、はいわかりました」

二人は様子を見ながら。

「行冥さん、どうすれば良かったんでしようかオレが爺ちゃんの師範の弟子何かにならなきゃ」

「それは違うぞ善逸よ、人とは難しいのだ一度でも何か狂えば永遠に戻らぬ恐らく獺岳は産まれながらにして狂っていたのだろう」

「行冥さん」

その時、獺岳が飛ばされた地点から先程とは、比にならない程の稲妻が辺りを破壊しながら近付いて来た。

「嗚呼、奴もいよいよ全てをかけて来たか……奴は鬼になる運命だったのかもな」

「……………」

「オレをここ迄怒らせて、楽に死ぬると思うなよ！電轟雷轟！」

刀から繰り出す雷は全てを呑み込みながら二人に迫る。

「これは喰らうと不味いな……善逸！決めるぞ！」

「はい！」

二人は雷を躲しながら、隙が出来るのを待つだが隙は出来ずただ雷が辺りを蹂躪していった。

「行冥さん！一瞬だけ奴の攻撃を捌いてください！」

「善逸……………わかった！、岩の呼吸、壺ノ型、蛇紋岩・双極！」

鉄球と斧を同時に放ち雷を粉碎する、そして漸く出来た隙に善逸は一気に獺岳との間合いを詰める。しかも刀を既に抜いた状態で。

（速い……………だがよ馬鹿かこいつはこいつは抜刀攻撃か突きしか型はない筈、みすみす死にに来たかよ）

獺岳は雷を善逸に直撃させ、これで決まったかに思えたが。

「善逸！お前も兄弟子を見習え！お前も兄弟子の様に強くなれ！」

（爺ちゃん……………ごめんよこんなオレを誇りだなんて言ってくれて、オ

レは強くなったよ兄貴とは全く違う強さを手に入れたよだからせめて兄貴はオレの手で)

(つち、まだ生きてやがるなしぶとい野郎だ)

善逸は雷を喰らいながらも、その場に留まり静かに刀を一直線に振り下ろす天を斬り裂くが如く。

「雷の呼吸、拾ノ型、天羽々斬」

「馬鹿なっ」

真つ二つに斬り裂かれた獺岳は何とか再生しようとするが、其処に行冥の鉄球と斧が体をバラバラに斬り裂く。

「眠るがいい獺岳よ、岩の呼吸、壺ノ型、蛇紋岩・双極」

善逸はバラバラになっていく獺岳を見ながら下へと落下し始めるが行冥が落ちる前に、善逸を拾い損傷の少ない床に優しく寝かせる。

「爺ちゃんごめんよ、オレ獺岳を獺岳を」

「いいじゃ、お主が気に病む事はない、善逸よお主は生きろそして自らが本当に好いた子と幸せになれ」

「うんわかった、わかったよ、…ねえ爺ちゃんオレ強くなれたかな?」

師の笑みを浮かべながら頷く姿を見ると同時に善逸は意識を取り戻す。

「行冥さん、あれ?オレの傷は?」

「しのぶから貰った薬を使ったこれで何とか、戦えるだろう」

「はい、行きましょう行冥さん、全てを終わらせに」

「勿論だ、善逸よ我らの手でこの悲しい戦いを終わらせよう」

善逸と行冥は立ち上がり、無惨の元へと急ぐ。

城を飛び交う、鴉が叫ぶ。

「カアカア!善逸、行冥の、手により上弦の参撃破!カア!」

「……………獺岳め敗れるとは……………無様な」

「ありやりや獺岳君負けちゃったのか残念残念期待の若手だったのにオレは悲しいよ、ねえ君もそう思うだろ？しのぶちゃん？」

「気安く名前を呼ぶな気色悪い、それにアンタ本当に悲しいの？本当にそんな感情を持つてるの？」

「え？何だつて？」

「姉さんが行つてたもの、貴方は可哀想だつてもあれか剣心との戦いの時は」

「その男の名を口にするな！血鬼術！冬ざれ氷柱！」

しのぶは素早く、氷柱を躲す。

(本当にこいつ失明してるの？つてくらい正確に攻撃を当ててくる)

「どうしたのかな？しのぶちゃん？得意の毒は使わないのかな？」

「黙れ！」

「はは！どんどん行くよ!!血鬼術、寒烈の白姫！」

辺りを一気に凍結されしのぶに一気に攻撃が迫る。

(いきなり大技？、不味い喰らう)

「風の呼吸、壱ノ型、塵旋風・削ぎ」

荒々しい風が凍てつく氷を、全て吹き飛ばす。

「実弥義兄さん」

「何オレの大事な家族に、手え出してんだあ？」

童磨との死闘は加速して行く。

風想いを此処に

オレは産まれてからずっと何に対しても恐怖を無く怒りを無く感動も無かった、鬼になってからもそれは同じだっただがあの夜を堺にそれは変わった。

鬼も元は人間、人間は何かに恐怖或いは負けられないと言う気持ちを糧にし成長をする、童磨の場合は死への恐怖そして緋村剣心への恐怖を糧にし成長をした。

(なるほど、この気配はあの時しのぶちゃんと一緒に現れた男かまあいいさ柱が何人来ようが関係ないオレの獲物はあの男だけだ)

「おい、余所見かよお！風の呼吸、壱ノ型、塵旋風・削ぎ！」

再度実弥は童磨に向かい突進するが、それをぎりぎりです。

「酷いなオレは今、自分の感情に浸っていたのにさ邪魔しないでよ」

其処にしのぶも蟲の呼吸を用いて攻撃をするが全て扇で防がれてしまう。

(何よこいつ、目は見えて無いんじゃないの?)

「つち、流石に同じ技は見切られちまうかあ！」

実弥としのぶは変化を付けながら童磨に接近を試みるが。

「そんなんじゃないよオレには近付けないぜ！血鬼術！呪氷吹雪！」

凍てつく冷気を実弥としのぶに向かって放つ、実弥は塵旋風・削ぎを連続で放ち冷気を風で相殺させるすかさずしのぶは童磨の腹に突きを食らわせる。

「近付いたわよ！この馬鹿！蟲の呼吸、蝶ノ舞、戯れ！」

「しのぶ！刺したら一旦距離をとれえ！」

実弥の指示を聞きしのぶは距離をとり、毒が効いたかを確認するが。

「ふふ凄い威力だねこの毒は下弦の鬼なら瞬殺出来るよ、でも残念だね上弦の鬼の上位陣には通用しないな！」

何故童磨が目も見えていないのに正確に二人の位置を把握出来るか、理由は一つこの戦っている部屋全体を人形を至る所に配置している為だ、人形は目が見える人形から見た景色がそのまま本体童磨に伝わるその伝達速度は光よりも速い。

「ふふ、顔色が悪いよ？しのぶちゃん？さあ今度はこちらから行くよ！血鬼術！千年氷牢」

二人が気付いた時には遅かった、二人の周りを氷の柱が囲んでいた。

(しまった、反応が遅れた)

(せめてしのぶだけでも)

「花の呼吸、玖の型、千本桜・影芳」

「獣の呼吸、獣化、陸ノ牙、疾風斬り裂き！」

新たに現れた二人の手によりしのぶと実弥は窮地を脱した。

「はーはっは！さあ伊之助様の登場じゃーい！」

「貴方ねカナエ姉さんを凄いめに合わせた鬼は」

「ふーん今の攻撃を防ぐんだやるねえ、それにしても其処の君は何？猪の毛皮？変わってるなはは」

「ぐちやぐちやうるせえぞ！行くぜおら！！」

「待って伊之助！」

カナヲの静止を聞かず一人童磨に突っ込む伊之助。

「はは何か騒がしいな、血鬼術、冬ざれ氷柱！」

「つけ！効くかこんなもん！獣の呼吸、獣化、壺ノ牙強喰い噛み！」

二本の刀を用いて氷柱を砕いて行くがその間に童磨は伊之助との距離を詰める、そのまま伊之助を扇を使い後方へと弾き飛ばし腹を扇で貫こうとするが。

「一人で突っ込むなあ！猪！風の呼吸、捌ノ型、初烈風斬り！」

「そうよ！アオイにチクるわよ！花の呼吸、肆ノ型、桜蘭散乱！」

二人の斬撃により童磨の両腕を斬り落とし、すかさずしのぶの突きを喰らわせるが毒を即座に分解し四人に向かって再び術を放つ。

「四対一かあふふ楽しいな！血鬼術！大紅蓮氷龍！」

四体の氷龍がそれぞれに襲ってくる。

「やべーぞー！あれ！喰わうとやべえ!!」

「つち、いちいちうるせえ！いいから黙って避けろお！」

「皆一つに固まるんじや無くて、くそ！」

「しのぶ姉さん！実弥義兄さん！ここは私が！」

カナヲが高速でうねりを上げながら迫ってくる氷龍四匹に狙いを定める。

「此処だ！花の呼吸、玖ノ型、千本桜・影芳！」

四匹が重なる瞬間に合わせて花吹雪を放つが四匹の氷龍を止める事は出来ず花吹雪を全て凍らせて龍達は更に威力を上げていく。

「つち、このままだと……………」

氷の龍を躲すさなか伊之助の被っている毛皮が飛ばされてしまう。
「つち、クソ！」

童磨は龍を操作しながら伊之助の顔を見ながら昔殺したある女の事を思い出す。

「あれれ？その顔見た事があるねえ！ねえ君さ昔高い所から落ちた記憶とかないかな？」

「ああ？そんなもん……………」

以前死にかけて時に見た、泣きながら自分を崖に落とす女性を。

「ふふある様だね！まさかあの時、見逃した子供がこうして親の仇をとりに来るなんて本当に運命って皮肉だね！」

「って事は何か、てめえがオレのかあちゃんを殺したのか？」

「そうなるね！さあ頑張って君の親の仇は今日の前にいるよ！」

「ゲスが」

「どうしてもアンタは此処で倒さなきゃいけない様ね！」

カナヲとしのぶも改めて童磨に対して敵意を燃やす。

「はは！燃えるのは結構だけどさ！この状況でどうするんだい？皆死ぬのも時間の問題だぜ？」

実弥は龍を躲しながら剣心との稽古を思い出していた、そしてカナエと玄弥のやり取りを。

「剣心の土龍閃を風の型に改良した型にするのも大変だなあ」

「ですが全ての型は皆、一つから派生した物必ず出来ますよ」

「てめえが言うならそうだよなあ、よし続きと行くか」

「実弥さん、貴方は痣を出したいと思えますか？」

「思う、守りたい者を守る為ならオレは喜んで痣を出さずえカナエもわかってくるさ」

「兄ちゃん、オレはさ兄ちゃんこそ幸せになつて欲しいんだ！だから絶対に死なないうでくれ、オレは大丈夫だから！」

「実弥君は痣を出すつもりなの？」

「いざとなればな、今度は必ずしのぶをお前の大切な者を守り通す」

「馬鹿私にとっては実弥君も大切なんだよ？、それでも出すの？それに………ね産まれて来るこの子はどうするの？」

「オレの子………、ならよおその腹の子がデカくなったら伝えてくれやあ」

実弥は龍を躲しながら、自身の体温そして心拍数が高まって行くのを感じ取る。

「お前の父親は大切なもん守る為に、全てを賭けれる男だとさ」

右頬に風車に似た奇妙な痣を発動させ、龍の群れの中へ単身攻め込んで行く。

暴風

実弥の頬に痣が浮かんでいる、その痣を見てしのぶとカナヲはほんの一瞬間を歪めたが直ぐに平常に戻る。

(実弥義兄さん……………馬鹿)

しのぶは心の中で呟く。

氷の龍が四匹共実弥に迫るが。

(纏めて来てくれれば好都合だぜえ！)

「風の呼吸、玖ノ型、韋駄天台風！」

回転しながら突風を巻き起こしながら迫る氷龍を全て斬り刻む、そのまま驚いた表情をする童磨の懐に入り連続で型を放つ。

「風の呼吸、弐ノ型、爪々・科戸風！」

「お？、へえその痣が出てから動きが今までとじゃ比べ物にならないくらい速くなったね！」

「つけえ、その割には喋れるじゃねえかあ！風の呼吸、肆ノ型、上昇砂塵嵐！」

童磨の腕を斬り落としそのまま頸に狙いを定めるが、即座に距離を取られてしまう。

(なる程、オレとここ迄やりあえるなんてしかも他の子達も痣がで始めると面倒だなよし)

「これ以上長引かせる訳には行けないからね！これで終わりにしよう！血鬼術、無氷観音菩薩！」

氷像を出現させ、自身は氷像の中へと身を隠すそのまま辺りに氷柱

を放ち蹂躪して行く。

(何よ、これ剣心との時よりも大きい氷像!?)

「さあ後は辺りを纏めて凍らせて終わりにしようかな?」

氷像は手を大きく広げ辺りを凍らせるべく冷気を溜め始める、その間カナヲと伊之助が左右から氷像に飛び掛かる。

「伊之助! 氷像の動きを一瞬でも止める! そしたら実弥義兄さんとしのぶ姉さんが必ず頸を斬ってくれる!」

「おう! 分かったぜ! ハナヲ!」

左右同時に斬撃を放つ。

「花の呼吸、奥義、千本桜影芳・終景・白帝剣!」

「獣の呼吸、獣化、我流転星!」

氷像の腕を左右同時に吹き飛ばす、実弥としのぶはカナヲと伊之助を信じ既に間合いに入っていた。

「目障りな、でも馬鹿だねオレは氷像の中に居るんだよ? これで終わりだ!」

二人に向かって巨大な氷の塊を放つ、実弥は即座にしのぶを庇うように前に出る。

(見ろ、奴の血鬼術の渦を)

実弥は迫る氷塊を凝視する、そして見つけるこの氷塊の力の流れ即ち渦を。

(見えたぜえ！)

「くらえ！オレ達を見くびった力を！風の呼吸、奥義、爆流烈風波！」
放った衝撃波は氷塊を纏う渦に放たれる、そのまま渦は逆流し始めて氷塊を呑み込みながら暴風が如く勢いで氷像を壊し童磨自身の下半身を吹き飛ばす。

(!!、でもまだ体は再！しのぶちゃん!?)

「させるかあ！蟲の呼吸、蜂牙ノ舞、真摩き！」

しのぶの渾身の一突きが童磨の左眼に入る、その瞬間下半身の再生が止まる。

「え？何で？オレの」

「これで終いだあ！、風の呼吸、漆ノ型、勁風・天狗風！」

童磨の頸は空を舞った。

実弥は気を失い落下しようとするが、しのぶとカナヲが直ぐに実弥を抱え地面に着地する。

「はあああ、良かった実弥義兄さん生きてる」

「勝ったよ、カナエ姉さん……………」

しのぶとカナヲは実弥が無事なのを確認し一息付こうとするが、しのぶは伊之助が一人蹲っているのに気が付く。

「伊之助君」

「しのぶ……………オレズツトネ母ちゃんに捨てられたんだって思ってたけど違ったヨ」

「うん、良く頑張ったね伊之助」

そう言いながらしのぶは伊之助の頭を優しく撫でる、その姿に母を

重ねて伊之助は涙を流す。

「母ちゃん……………」

「カアカア！上弦の式、実弥、しのぶ、カナヲ、伊之助の手により撃破！カア！」

「凄いわ！しのぶちゃん！勝ったのね！」

「甘露寺鬼の気配がする、気を抜くな」

「伊黒さん！はい！」

キュンと心を鳴らしながら、二人は走ると広い広間に出る。

「此処は……………む？甘露寺彼処に」

「あれは上弦の肆ね、新たに補充されてるなんてはやすぎだわ」

「甘露寺油断せずに行こう」

「……………」

ベンベンと琵琶の音が辺りに鳴り響く。

「兄貴勝ったみたいだな……………」

「玄弥気になるのは分かるけど、ちゃんと辺りに注意を払ってね」

「わかってるよ、時透さん！」

無一郎と玄弥が走っていると、城がまた移動し始める二人は迫る壁

に反応し避けるが二人は別の場所に飛ばされてしまうそして其処にいる鬼は。

「痛いな何かこの城ムカつく大丈夫？玄弥？」

「大丈夫です」

「漸く……………来たか……………鬼狩り……………」

二人は声のした方へと視線を移すと其処には上弦の壺が立っていた。

「其処の髪の毛長い鬼狩り……………名は何と言う？」

「何だよ急に、時透無一郎だよ」

「時透……………そうか途絶えたのか……………」

「オレはこれ以上お前とのんびりお喋りするつもりはないけど？」

玄弥に下がる様に指示を出し無一郎は上弦の壺と向き合う。

「私の名は黒死牟……………どうやらお前は私の末裔らしい」

「何それ？そんなデタラメな事言つてオレを惑わそうとしてるの？ムカつく」

無一郎は即座に黒死牟に近付き刀を抜き放つが、容易く躲される。

「なる程……………私の威圧感に怯まず斬りかかる……………流石は我が末裔」

連続で斬撃を放つが黒死牟はそれを軽々と躲して行く。

(全然攻撃が当たらない?)

「此処で死なすに惜しい……………どうだ?
……………鬼にならぬか?」

「なる訳ないだろ!、霞の呼吸、肆ノ型、移流斬り」

高速で斬りかかるがそれもやすやすと躲されるしまう、そして黒死
牟も静かに刀を抜く。

「如何ともし難いこの力の差を……………前にして挑む
……………その覚悟に敬意を示そう」

(此処だ!)

無一郎は痣を発動させそのまま型を放つ、黒死牟は刀を振り降ろ
す。

「霞の呼吸、壺ノ型、垂天遠霞」

振り降ろされた刀と鋭い突き技が衝突する、そのまま二人は高速で
撃ち合う無一郎が連続で突き技を放ち黒死牟は静かに切っ先を立て
てそれを防ぐ。

(霞か……………それに痣か……………身体能力が向上し
ている)

「無一郎さん!」

「!!」

玄弥は左手を開放し黒死牟に叩き付けようとするが、刀を横に振り
抜き足を斬り裂き阻止しようとするが玄弥の体は再生する。

「そうか……………お前か……………鬼の力を体に留める
事が出来る鬼食いは……………」

「余所見？霞の呼吸、捌ノ型、晚霞・春雷」

高速で突きと振り降ろしの連撃を放つ、この技には黒死牟も驚く。

「おお素晴らしい剣技……………名は途絶えど剣才は途絶えなんだか」

「何ごちやごちや言ってるんだ！」

左手で柱を掴み投げ付ける、それを避けようとするが無一郎が鋭い
突きを放つ。

「この状況で連携をとれるか……………良かろうならば我が剣
技しかとその目に刻め」

無一郎と玄弥は警戒しつつ出方を伺う。

「月の呼吸、伍ノ型、月魄災禍」

振り動作も無しに一定の範囲に斬撃が拡散する、不意を付かれ玄弥
と無一郎はそれぞれ腕を斬り落とされる。

「つぐ……………霞の」

斬り落とされた腕を止血し無一郎は攻撃をしようとするが玄弥が
無一郎の前に立つ、体は再生済みだ。

「無一郎さん、ちゃんと止血をしてください何とか時間を稼ぐんで」

「鬼食いの小僧……………殺して死なないのと殺し続けて死なな

いのとでは……………意味違うぞ」

「はっ…何を」

「月の呼吸、陸ノ型、常夜孤月・無間・三連」

三回刀を振るとその前方に実在する無数の斬撃が現れ玄弥は反応すら出来ず腕と足を斬り落とされる。

「はやすぎだろ」

「二人仲良く……………逝くが良い……………月の呼吸、弐ノ型、珠華ノ弄月」

二人は死を覚悟するが、突如壁が破られるそしてある一人の剣士が飛んでくる刃を撃ち落とす。

玄弥と無一郎はその姿を視界に入れると、こう呼んだ。

「「剣心」さん」！

「間一髪か、無一郎玄弥と共に下がれ後玄弥これ以上鬼の力は使うな」
無一郎が玄弥を抱え剣心の言葉に頷き二人は下がる。

今、二人の強者が衝突しようとしていた。

月と龍

此処はある屋敷の縁側、二人の男が物々しい威圧感を放ちながら鎮座している一人は元炎柱、煉獄杏寿郎、そしてもう一人は。

「共に戦いたいと言う気持ちはわかるが俺達の役目はかわってるだろう？、杏寿郎」

「うぬ！、わかっているとも！比古殿！だが」

「まあな鴉から逐一、戦場の状況が耳に入ってから来るからな心配にはなるだろうな」

「それにな！竈門妹が本当に人間に戻るかも」

「俺達に出来るのは信じる事、それしかねえよ」

(剣心、炭治郎よ頼んだぜ)

また別の場所でも、二人の剣士が向かい合っていた。

「お前ならば……………必ず此処に来ると……………思っていた」

「そうか俺は元より貴様を、殺すつもりからな標的は貴様と無惨」

無限城最奥大広間にて、十二鬼月最強と鬼殺隊最強、二人はそれぞれ思う所があるのだろう問答から入る。

「最後に一つだけ聞く、雲柱を殺したのは貴様だな？」

「いかにも……………実に惜しい腕だった……………もう一人の剣士は直ぐに鬼になったと言うのに……………」

「そうか、ならこれで問答は終わりだ行くぞ」

「漸く……………戦える……………待ち望んだ……………」

無一郎と玄弥は治療を終え、離れた所で黒死牟と剣心の戦いを見守

る。

「大丈夫かな？、剣心さん」

「大丈夫だとは思う、でもいざとなればわかっているな？玄弥？」

「ああわかってるよ、無一郎さん」

二人は暫し刀を抜く態勢のまま膠着状態に入るが、両者同時に距離詰める。

「月の呼吸、壺ノ型、闇月・宵の宮」

「龍の呼吸、捌ノ型、双龍閃」

剣心は先に鞘を黒死牟に向かって放ち刀と鞘が衝突する。

(何と……………速い……………私が刀を振り切る前に……………しかもこの鞘鉄づしらえか……………)

一瞬、黒死牟が鞘に驚くが剣心はそのまま左手に持っている、刀を振り黒死牟の体を斬るが即座に再生しそのまま打ち合いになる。

「やりおる……………貴様の程の剣士は……………そうはいまこ」

(再生速度が他の上弦の鬼共比べ物にならない、これが上弦の壺)

「月の呼吸、肆ノ型、偃月薄月」

鋭い突きを放ちその間に半月のような実体する斬撃が辺りに散らばる、がその斬撃を一つ一つをしっかりと見切りその上空へと翔ぶ。

「龍の呼吸、壺ノ型、龍槌閃・斬」

黒死牟は突きを躲された瞬間に、上空へと視線をやるが既に剣心は

落下を始めていた。

「ほう……………面白い、月の呼吸、弐ノ型、珠華ノ弄月」

飛んでくる斬撃を切っ先を立てて落下の力を利用し、弾きながらそのまま黒死牟の左肩を斬ろうとするが。

「余り……………調子にのらぬ事だ、月の呼吸、伍ノ型、月魄災禍」

「つち」

振り無しで斬撃を飛ばし剣心を後方へ弾き飛ばしそのまま斬撃を放ちながら接近する。

「調子になるなか、その言葉そのままお前に返そう、龍の呼吸、弐ノ型、龍牙閃」

神速の突きで放たれた刃を呑み込みながら、二人の間合いの距離はほぼ零に等しくなる。

「近付いた事を……………悔むがいい、月の呼吸、参ノ」

「遅い、龍の呼吸、弐ノ型、龍牙閃・零式」

上半身の力だけで、鋭い突きを黒死牟が技を放つ前に頸に迫るが上空から先程飛ばしておいた斬撃が落下し頸を突きから守った、そのまま月魄災禍を連続で放ち剣心と距離を取る。

剣心は離れた黒死牟を睨む、今の攻防で肩と腕を斬られてしまう。「どうした？、こんなかすり傷程度で様子見か？」

「そう死に急ぐな……………鬼狩り……………やはり貴様は死なすに惜しいどうか貴様も鬼にならないか？」

「ならない」

「理解が出来ぬ……………極められた剣技が潰えるのだぞ？……………鬼になれば永遠に自身の剣技を高められると言うのに」

「人は皆いずれ死ぬ、だからこそ人は人として生きる事に意味がある、まあ鬼になった貴様にはわからん事だろうがな」

「ならばもう一つだけ……………貴様は……………まだ痣は出てない様だが……………いずれは出るだろうだがな」

「貴様が言いたいのは分かっている痣者は皆、二十五を待たずして皆しぬのだろうか？」

「知っていたのか……………そうだ……………痣者は皆一つの例外もなく死ぬ」

その黒死牟の言葉に剣心は、ある確信を得た。

「おい、嘘は付くなよ」

「何?……………私は……………嘘など」

剣心は構えながら言葉を続ける。

「居たんだろう?二十五を超えて尚も生きていた例外が、龍の呼吸、参ノ型、龍翔閃」

動揺したのか黒死牟は、剣心の攻撃に反応せずに左肩を斬られてしまふ、そのまま鋭い一振りで黒死牟を壁へ吹き飛ばす。

(……………)

黒死牟は今の剣心とのやり取りで遥か昔のあの嫉妬と憎悪の忌まわしい日々が、蘇っていた。

(縁 壺

……………)

縁 壺

……………縁壺!)

土煙が立ち込めるので黒死牟の様子を探る事が出来ない為に剣心は様子を見ていたが土煙が払われ辺りに斬撃飛び交う。

「何だ？あんな遠くまで斬撃が？」

剣心が斬撃を避けながらその放たれた位置に視線を送ると。

「貴様は許さぬ……………よくもあの忌まわしい日々を鮮明に思い出させてくれたな……………」

剣心は驚愕した、黒死牟の持っている刀に。

(あの長さがあれば確かに、遠くにある物にも攻撃を当てれるか)

「お前を殺せば……………後は容易い……………此処が貴様の死地と知れ」

「……………」

今、上弦の壺が剣心に牙を向こうとしていた。

牙を向く月

剣心は黒死牟の長刀に視線を送る。その長刀は歪な形をしており釜の様にも見える命を刈り取る釜の様に静かに警戒を強めて行く。

「月の呼吸、漆ノ型、厄鏡・月映え」

複数の斬撃が地を這いながら剣心へと迫る。更に、その斬撃にも殺傷力のある細かな斬撃が伴っている。

「龍の呼吸、陸ノ型、土龍閃」

剣心もまた地を這う斬撃を飛ばし相殺させ黒死牟との距離を詰めようとする。

（長刀ならば普通振るう速度は僅かではあるが落ちるものだ。だがこいつの場合は速度が上がっている）

「月の呼吸、捌ノ型、月龍輪尾」

「龍の呼吸、漆ノ型、龍巻閃・凜」

黒死牟が放つ横薙ぎの一閃、そこから産み出される壱ノ型とは比にならない範囲で剣心へと放つ。剣心は回転速度を上げそのまま斬撃を放ちながら距離を更に詰める。

「流石だ……………怯む事無く即座に距離を詰めてくる」

「刀は振らせん、龍の呼吸、伍ノ型、龍巢閃」

連続で斬撃を放つが全てを長刀を上手く使い防ぐ。

「距離を詰めすぎだ……………月の呼吸、拾ノ型、穿面斬・蘿月」

回転鋸の様な歪な形状の斬撃を複数横に並べて放ち、剣心は即座に上空へと翔ぶ。

「かかったな……………月の呼吸、捌ノ型、月龍輪尾」

上空へと翔ばせる事が黒死牟の狙いだった、空中では普通は回避する方法は無いからだ。

「龍の呼吸、拾ノ型、疾空龍頭閃」

剣心は全身の力と刀の遠心力を上手く使い空中ではあるが、その場から加速し黒死牟の間合いを詰め左肩を斬り落とし返す刀で頸を狙うも惜しくも避けられてしまう。

「どうした？その長刀は見せかけか？」

「くだらん……………挑発だ……………月の呼吸、拾参ノ型、偃月・暁月夜」
半月状の斬撃を複数個剣心に向かって放つが、剣心は軌道を即座に見切り躲しながら再度前進する。

無一郎と玄弥は離れた所で、固唾を飲んで剣心と黒死牟との闘いを見守っていた。

「どっちも凄すぎてやべえ」

「剣心が負けるもんか、悔しいよね今俺達が行っても邪魔にしかならない」

「無一郎さん、見守りましょうそれしかねえよ俺達が出来る事は」

三度剣心は黒死牟との間合いを詰めながら、斬撃を躲して行き黒死牟の一瞬の隙を付く。

「龍の呼吸、拾壹ノ型、戦乱龍撃閃」

加速した状態で技を放ち剣心の刀が黒死牟に届こうとしていた。

黒死牟はこの一瞬にも満たない状況の中で、ある夜の事を思い出していた。

赤い月が空に浮かぶ夜黒死牟は信じられぬ物を見た。

「馬鹿な………何故お前が生きている？………痣を
持っている者は死ぬ筈………」

「お勞しや兄上」

かつて弟だった存在は俺を見て静かに涙を流していた、俺はかつての憎悪が一気に爆発し涙を流す弟に有無を言わさず斬りかかろうとした、だが。

「参る」

弟はそう静かに言うのと俺の視界から消えた、瞬間俺の頸は斬られた反応すら出来なかった頸は本の僅か繋がっている状態だった弟が次に動けば確実に殺されるだが次の斬撃は来なかった弟は立ったまま死んでいた。

この鬼狩りの歴史で最も優れた剣士が死んだ今誇り高い死が来ることは無いその筈だった。

（この男もまた今私の頸を斬ろうとしている、もう二度とあんな屈辱はごめんだ）

黒死牟は雄叫びを上げると同時に脇腹から歪な斬撃を放つ。剣心は不意を付かれ腕と脇腹を斬られる。

（何だ？予想外の所から、斬撃が飛んできた？）

剣心は黒死牟へ視線を再び向けると、腕が何と六本になっていた。

人は命の危機が迫ると信じられない力を発揮する事がある、それは鬼もまた同じ鬼も元は人間だからこそ鬼もまた信じられない力を発揮する。

「鬼は人間だったんだから、か」

剣心は炭治郎が言っていた言葉を思い出していた。

指揮をとっている輝利哉達は鴉をとうして剣心と黒死牟との闘いを見守っているが、全員顔は青ざめているその中くいなは輝利哉に声をかける。

「お館様どうされますか？援軍を向かわせますか？」

それにひなきも続く。

「我妻様、悲鳴嶼様が行けます。竈門様、富岡様は雑魚鬼との戦闘中で、後は胡蝶様は不死川様の手当てをしている為動くのは難しく伊黒様と甘露寺様は上弦の肆と交戦中です」

二人の言葉を聞き輝利哉は顔を上げる、その表情は何かを決心した表情をしている。

「援軍はいい他の柱達は無惨の元へそれに上弦の壱を相手どれるのは鬼殺隊全体を見ても剣心しかない」

輝利哉の話しを聞き頷く四人。

「私は剣心そして無一郎、玄弥が必ず上弦の壱を倒すと信じる」

「月の呼吸、拾陸ノ型、月虹・片割れ月」

六本の腕を振り下ろし無数の斬撃の柱を大広間全体に向かって放

剣心は玄弥に礼を言うのと柱の上へと上がる。上へ上がると無一郎が黒死牟の懐へと入ろうとしていた。

(俺がほんの僅かでも隙を作れば剣心なら必ず)

「無一郎!!」

だが黒死牟はそうこちらが動くと言っていた。

「一人が………捨て身で突っ込んで来るのは必然………さ
らば我が末裔」

「間に合えー!」

「月の呼吸、拾伍ノ型、無月・回転千月」

体を回転させ竜巻を作り無一郎は竜巻によって上空へと打ち上げられ体を斬り刻まれる。

(つぐ………)

その様子を見た瞬間、剣心の中にある何かがキレた。

「があああああああああああ!!」

咆哮と共に剣圧が黒死牟へと迫り壁へと吹き飛ばし、剣心は素早く無一郎を横抱きにし玄弥の元へと行き無一郎を預ける。

「剣心さん」

玄弥は無一郎がもう助からない事を悟ってしまった。

「剣心……………ごめん何も出来なくて……………信じ
てるから」

「ああ玄弥と一緒に見ていてくれ終わらせてくる」

「うん」

剣心は静かに黒死牟と向かい合う。

黒死牟は気付く剣心の頬に龍の様な痣が浮かび上がっている事、
そして持っている刀が赫く染まっている事に。

「貴様は……………一体……………」

「始めよう、黒死牟」

去り逝く者

剣心は静かに黒死牟へと歩み寄って行く、まるで散歩でもしているかの様に。

(何だ？この男雰囲気が変わった、それに今迄こいつには無かった圧倒的な何かを感じる)

一步また一步とゆっくりこちらに近付いて来る剣心を見て黒死牟は痺れを切らし攻撃をする。

「いつまで……………ゆるりとしているつもりか？月の呼吸、拾肆ノ型、兇変・天満織月」

六本の刀を振り抜き幾重にも重なる斬撃が剣心へと迫る、この斬撃はもはや並の剣士ならば躲す事も叶わずに細切れにされてしまうだろう。だが剣心は何もする様子も無く歩き続ける。

(何故何もしない？戦意喪失したのか？)

斬撃が当たると黒死牟は確信したが、斬撃は剣心の間合いに入ると同時にその場で消えてしまう。

(？奴は何をした？)

「お前は今……………何をした？……………月の呼吸、拾ノ型、穿面斬・蘿月」

鋸状の斬撃を放つがまたしても先程と同じく間合いに入ると消えてしまう。

(何だ？何だ？奴は何を)

黒死牟は動揺していた剣心が何かをして斬撃を消しているのはわ

かるだが、その理由が見つからない動揺は益々広まって行く更に剣心の姿が弟と重なる。

「うああああああああああ、月の呼吸、拾陸ノ型、月虹・片割れ月」

「無駄だ」

斬撃の柱が迫るが超神速を遙かに超える剣技で柱を全て消えて見える迄斬り刻む。

黒死牟には剣心は何もして無い様にしか見えなかった。さながら剣界と呼ぶに相応しい剣技。

剣心と黒死牟は互いの間合いに完全に入る。

「調子に乗るな！……………月の呼吸」

「遅い」

腕六本で刀を振り下ろし、方や腕一本で刀を斬り上げる普通ならば腕六本が有利だが剣心が押し勝つ。

そのまま二人は至近距離での斬撃の応酬となる、腕六本でそれぞれの角度から刀を振るうが剣心は容易く全ての斬撃を刀で防ぐ堪らず距離を取ろうとするが剣心は蹴りを入れて黒死牟を後退させる。

（馬鹿なありえぬここまで手も足も出ないのか？痣が出ると身体能力は向上する、その上がり方は人それぞれだ余り変わらない者もいるだが）

「まだまだ！……………私はまだ！」

「龍の呼吸、拾弍ノ型、九頭龍閃」

九つ同時斬撃によりまず腕六本が吹き飛ぶその瞬間に再生しようとするが。

(再生しない!?)

黒死牟の腕は再生機能を失っていたそして最後の斬撃が頸に入る。

「兄上我らはそう大した者では無い、この瞬間にも我らを超える才を持った子供が産声を上げています」

「きつとこれから産まれて来る子供達が我らよりも高い場所へと登り詰めて行くだろう」

頸がコトンと床に落ちた。剣心は黒死牟の方に視線を向ける。

(再生しない身体がこれが赫刀、縁壺の力、これで終わりなのか、私は一体何の為に生きてきた？何故鬼になった?)

と黒死牟は人だった頃、縁壺と共に暮らしていた日々が脳裏に過る。

「兄上の夢はこの世で一番強い侍になる事ですか？私も兄上の様になりたい私は兄上の次に強い侍になります」

(侍……………そうだ思い出した、私は私は縁壺お前になりたかったんだ)

黒死牟の身体は灰になって消えて行った。

「無一郎!」

剣心は灰になったのを確認し直ぐ様無一郎の元へと駆け寄るが、無一郎は既に。

「無一郎ありがとう、お前のおかげで勝てた」

無一郎の瞳をそっと閉じ剣心は髪を優しく撫でる。

「あれ？此処は何処だろ？」

無一郎は目を覚ますとイチヨウの葉が飛び交う広間にいた。目の前に兄の有一郎がいた。

「戻れ！こつちに来るな戻れ！」

「兄さん」

「お前は何であんな馬鹿な事をした？殆ど無駄死にじゃないか！」

「無駄死に何かじゃないよ、だってあそこで俺が行かなかったら皆死んでた」

「そんな役目をお前がするなよ逃げるべきだったんだ」

「俺は自分がした事には悔いは無いよ、兄さんが鬼に殺されてずっと一人だったでも皆が俺を一人にしないでくれたんだ。そんな優しい仲間を死なせたくなかったんだ！」

「無一郎……でもそれでも俺は無一郎には死んでほしくなかったよ」

「兄さん」

「剣心さん本当は俺が無一郎さんの役をしなくちゃいけなかったのに」

玄弥は涙を流しながら俯いている。

「玄弥お前はいや俺達は無一郎から託されたんだ想いを、無一郎だけ」

じゃない真菰やこれまで死んでいった剣士達の想いも今俺達に繋がっている今俺達がやるべき事は一つだ」

「剣心さん」

剣心はふと顔を俯いて一言小さく呟く。

「勝ったよ、真菰」

その時、誰かが剣心の頭を優しく撫でこう告げた。

「頑張ったね剣心」

かつて自身に向けてきた優しく声がした、剣心は顔を上げるがそこには誰もいなかった。

(そうか、見守ってくれてたのか)

真菰は一人桜並木を走り木の下にいる二人人影の元へと。

「お父さん！お母さん！私ね好きな男の子が出来たんだよ！」

満面の笑みを浮かべながら真菰は両親に抱きついた。

剣心は暫く溢れる涙を止める事が出来なかった。

殺戮の夜

「カアカア！上弦の壺、剣心、無一郎、玄弥の手により撃破並びに無一郎死亡カア！」

鴉が叫びながら城内を飛び回る。

「無一郎君」

炭治郎は鴉からの報告を聞き涙を流す。

（また仲間が死んでしまったでも皆やるべき事をやってるんだ俺も必ず最後迄闘う）

「実弥義兄さん今の聞きましたか？」

しのぶは治療を終え横たわる実弥に話しかける。実弥は顔を手で覆っている。

「ああ聞こえてらあ」

（ありがとう、剣心、無一郎俺の弟を死なせねえでくれて）

「そろそろ私達も行くとしましようそれと泣くのは無惨を倒してからにしましょっ。」

「わかってるよ行くぞお！」

バンベン、城全体には未だに琵琶の音が響き渡る。

(時透が死んだだが上弦の壱を倒しているそれに対して俺はどうだ？
ずっと上弦の肆を討てないでいる)

「伊黒さん！焦っては駄目よさっきの私みたいになるわ！」

「甘露寺わかつている」

二人はまだ上弦の肆に足止めをくらっていた。

指揮をとる輝利哉は焦りの表情をしている、それに気付いたくないな
が声をかける。

「お館様いかなさいましたか？」

「不味いな無惨が復活する」

その言葉を聞き驚愕する四人輝利哉は四人に即座に無惨の周囲の
状況を確認する様に指示を出す。その中にちかがいち早く状況を確
認し説明する。

「第一陣はもう間もなく無惨の元へと到着するもようです！更に二陣
めも近い位置にいます！」

輝利哉は瞬間に不味いと思った。

「不用意に無惨の元へと近付けられるな！柱が来るまで全陣待機命令
を！」

四人は即座に鴉を通して城内にいる隊士達に指示を出す。

第一陣にいる一人の隊士が指示を聞くが柱の為に少しでも無惨を
弱らせる、と考え他の仲間には伝えず無惨のいる中心部に突入する。

「あつたぞー！この中に無惨が」

隊士が周囲を囲っている仲間に指示を出そうとした瞬間に繭から

無惨が飛び出す。

「ふうせつかく人が薬を分解し休んでいる所にゴミ共が騒がしいな」
飛び出した無惨は繭の上に座る、無惨の容姿は髪は黒く身体に複数
個口が付いている禍々しい姿になっていた。

「とはいえ私は今何故か気分が良いどうだ？貴様等鬼にならんか？私
の手駒にしてやろう但し頭を垂れてつくばえばの話のだが」

「黙れ！誰がなるか！」

「そうかならばここで死ぬがいい」

無惨は腕を振るうだけで周りにいる隊士達が吹き飛ばれて行く。
隊士達は壁に叩き付けられ絶命した。

「やれやれ私以外の鬼は殆ど殺られたか、まあ良いだろう私自らの手
で鬼狩り共を潰す事にしよう」

第一陣が全員殺された後続けて第2陣も来るが先程同様壁に叩き
付けられ絶命する。

「ゴミとは言え腹が減っている時はそれなりに美味しく感じるなき
て、鳴女!!!」

無惨が声を出した瞬間城がまた動き始める。

「クソ！柱はまだか？急げ剣心は？」

無惨に大勢の隊士が殺された事で動揺する輝利哉。

「恐らくまだ龍柱様は治療中かと戦線に戻るには時間がかかると思わ
れます」

「私のせいで子供達が沢山殺された私の判断ミスのおかげで」

「しつかりしてください！お館様！」

狼狽える輝利哉にあなたは思いつき張り手をお見舞いする。

「貴方様が迷えば隊士達にも迷いが生じます！貴方がいたからこそ上弦の鬼達を滅する事が出来たのです自信を持って最後迄務めを果たして下さい！」

その張り手を喰らい冷静になる、輝利哉そしてあなたに礼を言い皆泣きながら隊士達に指示を送る。

「とにかく一刻も早く柱を、揃える剣心の元へ治療に覚えのある者を向かわせるんだ」

城は更に移動を続け、無惨は炭治郎、義勇の前に姿を現す。

「お前は……………無惨」

「炭治郎落ち着け」

今にも飛びかかりそうな炭治郎を落ち着かせる義勇。だがその表情は怒り狂っている。

「理解に苦しむ何故お前達は見ず知らずの人の為に命をかけれるのだ？、普通の人ならば絶対にそんな事はしない生き延びて運が良いと考え後の人生を静かに暮らすだろう」

炭治郎、義勇には無惨の言っている意味がわからない。わかりあう筈はない鬼と人では。

「では何故か理由は簡単だ、貴様等は異常者だからだもう私はお前達

の相手をするのは疲れた終わりにしよう」

「無惨お前はこの世にいてはならない生き物だ」

しのぶと実弥は城内を走っていたそして丁度伊黒、甘露寺と合流する事が出来た。

「あーしのぶちゃん！良かったわ無事だったのねってゆっくりしてる場合じゃないのー！」

「胡蝶、不死川お前達は時間をかけ過ぎだだが無事で良かったな」

と四人が話している所に壁が迫ってくるが四人は即座にバラけて避ける。としのぶは何者かに掴まれる。

「誰ってあら、愈史郎じゃないのいたの？」

しのぶが話しかけるが不死川、伊黒、甘露寺は鬼が隊士の格好をしている事に驚くが聞かされていた協力者と外見が一致した為三人はその場で様子を見る。

「蟲女お前は此処に残れ、後の任侠者と根暗とデカ乳はとつと無惨の所へ行け」

「ああ？」

「おい小僧、デ……………とは誰の事だ？」

「え？私の事？」

「皆さんは先に恐らく愈史郎には考えがあるんでしょ、あの鬼は私達に任せて」

三人は文句を言いながら先へ行き、しのぶと愈史郎で上弦の肆、鳴女に挑む。

無惨は腕を振り風圧を起こすが、炭治郎と義勇は耐えてそのまま二人は接近しようとする。

(まあその辺奴等よりは強いが、やれやれだ)

腕を伸ばしそのまま振り回すその速度は上弦の比では無い。炭治郎と義勇はそうかんじた。

「龍の呼吸、参ノ型、龍翔閃！」

「水の呼吸、壹ノ型、水面斬り」

二人は左右別々に腕を斬ろうと考えるが何と刃が通らなかつた。

「その程度で私の腕を斬り落とせると？笑わせる」

更に腕を振るう、腕は二本とは言え直前で動きを変えたりとまさに変形自在だった。

「義勇さん！、諦めずに何度でも行きましょ！」

「わかっている、水の呼吸、参ノ型、流々舞い」

腕を弾きながら義勇は何とか懐へと入ろうと試みるが休む事なく迫ってくる攻撃に次第に義勇が押され始める。そして義勇の背後から攻撃が当たろうとした。

「義勇さん！後ろ！」

「しまっ」

「風の呼吸、貳ノ型、爪々・科戸風」

真空の三本の刃が義勇に迫る腕を弾き飛ばす、更に伊黒と甘露寺も斬撃を放ち無惨を後退させる。

「おいおいぼーとしてんじやねえのかよ富岡あ！」

「俺はぼーとしてない」

「きゃ！また来るわ！」

「数が増えた所で何も変わらん！」

腕をしならせながら五人へと放つ、炭治郎、実弥は二人同時に斬るが刃は通らず二人は飛ばされる。

「腕を斬れないのか、厄介な」

「どうしたらいいの？」

「とにかく今は時間を稼ぐしかない」

「時間を稼ぐ必要はない貴様等はここで死ぬそれだけだ」

攻撃速度を上げ甘露寺へと腕を伸ばすが炭治郎が腕を斬られながらそれを阻止する。

「調子に乗るなよ、無惨、日の呼吸、灼骨炎陽」

「！」

炭治郎が刀を大きく振りながら斬撃を放ち無惨の腕を斬る。

（やはりあの小僧の呼吸はあの化け物と同じか目障りな）

と無惨が炭治郎へと集中攻撃をしようとした瞬間城全体が大きく揺れ始める。

「何だ？この揺れは鳴女は何をしている？」

「日の呼吸、炎舞」

「調子に乗るな！目障りな小僧が」

攻撃をしようとした瞬間、鳴女とその後ろにいる愈史郎が視界に入る。

（何だあれ確か珠世の鬼か、奴は何をしている？それに何故だ鳴女の呪いが外れている？）

と愈史郎の横からしのぶがひょっこり顔を出す。

「何で呪いが外れているって顔をしてるわね？教える訳無いでしょ頭無惨が！」

「貴様を今から地上に引きずり出してやる！」

「させん！」

腕を愈史郎達に伸ばすが、炭治郎、実弥、義勇、伊黒、甘露寺がそれを防ぐと同時に無惨を含む全員の足元に襖が出現する。

べん！と響くと同時に襖が開き炭治郎達は城の外へと移動する。

炭治郎達は無惨を探す。

「夜明けはまだのようだな」

「そうみたいね！」

「奴は何処だあ？」

「炭治郎匂いでわかるか？」

「やってみま」

炭治郎が匂いを探ろうとした瞬間目の前にある建物が吹き飛び無

惨が姿を現す。

「夜明けまで私をこの場に留めるつもりか？ やれるものならやってみろ！」

無惨は怒り狂って襲いかかって来る。

皆の力

「夜明けまで後どれくらいある?」

輝利哉があなたに問いかける。

「夜明けまで後一時間二十分です」

「まだそんなに、子供達と無惨はどこに飛ばされた?にちか?」

「不味いです、此処から少し離れた所の市街地です」

「何だと……………、全ての隠を向かわせるんだ!一般人への被害は絶対に出す事は許されない!」

「頼む、皆」

「あ…まね戦況はどうなっているんだい?」

「無惨と共に地上へ移動したと、夜明けまで後一時間二十分です」

「そう……………か子供達が頑張っているんだ私が諦めてはいけないな」

「恋の呼吸、壱ノ型、初恋のわななき」

「水の呼吸、漆ノ型、雫波紋突き」

「風の呼吸、肆ノ型、上昇砂塵嵐」

「蛇の呼吸、参ノ型、壻締め」

四人が一斉に斬りかかるが無惨は意に介さず腕をしながら全員の攻撃を弾くが四人は間合いを維持したまま斬撃を放ち続ける。

「四人がかりでその程度か？さあ更に速度を上げるぞ！」

「舐めんじゃねえ！」

風の呼吸を使おうとするが実弥更には他の三人はある事に気付く。

((間合いに入りすぎた))

攻撃が四人に当たろうとした瞬間、隊士達が一斉に無惨に飛びかかる。

「突っ込め！柱を守るんだ！無惨に対抗出来る人達を死なせるな！」

「きゃあ！辞めてよ！皆！」

無惨に突っ込んで行き次々と殺されて逝く隊士達、炭治郎も無惨へ攻撃をしようとする。

「がは！」

炭治郎は突然血を吐き地面に倒れ込む。

「即死出来は者は運が良い」

「何を言っている？蛇の呼吸、壱ノ型、委蛇斬り」

「水の呼吸、弐ノ型、水車」

二人の攻撃を無惨は飛んで回避する、そして話しを続ける。

「私はな自身の攻撃に血を相手に打ち込む様に攻撃をする。鬼にはしない人の細胞を破壊する血だあれを見ろ」

四人は無惨の指差す方へと視線をやると、炭治郎は血を吐いて倒れていた。

「竈門炭治郎は死んだ、そして次に死ぬのはお前達だ」

空中から腕をしなければ四人に攻撃をする、義勇と実弥二人同時に刀を振り腕を弾きながら間合いを一定にする。

「てめえ等あ！迂闊に間合いにはいんなあ！」

「わかっている」

「それしかあるまい」

「皆来るよ！」

攻撃を躲しながら義勇は周りに視線を送ると丁度そこには同期の村田がいた、自身同様錆兎に託された同期が。

「村田!!炭治郎が危ない！急いで胡蝶の所へ運んでくれ！」

「富岡！わかった！」

「させん！」

村田が炭治郎を運ぼうとすると無惨はそれを妨害すべく腕を振るう。

「水の呼吸、拾壺ノ型、凧」

凧を用いて迫る腕を弾くが絶え間なく攻撃は襲いかかる。

「富岡さん！恋の呼吸、参ノ型、恋猫しぐれ！」

「ああ！風の呼吸、弍ノ型、爪々・科戸風！」

四人は懸命に闘うが無惨の攻撃速度は更に上がり続ける。

「クソがあー！」

「なんて奴だ！」

「くっ」

「ぎゃー！」

無惨の攻撃に呼吸を練る間を奪われ更に四人は攻撃を受けてしま
う。

「やはり柱は即死しないな」

(どうしようどうしよう皆が私を守ってくれたのに)

甘露寺は無惨の血の影響を早くも受け動きが鈍り始める。そこへ
追撃が迫るが飛んで来た鉄球と雷が如き剣技によつて弾き飛ばされ
る。

「遅れてすまない！」

「あの俺は帰つてもいいですかね？」

(上弦の参を倒した鬼狩りか)

「彌豆子彌豆子起きるんだ炭治郎が危ない」

今は亡き父炭十郎の呼び掛けにより彌豆子は目を覚ます。側にい
た鱗滝は名前を呼ぶが彌豆子に反応は無い。

「行かなきゃ」

彌豆子は襖を蹴破り屋敷を出るその騒ぎを聞きつけた清十郎と杏
寿郎は鱗滝の元へと駆け付ける。

「何があった？爺さんそれに彌豆子は？」

「竈門妹がいない！」

「彌豆子は起きるといきなり襖を蹴破り屋敷の外へ」

鱗滝の話しを聞き清十郎は大声で叫ぶ。

「輝利哉！ 禰豆子が市街地の方へ向かったらしい！ どうする？」

輝利哉は清十郎の話しを聞き狼狽えるがその場に珠世が現れる。

「珠世さん？」

「禰豆子さんは大丈夫です、私も今から市街地へ向かいます禰豆子さんの事はお任せください」

「わかりました、清十郎聞いての通りだ禰豆子は任せよう」

「わかったなら俺達はこのまま警護を続けるぜ」

「頼む」

無惨の攻撃により柱達は防戦一方だった。

（先程から攻撃速度が上がり続けている信じられぬ）

「雷の呼吸、壱ノ型、霹靂一閃！」

善逸、行冥の二人が参戦しても尚戦況は悪化して行く。

（駄目よ速すぎる私が一番最初に殺られる）

甘露寺は無惨の攻撃を感で何とか躲していたが躲す瞬間腕が変形し甘露寺を斬り裂く。

「甘露寺！」

蹲り動けなくなった所に無惨が追い打ちをかけるが。

「させない！ 雷の呼吸、捌ノ型、雷光一閃突き！」

「ぬん！ 岩の呼吸、壱ノ型、蛇紋岩・双極！」

二人で同時に型を放ち甘露寺に迫る攻撃を弾く。

「伊黒さーん！ 今です！」

霹靂一閃を放ちながら伊黒に声をかける、伊黒は即座に甘露寺を横抱きにし治療の指揮をとるしのぶの元へと向かう。

「舐めんなあ！風の呼吸、弐ノ型、爪々・科戸風！」

「水の呼吸、肆ノ型、打ち潮」

「岩の呼吸、参ノ型、岩軀の膚」

「雷の呼吸、漆ノ型、雷光一閃！」

伊黒が一時離脱した瞬間に四人同時攻撃をし無惨を弾く。

「死にかける者など放っておけばいいものを全くもって理解出来ない」

無惨が呆れながら喋り始める、四人は二本の腕を弾きながら喰らい付いている。

「人はな支え合うから生きて行けるんだ！それをわからないお前には絶対に負けない！」

「へっ！言うじゃねえかあ！我妻あ！」

「良く言った」

「善逸の言う通りだ！喰らい付くぞ！不死川！富岡！」

「くだらん！」

伊黒は甘露寺を抱えたままの状態で裏路地を走りしのぶの元へと辿り着く。

「胡蝶！甘露寺を頼む！」

「伊黒さん！わかりました蜜璃さんはお任せください。死なせません絶対に」

「待って伊黒さん！私はまだ闘えるお願い待って！」

しのぶに甘露寺を預け伊黒は無惨と闘っている皆の元へと戻ろうとするが、腕を掴んで甘露寺は泣きながら懇願する。

「甘露寺皆が俺を待っている行かせてくれないか？」

「駄目よ！駄目！死なないでお願い皆にも死んでほしくないの、私ね伊黒さんに伝えなきゃいけない事があるのだからだから」

「蜜璃頼む」

不意に甘露寺の手を握りしめ固まった隙をつき伊黒はその場を去る。

「伊黒さーん！伊黒さーん！」

「蜜璃さん先ずは怪我の手当を命に関わりませう」

しのぶは齒を食いしばり甘露寺の手当てに入る。

（もし鬼がいなかったらどれだけの人が死なずに済んだだろうか？、そして平和な世界で君と出会えてたら俺は君と……嫌俺では無理だろうな俺の中には人を人共思わない一族の血が流れている。君に思いを告げるには一度死んでこの血ごと入れ替えなくては行けないだろう、死ぬのなら無惨を倒して死にたいそして平和な世界でもう一度人として産まれる事が出来たなら）

「甘露寺蜜璃、君に必ず好きだと伝えたい」

無惨は腕から発生する衝撃波を休む間もなく打ち続け四人の体力を奪いにかかるがその場に甘露寺をしのぶに預けた伊黒が戦線復帰すると同時に素早い動きで無惨の肩に刀を振り下ろす。

「必ず貴様を討つ！無惨！」

「いきなり現れて何の真似だ？馬鹿め」

伊黒に目掛けて腕を放つが不死川と善逸がそれを阻止する。義勇はすかさず伊黒の刀に自身の刀を撃ち付ける。

「富岡貴様」

「伊黒斬るぞ」

「はあああああああああああああああ！」

二人の刀が火花が飛び交う程摩擦しあい段々と刀が赫く染まり無惨の右肩を斬り落とす。

(馬鹿な私の身体に刃を通すだど!?あの刀の色は目障りな!!)

刃が赫くなった事に驚く伊黒、義勇。

(この刀の色は確か鴉からの情報によれば緋村も刃を赫くしていたとか、恐らく奴とはやり方を違うだろうがこれなら!)

「富岡！」

「わかっている！」

型を放とうとするが二人は否五人は無惨の毒の影響を受けていた、だが何処からともなく注射器が現れ五人に刺さる。

(これは……………何とか毒の影響が和らいだ!)

伊黒は影響が和らいだのを確認し型に入る。義勇もそれに続く。

「蛇の呼吸、伍ノ型、蜿蜿長蛇」

「水の呼吸、拾ノ型、生生流転」

二人の流麗が如き剣技で無惨の腕を斬り落として行く、即再生は僅かだが再生速度が落ちていく。

(あの赫い刃、推測だが二人の刀がぶつかり合う熱により刃は赫くなったのだろうか!)

二人の赫刀により余裕が出来た事で行冥は自身の刀斧と鉄球をぶつけ合う。

(手に熱を感じる赫くなった!これなら攻撃力は上がる!)

行冥も二人の猛攻に加わって行く。

「我妻あ!行くぞ!受けろお！」

「え?ちよつと不死川さん俺が赫く出来る訳」

善逸と不死川も刀をぶつけ合い刃を赫くする。

「風の呼吸、壱ノ型、塵扇風・削ぎ」
「雷の呼吸、壱ノ型、霹靂一閃」

二人の突進により無惨の左足は斬り落とされずかさず行冥、伊黒、
義勇が攻撃を放つ。

「カアカア夜明け迄後一時間五分！一時間五分カア！」

「へ！余裕だぜえ！行くぜ風神と雷神のお通りだあ！」

不死川と善逸は同時に無惨へと再び攻撃を仕掛けて行く。

人の域を超えし者

五人全員が刃を赫くし無惨の身体を斬りつける。
(つち流石に五人全員が刃を赫くされては面倒だな)

無惨は腕の再生速度を早め攻撃を続けて行く。

「いい加減てめえの攻撃にも慣れてきたぜえ！おらあ！」

「雷の呼吸、捌ノ型、雷光一閃突き」

鋭い風を帯びた斬撃が無惨を斬りつけ雷が如き剣技で左腕を斬り裂いて行く。無惨は二人に攻撃をしようとするが。

「水の呼吸、参ノ型、流々舞い」

「蛇の呼吸、参ノ型、峙締め」

死角をつき義勇、伊黒が更に無惨の身体を攻撃し一瞬動きを止めた所に行冥の鉄球が胸元を抉る。

「……………」

「カナヲ！ちゃんと皆に薬を注入出来たわね？」

「出来たわ！しのぶ姉さん！他にする事はある？」

「おい！しのぶ！俺もあのキモい鬼と闘いてえ！」

「お館様からの指示に従いなさい！貴方達は強いけど柱達は皆連携をとっているの行っても邪魔になるわ！」

しのぶの言葉に黙る伊之助。

「でも紋壺だつて命を賭けて闘ってるのに親分のオレガ」

「伊之助悔しいのは伊之助だけじゃない此処で治療をしている隠、他の隊士達も悔しいんだよ」

「ウン」

「カナヲは炭治郎君に呼び掛けあげて！伊之助君も！」

しのぶの指示を聞き、二人は愈史郎の治療を受けている炭治郎の元

へと駆ける。

柱達の鬨いを隠達は離れた所で固唾を飲んで見守っている。隠達は皆思った、このまま無惨をこの場に留める事が出来るのではないかとだがそう考えた次の瞬間突然大きな地震が起きた、隠達が顔を覗くと。

柱達は吹き飛ばされていた姿が見えない為生死もわからない。

「よく頑張ったが所詮は人間つまらぬ幕切れだったな、ん？」

無惨は吹き飛ばした方を見ると、不死川はまだ立ち上がろうとしていた。

「ほうあれを喰らってまだ立てるかだが無駄だ、お前は死ぬうどうだ？ 鬼にならないか？ 私の手駒にしてやろう」

「誰がなるかあ！クソがああ！」

「ならば死ぬ」

腕を不死川に向かって放つ、不死川は怪我の影響からか上手く身体を動かせないだが。

「兄貴！」

間一髪の所玄弥が実弥を助ける。

「玄弥てめえ、一人で何しに来たあ？馬鹿があ殺されるぞ」

「兄ちゃん俺一人じゃないよ！」

無惨の腕が二人に迫るが一人の剣士が二人の前に現れ腕を赫刀も

無しに容易く斬り刻む。

「実弥さん、そして皆俺が来るまでよく堪えてくれた後は任せろ」

「剣心……………遅えんだよてめえは」

「玄弥、実弥さんをそして隠達と協力して他の皆を」

「わかりました！頼みます」

（赫刀も無しに私の腕を斬れるかなる程、黒死牟を倒したただけはある様だな）

「どうした？自慢の硬い身体を豆腐の様に斬られた事に動揺してるのか？」

「こんな傷にもならぬ事にいちいち動揺などしない、それにしても貴様は随分とゆっくりな登場の仕方だな」

「まあなお館様の指示には逆らえまい」

「貴様は出て来るべきではなかったな貴様を殺せば文字通り鬼殺隊は崩壊する」

「違うな崩壊するのはお前だ無惨」

剣心はゆっくりと無惨へと近付いて行く。

「龍の呼吸、参ノ型、龍翔閃」

「！」

神速の斬り上げにより無惨の右腕は斬られるが、赫刀でないが故に

腕は即再生するが。

「龍の呼吸、捌ノ型、双龍閃」

鞘を使い即再生を阻止する。そのままその場で腕を斬っては鞘を使つての繰り返し膠着状態になる。

「どうした？このまま続けて行けば体力切れを起こすぞ？」

鞘と剣の波状攻撃を強めて行き一気に無惨との距離を詰めて行く。無惨もそれを防ぐ様に腕の攻撃速度を早めて行くが剣心は一步早く懐へと入る。

「何も斬るだけが剣士の闘い方だと思ふな」

「何だと？」

「龍の呼吸、捌ノ型、双龍閃・一閃」

斬撃を周囲に細かく放ち胸元に鞘を思いつき突き出し近くの建物に無惨を吹き飛ばす。これには離れた所で見えていた隠や隊士達もはや剣心は人の域を超えているそう感じた。

「包帯を用意して！柱の皆さんを用意した布団の上に寝かせて！」
しのぶは一人隠、隊士、カナヲ達に指示を出し医療現場の指揮をとる。絶えず激しい衝撃音が聞こえ剣心の身を案じながら一人奮闘するがやはり指示が間に合わなくなる。

(糞一人では柱の皆さんを……………どうすれば)

「私も手伝います。蟲柱様ご指示を」

凜とした声が辺りに響く、しのぶが振り返ると姉胡蝶カナエがい

た。

「姉さん」

泣きたくなるのをぐっと堪えてしのぶはカナエに指示を出し二人で柱の治療に入る。

「炭治郎！炭治郎！眼を覚ましてよ！お願い！」

カナヲは必死に炭治郎の名を呼ぶがまだ意識は戻らない。

剣心は無惨を飛ばした方へ歩いて向かっていた。

「おいお前の力がこの程度では拍子抜けだぞ？」

その瞬間建物は吹き飛び中から怒りの表情を浮かべる無惨が出て来た。背中にも八本の触手を纏い。

「舐めるなあ！私をよっほど怒らせたい様だな！」

腕と触手を同時に放つ剣心は一旦無惨との距離を取り建物の壁を走り攻撃を回避する。

（壊した建物はお館様が何とかするだろう、それにこの付近一体に人の気配はないか）

「龍の呼吸、陸ノ型、土龍閃！」

壁を走りながら一瞬壁に立ち衝撃波を建物に放ち、無惨が立っている方へと倒す。

「こんな物で私が止まるかあ！」

腕、触手を使い迫る建物を破壊するが、無惨は剣心の姿を見失う。

（奴はどこだ？逃げたか？）

「龍の呼吸、拾壺ノ型、戦乱龍撃閃」

瓦礫の隙間から斬撃を纏った突進を喰らい無惨は上空へと翔ばされる。剣心も上空へ翔び追撃を仕掛けるが触手が次々と襲ってくるが上空で拾ノ型を駆使して躲す。

「つち！ならばあー！」

腕を伸ばし建物の一部を剥ぎ取り剣心へ向かってぶん投げ、剣心は地上へ降り避ける。

「人の真似を」

「黙れ！」

再び地上戦になる剣心は迫る攻撃を避けると言うよりも勝手に身体が反応する。即ち上弦の鬼と闘ったあの状態になっている。

(妙だな奴の避け方まるで勝手に避けている様に見える)

触手と腕を束ねて放つが難なく躲す。

「龍の呼吸、式ノ型、龍牙閃」

突きを放ち胸元を抉るがそれは無惨の罠だった。

(勝手に身体が反応するのならば、反応出来ない攻撃をすればいいだけ！)

パギヤと歪な音と地鳴りが発生し剣心の腹と肩に無惨の攻撃が当たる。

(足からもか何処からでも触手が出せるのか)

剣心は飛ばされるが刀を地面に突き刺しブレーキをかけその場で止まり、無惨の位置を確認しようとするが触手が迫ってくる。

(休む間も無しか)

上空へ翔び避けようとするが。

「馬鹿め！死ぬがいい!!」

全方位回避不可能の攻撃を放ち勝利を確信する。

「龍の呼吸、伍ノ型、龍巢閃」

全方位の攻撃を全て斬る。

(何！だが何度斬ろうが私の身体は……………何だと再生

が)

無惨は驚愕の表情を浮かべながら剣心の方を見る。そこには頬に龍の痣を浮かべ赫刀を発動している剣心がいた。

「行くぞ無惨、身体の再生は終わったか？」

「減らず口を言うその頭蓋一つたりともこの世には残さん！」

「カアカア夜明け迄、五十分！五十分！カア！」

意志

俺は握っている刀を見つめていた、無惨の止む事の無い攻撃の最中にだ。

(この刀の色は今の俺の心を映している様だな)

俺の心、即ち燃える様な憤怒の思い。

「龍の呼吸、参ノ型、龍翔閃！」

背中に生えている細い触手が四本重なる瞬間を読んで、一気に斬り上げる。

「これは」

斬られた四本の触手が即座に回復しない事に気付く。奴の赫刀は他の柱達とは比べ物にならない、奴の斬撃を喰らうのは避けねば。

そう無惨は考え。徐々に再生している触手は無視し、無事な触手で攻撃を続ける。

「どうした？俺に懐に入られるのがそんなに怖いか？」

そこら中に転がっている破片を飛ばし、剣心との距離を保つ無惨。完全に硬直状態に入る。飛んでくる破片を鞘を使って叩き落とし刀で攻撃しようとするが触手でそれを阻まれてしまう。

「怖い？この私が？あまり良い気になるなよ！人間が！」

挑発に乗った無惨は全ての触手を俺に目掛けて何の工夫も無く、放ってくる。

「貴様もあまり人間をなめるな。龍の呼吸、拾式ノ型、戦乱龍撃閃」

突進乱撃を無惨の肉体に食らわす。無惨は一瞬怯むが直ぐに雄叫びを上げ、衝撃波を全体に放ち剣心を近くにある建物に吹き飛ばす。

「つち、この傷は暫く治らんか、つくづく腹立たしい、貴様は鬼にはせん今この場で殺してやる！」

無惨は瓦礫に埋もれている、剣心へとドメを刺そうと触手を放つが。

「日の呼吸、輝輝恩光」

火柱が上がったかに思えた瞬間、無惨の触手は全て斬り落とされていた。そして炭治郎は。

「遅くなりました。剣心さん」

そう炭治郎が呼びかければ。瓦礫の中から額から血は流れているが、俄然殺気に満ちている剣心が姿を現す。

「遅すぎる、危うく俺一人で全て終わらせる所だったぞ」

俺は片目が潰れて、尚復活を果たした炭治郎を見て戦いの最中であるがニヤリと笑う。炭治郎は無惨を見て告げる。

「終わりにしよう、無惨」

「竈門炭治郎!!!」

「カナヲ涙は止まった?」

しのぶは二人が死闘を繰り広げている、広場を祈る様な格好で立っているカナヲに声をかける。一通り怪我人の処置が終わったからだ。

「止まりません、しのぶ姉さんも泣いてるじゃないですか」

「あれ？本当だ、何でだろうこんな時、涙が止まらない」

しのぶの頬にも涙が流れる。自分でもその理由は分かっている。ただ無事で帰って来てほしい思いはそれだけなのだから。カナエも二人の様子を泣きながら見ながら、気を失っている夫実弥の手を握り語りかける。

「実弥君、貴方の友が今、戦っているわ、ずっと一緒に戦いたがっていたでしょ？早く起きないと駄目だよ？」

「日の呼吸、烈日紅鏡」

無惨の触手を炭治郎が全て斬り、剣心が剣戟をぬって無惨の胴を斬り裂く。剣心は改めて炭治郎の使う日の呼吸を見て思う。美しいと、そして思う。始まりの呼吸と呼ばれる事はある直ぐにその型に合わせて攻撃を放つ事ができる。と。

「つち、まさかこの小僧もか」

炭治郎の刀も赫刀になっている事に気が付く、私は知っている。人は命の危機が迫る時普段は閉じている扉を開く事がある。開く事ができた者は強靱な強さを手にし、開く事ができなかつた者は死ぬ。竈門炭治郎も恐らくはその扉を開けたのだろう。

「考え事か？、龍の呼吸、伍ノ型、龍巢閃」

連撃を心臓と脳、三箇所斬られ、無惨は苛立った表情を浮かべながら剣心を腕の触手を用いて攻撃しようとするが。

「させない！日の呼吸、碧羅の天」

炭治郎が背後から攻撃を加える。無惨は剣心に対し両腕で攻撃し、剣心を後退させる。

後ろに飛ばされた剣心が体制を立て直し、顔を上げると炭治郎の全方位に触手が迫っていた。

(不味い、あの量の攻撃は幾ら炭治郎でも)

「炭治郎!!」

「先に貴様から、殺してやる竈門炭治郎!」

攻撃が当たる瞬間に誰かが、炭治郎を横抱きにし回避に成功する。炭治郎は驚き、剣心も似たような表情をしている。

「死にぞこないが」

「伊黒さん、すみません助かりました。」

炭治郎と共に無惨から距離をとる、二人だが無惨は休む間もなく攻撃をする。伊黒が僅かに反応が遅れた、瞬間、剣心は無惨と撃ち合いを再開していた。

「俺も続く!、日の呼吸、円舞」

伊黒は二人に続く為に刀に力を込める。あの二人刀は赫刀になっている、無惨と戦う最低条件だろう。

「だが俺は俺のできる事をする。蛇の呼吸、伍ノ型、蜿蜒長蛇」

無惨は伊黒の攻撃は気にも止めず、剣心と炭治郎への攻撃を続ける。伊黒はその事に気付き更に無惨の顔に攻撃しようとする。伊黒は死ぬつもりだった。

その伊黒の心情を理解した、剣心と炭治郎は。

「伊黒! 龍の呼吸、拾式ノ型、九頭龍閃」

「伊黒さん！日の呼吸、輝輝恩光」

二人同時に攻撃し、無惨は苛立った表情のまま後退する。剣心は伊黒に聞く。否聞かねばならない。

「伊黒あんた死ぬ気か？。本当の力は命を捨てる事じゃない、生きようとする強い意志だ、それがわからんならこの戦いに踏み入るな、邪魔だ」

そう剣心は言い、無惨への攻撃を再開する。すかさず炭治郎も。

「誰もが皆、死にたいと思って戦ってるんじゃないやありません、それに甘露寺さんが悲しみますよ？」

甘露寺の名が出ると、ピクリと反応する。

「貴方の事情何て知りません！、でもこれだけは言わせて下さい！甘露寺さんに生きて好きだと伝えろ！」

言いたい事だけ言って、炭治郎も剣心の後を追う。伊黒はその場に一人取り残させる。

「あいつら言いたい放題言いおって」

伊黒も剣心達の後を追う、その最中様々な思考が働く。

（俺は甘露寺の事は考えず、自分の事だけ考えていた様なそうだな）

胸元に蛇を思わせる痣が浮かび、更に手に持つ刀の色も段々と赫くなる。

「無惨は必ず倒すそして、生きて君に好きだと伝える」

そう決意し、剣心と炭治郎の攻撃に伊黒も参戦する。これにはその場にいる者全員驚く。

（伊黒）

「伊黒さん！」

「っちー！またしても湧き出て来たか」

「剣心、炭治郎、ありがとう」

俺はその言葉を聞き伊黒の覚悟を受け取り、三人で無惨をこの場に留める決意をする。

「一人増えたとして状況は変わらん!!」

無惨は触手の攻撃速度を速めるが。

「龍の呼吸、壱ノ型、龍縫閃」

「日の呼吸、烈日紅鏡!」

「蛇の呼吸、壱ノ型、委蛇斬り」

剣心は上空から、炭治郎は正面から、伊黒は下からそれぞれ攻撃をし、更に絶えず連携を取り無惨の攻撃速度に対応して行く。

(馬鹿な……………この速度にもついてくるのか!?)

「カアカア!夜明けまで残り三十分!三十分!カア!」

この鴉の号令に、全員が反応する。何と無惨はその場から走って逃亡をはかる。

「剣心さん!無惨が!」

「剣心!」

炭治郎と伊黒が声を上げる。

「わかってている!、炭治郎と伊黒は奴を追え!」

俺は、倒れている隊士達の刀を手取る、隊士に使わせてもらいまずと許可を取り、赫くなった刀を何本も無惨に向かって投げる。

「龍の呼吸、肆ノ型、飛龍閃!」

無惨は走りながら、近付いて来た炭治郎と伊黒に気が付き迎撃しようとするが剣心の投げた赫刀が無惨の身体に何本も突き刺さる。

(ぐっ……………馬鹿な……………痛み?この私が痛みを感じるだど!?)

「日の呼吸、輝輝恩光」

「蛇の呼吸、弍ノ型、狭頭の毒牙」

怯んだすきに二人で攻撃を加え、更に剣心も斬撃を入れ三人で猛攻

を仕掛けていた時だった。

「お兄ちゃん……………」

無惨と剣心達の前に現れたのは、炭治郎の妹禰豆子だった。